
最弱国家の魔王様

誉人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最弱国家の魔王様

【Zコード】

Z0702Y

【作者名】

誉人

【あらすじ】

大学二年生、二十歳の誕生日を迎える浅間霧は、自分を祝ってくれるという人たちの元へ向かおうと玄関を出た。しかし彼の足は地を着くことはなく、真っ暗な世界へと落ちてしまう。明るくなつたその場所では自分のことを「坊や」と呼ぶ美女と、その後ろに跪く男一人の姿があった。だが彼はその女性も、男一人の姿も見たことがなかつた。突然異世界に召還された彼は魔王としての生活を余儀なくされる。

プロローグ

暗い部屋があつた。

百人は優に入れるであろう石造りのその部屋は、入口から奥に至るまで左右対称の柱が並んでいる。柱の一本一本にはその国の国旗であるうものがかけられており、室内に灯されたロウソクの光をゆらりゆらりと反射している。柱の間には道を示すための赤い絨毯が敷かれており、それは奥にある階段まで続いている。

階段の上、元は王座が置いてあつたその場所には、今は血で記された魔方陣があつた。その周囲を囲むようにして、三つの人影があつた。一つは女もので、二つは男のものだつた。女は魔方陣の前に跪き、両手を組んで何かを唱えている。傍に立つ男二人と、それを見守るかのように階段下では数十人の人影が黙してそれを見つめている。

その儀式は肅々として、だが確かな熱気を伴つて室内の空気を支配していた。

「

と、女が突然立ち上がつた。しばらく目を閉じたままだつた女は、掌を上にして男の一人に手を差し出した。男はそれに何も答えることなく、懷から一本のナイフを取り出した。女も何も言わず、それを受け取ると、逡巡の間もなく、それを掌に突き刺した。だくだと流れ出す血は魔方陣の中へと流れ落ちていく。数秒か、あるいは数十秒か。流れる血が魔方陣の円の中全てを満たしてから、女はようやくナイフを掌から抜いた。男の一人はすぐさまそのナイフを受け取り、もう一人の男は女の手を取り、自分の手をかざした。すると薄ら明るい光が灯り、次の瞬間には女の掌の傷はなくなつていた。

最後に、血に塗れていた手を拭いてから、女は両の手を広げた。願う。

言葉にする。

そして、魔方陣に力が籠もり

その日、浅間霧は一日家に引きこもつているつもりだった。

今年で大学二年生、本日をもつて二十歳を迎える霧は、自分の誕生日くらいは一人でのんびりしたいと考えていた。

元来のものなのか、はたまた何か切っ掛けがあつてそうなつたのかは覚えていないけれど、霧はあまり人と関わり合いになるのが好きではなかつた。人が嫌いなのではなく、人付き合いというものが嫌いなのだ。誰かと一緒に居るということは、何かと気を使わなければいけない上に、気を使われてしまう。霧はそれが非常に煩わしく思う人間だつた。

こんな性格だから、霧は知人友人というものが他の人と比べるまでもなく少なかつた。中高、大学を合わせても、知人と呼べる程度が三人、友人と呼べるのは零だつた。その知人に対して、霧が相手にしないというのに向こうがしきりに声をかけてくるというもので出来上がつた関係であり、それは大学に入った今も続いている。

お人よしとでも呼べるその知人の三人からは、朝からひつきりなしにメールが届いている。内容は、折角の誕生日なのだから皆で集まつてお祝いをしようという、何とも有り触れたものだつた。

当然の如く、霧はそのメールを見なかつたことにした。既に時刻は昼を過ぎようとしている。メールの数もそろそろ二十を超えようとしているが、霧はまるで相手をしようとはしなかつた。

「……はあ」

人間とはよく分からぬ生き物だな、と霧は思った。自分も人間であるはずなのに、自分のことは自分でよく知っているはずなのに、他人の考えていることが霧にはまるで理解出来なかつた。

何故、皆で一緒に居ようとするのか。何をするにも誰かと組んで行い、そうしないものがまるで異物であるかのように扱う。中には自分と同じように他人との触れ合いが苦手な人間もいたけれど、それと自分とは違うと霧は感じていた。彼らは触れ合いというものが“苦手”なのであり、霧はそれが“嫌い”なのである。そこには決して交わることのない一線を画している。

幸いにして一人暮らしをしているこの家の住所は知られていないはずなので、外に出なければばつたりと彼らと会うこともないだろう。そう考えた霧は、今日一日は大学もサボつて家でじろじろしていることに決めていた。

それから、霧は決意通り夕方までじろじろして過ごした。昼ご飯を食べ、漫画を読み、少し寝て、ジュークを飲み、また漫画を読む。仕送りなどという高尚なものはない霧は、テレビもパソコンも買う余裕などはありはしなかつた。唯一自宅にある娯楽といえば、大学一年のころからこつこつと買い集めた漫画本だけだ。

読んでいる本を読み終えて、違う漫画に手を伸ばしたところで、突然霧の携帯が鳴り始めた。霧は着信音を知り合い別に設定していないので、全て同じ音を鳴らす。なので、誰かを確認するには一々画面を確認しなければならない。

多分知人の誰かなんだろうなと霧は内心うんざりしつつ携帯を取り、画面を見た。

「あれ」

そこには知人の名前はなく、霧が高校卒業までお世話になつていた施設の名前が表示されていた。

一般に児童養護施設と呼ばれるそこに、霧は小学校の頃からお世話になつていた。人付き合いが嫌いな霧ではあるが、その施設の人たちには僅かなりの感謝の念を覚えている。流石にこれを無視する

わけにもいがず、霧は一つ深呼吸してから通話ボタンを押した。

「もしもし?」

『もしもし、霧君ですか?』

「はい、そうです」

『ああよかつた。もしかしたら電話番号をえてないかと心配だつたものですから』

電話の向こうからは安堵の息を吐く音が聞こえてきた。髪は白髪で染まり、顔は今までの苦労を刻むかのように皺が寄つている施設の先生の顔を思い出し、何だか途端に申し訳ない気分になった。彼女がどういう理由で電話してきたのかなんて、今日が何の日か、そして彼女がどういう人かを知つていればすぐに予想はつく。だから、本来ならば、霧は自分から施設へと電話をしなければならなかつたはずなのだ。

それなのに向こうから電話をさせてしまつたことに、霧は少しの罪悪感を覚えた。

『そのときはきちんと連絡をいれますから、心配しないでください』

『そう? それならいいんだけど、霧君は昔からあまり人と触れ合おうとしなかつたから……』と、そこまで言つて、先生は言葉を切つた。『ああ、ごめんなさいね、こんなことを言つたくて電話したわけじゃないのに』

『いえ……』

何と答えるべきのか分からず、霧は言葉を濁した。

『ええと、それで、今日は霧君の誕生日でしょ? もしよかつたら施設で小さなパーティーをしようと思つんだけど、どうかしら?』

『パーティーですか?』

『ええ、さぞやかなものでしか出来なくて申し訳ないんだけど、霧君さえよければと思って。それに、霧君が来てくれると子供たちも喜ぶと思うの』

「……」

霧は咄嗟に言葉にしそうになつた否定の言葉を噤んだ。如何に霧が人付き合いを嫌おうとも、長年お世話になつた人に対する礼儀くらいたを持ち合はせている。それに、先生が言うように、自分が行けば子供たちは喜んでくれるのだろうという考え方も言葉を噤んだ理由でもあつた。子供というのは本当の意味で気を使わない関係を持つる、希少な人間だと霧は認識している。彼ら、あるいは彼女たちと遊んでいるときだけは、霧は無駄な柵を感じなくて済むのだ。

しばしの間悩んで、霧は口を開いた。

「……わかりました。じゃあ、少しだけお邪魔しようと思ひます」

『あら本当に？ よかつたわ。それじゃあ、えつと。霧君は何時から大丈夫かしら？』

「先生たちさえよければ何時でも大丈夫ですが」

『そう？ それじゃあええと……あまり遅くてもいけないから、七時半に施設に来てもらえるかしら？』

霧は時計を見た。まだ時刻は夕方の五時半を過ぎたあたりだ。今から準備をして施設に向かってもゆとりは十分にあつた。

「分かりました。じゃあ、その時間にお邪魔しようと思ひます」

『ええ、楽しみに待つてるわ。ああでも良かった。霧君はこういうの嫌かと心配していたから……』

「嫌いではあるかもしませんが、それも相手によりますよ」

ここにきて、霧は初めて笑つた。電話越しではあるけれど、それは先生にも伝わつたらしく、安心した声が返つてくる。

『ええ、ありがとう。それじゃあ、待つてるわね』

「はい、それじゃあまた後ほど」

電話を切つてから、霧は布団の上に倒れこんだ。一Kの部屋に万年床となつてている布団は、少しの埃を巻き上げながら霧の身を受け止めた。

「誕生パーティー、か……」

両腕を額の上に持つてきて、咳く。目を閉じると、施設でお世話

になつた日々が思い浮かんでくる。嫌でも、面倒だとも思つていな
いことに、霧は何故か安心する自分を感じていた。

少しの間、そうして時間を潰していた霧だったが、目を開けると
起き上がつた。少しばかりお邪魔するとはいつたが、きっと子供た
ちが寝付くまでは向こうにいることになるだろう。そう考えると、
先にお風呂に入つていた方がいいかもしない。あとは、何か子供
たちへのプレゼントも用意していた方がいいのだろうか。そんなこ
とを考えながら、霧は出かける準備を始めた。

一時間ほどして、準備を終えた霧は玄関を出た。ここから施設ま
では歩いて大体三十分程度の距離しかない。今の時刻はまだ六時四
十五分なので、十分に時間はある。鍵をしっかりと閉めたことを確
認して、階段へと足を向ける。一階建てのこのアパートは一人暮ら
しの人向けらしい作りをしていて、鉄製の階段も一人しか通れない
程度の狭さだ。それに勾配も急で、暗くなつてると足元が少々不
安になつてくる。

霧は足を滑らさないよう手すりに手を置きながら足を踏み出し
て。

落ちた。

「あ

」

足が何も踏めないときに感じる浮遊感が体中を襲う。咄嗟に手す
りに伸ばしたはずの手はしかし、何を掴むこともなくすり抜けてし
まつ。

やばい。

このままではこの急な階段を転げ落ちてしまう。

「

咄嗟に思い浮かんだのは施設の先生、子供たちの顔、一緒に育つ
た施設の仲間、そして 幼いころに亡くした母親の姿だった。

次の瞬間、霧は薄暗かつた周囲が真っ暗になるのを視界で確認し
た。頭でも打つたのだろうかと思つ間もなく、霧の意識は落ちて行
つた。

薄暗い部屋の中に、魔方陣から発せられる途轍もない光が満ちる。

成功した、と女は思った。魔方陣に最も近い位置にいるというのに、その眼はしっかりと見開かれて今か今かとその時を待ちわびている。それは女の傍に立つ二人の男も同じことだった。片や己の忠誠を誓うべき人物の再来に心躍らせ、片や己が尽くすべき人物の到来に胸躍らせてはいる。それは階段下で経緯を眺めているだけの者たちにもあるのだろう、どこかざわめき立つ空気が湧き上がっている。

光はどんどん強くなり、ついに女も男一人もあまりの眩しさに目を閉じた。

そうして光の強さが最高潮に達したその時　彼は現れた。

広間だけではなく、城全体が慄いたかのように揺れた。それは主人の到来を喜ぶ歡喜だったのか、それとも再来を恐怖する震えだったのか。

「…………ここは…………？」

声が聞こえた。どこか幼さを残した男の声だ。それに反射するようにして、女と男二人、広間に集う人影は一斉に目を空けた。

「おお…………」

最初に声を上げたのは女だった。魔方陣にへたり込むようにして座るその男を見て、彼女は溢れ出す涙を隠そともしなかった。男二人は己の出せる最高速で片膝を着き、頭を垂れた。それにつられてようにして、広間の人影も慌てて各自が膝を着き始めた。

いや、その中で一人だけ、広間の最前列に立つ一人の人物だけは、何か信じられないものを見たかのような表情で王座の位置を見つめている。

「あひ……ひいっ！」

そう叫びながらその人物は逃げるかのよにして尻もちをついて後ずさり始めた。

しかし、今はそんな人物に意識を取られるものはいなかつた。檀上にはこの十年彼らが待ちわびた人物が存在しているのだ。例え今わめいている人物が国の中であれなりの力と発言力を持つ人物であろうとも、意識を取られるには至らなかつた。

壇上では、へたり込んでいた男がゆっくりと立ち上がつた。それに合わせる様に、女も立ち上がつた。

「おお……おお……」

「ちょ……なんだ？」

女は魔方陣の中に立つ男に近づくと、まるで愛でるかのように手をさしのばした。ゆっくりと、ゆっくりと、確かめるように近づき、その頬に触れる。

突然現れた男 浅間霧はその手を掴むと、距離を取るように一步後ずさつた。

「何だ？ お前は誰だ？ ここはどこだ？」

疑惑と戸惑いの視線を向ける霧に対し、女はまるで聞いていいないかのよう霧へと近づく。

そうして、霧にとつては青天の霹靂となる言葉を吐くのだ。

「ああ、私の坊や……！」

「な……！？」

咄嗟に抱き着かれた霧はしかし、見た目にそぐわない女の力に振りほどくこともできず、それ以前に、彼女が吐いた言葉の意味を必死に理解しようと努めた。

だが、霧には自分に抱き着く女を見たこともなければ名前を聞いたこともない。凜とした声は初めて聴くものであり、外見を見ずに

声だけを聞いたならば小学生かと勘違いしていただろうほどに、美しい。また、彼女の外見は声に負けず劣らずの容姿をしているようだ、胸元から自分を見上げてくる容貌はきっとこんな状況でなければそういうことに無頓着な霧であっても胸を高鳴らせていたことだらう。

「先ず自分を害そうとしているわけではないと理解した霧は、女から視線を外して周囲を見た。すぐ傍には男と思われる二人の人物が膝を着いて頭を下げている。その向こう側、階段の下を見下ろすと、同じように膝を着いた人影が列をなして頭を下げていた。

いや、たった一人だけ、薄暗くてよく見えないが、その中でもたつた一人だけ何故か逃げるようにして後ずさっているのが確認できたが、それがどんな顔をしているかまでは分からずじまいだった。

「……」

田の前の女性は未だ抱き着いたまま、近くにいる一人も頭を上げようとはしない。

どうしたものか。

その答えを出せる者がいるのならば今すぐここに現れてほしい、そう願う霧だつた。

プロローグ（後書き）

小説家になろうでは初投稿になります。

拙い文章ですが少しでも時間つぶしに使っていただけた幸いで
す。

また、初めての投稿システムなのでわからないことだらけですが
何か投稿ミスがありましたらその都度直していくと思いますので
よろしくお願いします。

「おかーさん！」

そう叫んだ少年の声は、相手に届くことはなかつた。何故なら、それを聞く相手の命は既にこの世から失われていたからだ。

少年には友人と呼べるものがいなかつた。兄妹も居なければ父親も居なかつた。その代りと言わんばかりに、常に母親が傍らに居てくれた記憶だけがある。どうして自分には周りの子供たちと同じ環境がないのだろうかという疑問は抱いたことがある。けれども、それによると、母親と二人暮らしが当然の生活を送つていたし、周囲と馴染めなくて悩んでいるときも母親が相談に乗つてくれていた。小学校に上がつても夜泣きが酷かつた少年に、母親は何も言わずただ一緒に起きて夜を過ごしてくれた。

少年にとつて、母親とはこの世で生きていく上で決して欠かせない存在だつたのだ。

なのに、真っ白な部屋の中でその母親は少年の声に耳を傾けてくれることはなかつた。

ただ黙して目をつむり、静かに眠りについているだけだつた。

「おかーさん！」

少年は叫び続けた。母親の体を揺すり、手を掴み、胸元に顔を押し付けて泣き叫んでも、しかし母親は何も返してはくれなかつた。

そうして、唯一の保護者を失つた少年は施設に入れられることになる。居るかも知れない親戚の顔は一度たりと見て見たことはなく、母親が居なくなつてからは施設の先生たち、そして共に育つた施設の子供たちだけが家族と言えたかもしれない。

けれど、少年は決して譲ることのない信念を持つていた。

そう　彼にとつて、家族と呼ぶ人間は母親ただ一人であると。

連れて行かれた部屋は、一言で言つなら簡素といつ言葉がそのまま当てはまるかのような場所だった。窓は等間隔で三つ設置されており、全て出窓の押し開くタイプになっている。入口から正面には大きめの丸型テーブルと、それを挟むように二つの椅子が置いてある。更に入口から見て右斜め正面、部屋の隅には一人用のシンプルなベッドが一つ置いてある。

部屋の中にはあつたのはそれだけだ。

「ここが歴代魔王様が暮らしていた私室でござります」

女の後ろに控えていた一人の男がそう言つた。霧はそれに反応することなく、ただ部屋の中をじっと眺めていた。

あれから……

霧は突然の状況にどうしたものかと悩んでいたが、自分から何か行動を起こすことはしなかった。一体何が起きたのか脳が理解に追いついていないというのもあつたし、抱き着いてきた女性が何もさせてくれなかつたというのもある。結局、控えていた男の一人がその場を宥め、階段下にいた集団を解散させるまで霧はそのままの状態を維持していただけだった。

そうして何かを言いたげな女を説得し、一先ずということで連れて行かれたのが男曰く『魔王の私室』だった。

とにかく、今は状況を整理することが一番の重点だと霧は考えた。しかし、一体どこから状況を整理していくべきのか分からぬのが問題でもあつた。部屋に連れてこられる間に、何を聞くべきか、自分はどうするべきかを悩みぬいた霧ではあつたが、部屋に着いてその中に入るころにはその悩みは解決していた。

これは従来、霧が持ち合わせている性格によるもので、彼はある一定以上の難しい問題があると流れに身を任せた癖があつた。悩んでいても結論が出ないのであれば、悩むことを止めればいい。簡単に言つて、霧は面倒くさいことが非常に嫌いであった。

自分はこれからどうなるのか、考えればキリがないが、考えなけば勝手に向こうが説明してくれることだろう。幸いなことに、男の一人は自分から説明係を請け負つている様子なので、こちらが何の反応も返さなければ勝手に色々と教えてくれるだろう。霧はそう考えていた。

「どうぞ魔王様、そちらの席にお座りください」

男が手で示したのはこの部屋にある二つだけの椅子の奥側だつた。言われるがままに、霧が奥側にある椅子に座ると、女はその対面に座つた。その後ろに男二人が並び立ち、霧を見た。不躾とも取れるその視線に若干の居心地の悪さを感じたものの、やはり霧は何も言うことはなかつた。その視線よりも、正面に座る女性の熱い視線の方が煩わしかつたのだ。

「それでは、魔王様……の前に、一つだけ確認を取らせていただきたいのですがよろしいでしょうか？」

「……それは俺に言つてるのか？」

「はい、左様でござります」

男の一人 痩躯に片眼鏡をかけた男は丁寧な仕草で頷いた。対して霧も頷きを返すと、男は満足したかのよつに微笑んで口を開いた。

「魔王様は、どこまでこちらの世界について覚えてらっしゃいますでしょうか？」

「は？」

思わず霧の口から洩れたのは、呆れだつた。

「まで、何を言つてゐる？」

「はい。ですから魔王様は」

「その前に、その魔王様というのは何だ？ 何故俺のことを魔王な

「など呼ぶ？」

『……』

心底疑問の声を上げる霧を見て、何故か女は落胆の表情を浮かべ、片眼鏡の男は納得の頷きをし、もう一人の男は無表情を貫いていた。

「なるほど分かりました。魔王様はこちらの世界について何一つ覚えてらつしゃらない、ということで相違ないでしょうか？」

「だから……ああ、もういい。そうだ」

色々と言い返したいことが湧き上がってきたが、ここで喚いても何の進展もないことを察して、霧は口を閉じた。

それから、少しの沈黙があった。その間に、霧は改めて自分と対面する三人を眺め見た。

先ず女だが、黄金色に輝く髪の毛を頭の後ろの辺りで纏めているが、それなりの長さを持つのか肩口にまで垂れている。肌の色は黄色人種に近いとも取れるが、どちらかと言えば欧米の白人の肌に近いようだった。非常に整った容姿をしていて、その瞳はハワイアンブルーのように澄んだ色をしている。

次に片眼鏡をかけた男。男の肌の色は淡い紫の色をしていて、霧はこんな肌の色をした人間をこれまで見たことがなかつた。テレビで見る黒色人種の人たちはもつと真っ黒な肌の色をしていたが、この男の肌の色は少なくとも地球上では存在しないだろう。髪の毛は縮毛矯正をかけた髪の毛を後ろに流したようになつていて、非常にツンツンと尖っている。その鋭さはもしかしたら触れた途端に切れてしまふのではないかと思うほどだった。

最後に、最初から今までずっと無言を貫いている男。男は顔を除いた全身鎧を身に着けていて、腰には剣を下げている。非常に大柄な体をしていて、片眼鏡の男とは顔が三つから四つも身長が違う。首元に大きな傷跡があり、歴戦の猛者というものはこんなものどうかと霧に思わせるほどだった。肌の色は霧と同じ黄色人種のよう見える。

三人が三人、各々違う容姿と特徴を持つていて、こちらに向けてくる視線には似たようなものを感じる。それを気のせいだと決めつけて、霧はこの無言の時間を打ち切ることにした。

「こちらからも聞きたいことがある、いいか?」

「……もちろんです、魔王様」

「まずそれだ。何故俺のことを魔王などと呼ぶ

「それは……」

片眼鏡の男はちらりと女を見た。自分で説明した方がいいものかどうか悩んでいるのだろう。しばらく女が何も反応しないのを確認してから、男は丁寧な口調で喋りだした。

「こちらのことを覚えてらっしゃらないということで色々と疑問はござりますでしょうが、先ずは私どもの説明をお聞きください」

霧は黙つて頷いた。

「では、先ず何故魔王様とお呼びするかについてですが……非常に簡単な答えです。貴方様はこの国の王、魔王だからです」

「……」

最初から言い返したいことを言つてくれる男に、しかし霧は黙つて先を促す。質問をするのは後でも出来るからだ。

男の説明は続く。この国の名前、魔族という存在、そして、目の前の女性が自分の母親であるということ。

この国の名をギリアムというらしい。これは初代魔王がギリアムという名前だったことから由来する。次に魔族という存在。この世界には人間族と魔族、亜族の三種族が存在しているらしく、この国に居るのは全て魔族と少数の亜族のことだった。魔族と亜族は人間族に比べると力が優れていたり、あるいは特殊な能力を使えたりするらしいが、あまりその辺りは詳しい説明がなかつた。霧があり興味を持つていらない様子を見せたのがその理由であろう。

霧が説明の中で最も関心を向けたもの、それは目の前の女性が母親という点であった。

「母親……？」

「はい」

その説明を受けたとき、思わず霧は女性を凝視してしまった。眉根を寄せ、まるで睨みつけるかのような眼光を向けられた女性は、それでもどこか嬉しそうな感情を見せていた。

「魔王様の御名をマギー・G・エクスーム様と申しまして、こちらに御座す方こそ、魔王様の母君であらせられるアミリア・エクスマークワ様でござります」

その説明を受けて、少しばかり同様した自分が居たのを、霧ははつきりと確認した。霧のフルネームは浅間霧あさまきりという。その名前の部分である間霧とマギーの部分に類似を見たのもあるし、マギーという名前にどこか聞き覚えがあるのを感じたからだ。

どうかしている。

霧は頭を振った。もしもマギーといふ名前に聞き覚えがあるのでしても、それはきっとテレビか何かで聞いたに過ぎないはずだ。そうでないと、自分は本当に以前この世界に居たことになってしまふ。だが、それだけはないと霧は断言出来る。何故なら、霧は自分が過ごした二十年間の記憶を確かに持っているからだ。

「悪いが、人違ひだ」

だから、霧はその事実をハッキリと言葉にした。

「俺にはここで生活した記憶などないし、マギー・ギリアムだったか？ そんな名前にも憶えがない。それに

意識して目に力を入れて、霧は女性を見た。

「俺の母親はこの人ではない

」

霧がそう口にした時の女性は途端に涙をこぼした。嗚咽を堪えるかのように手を口元に当て、俯いている。

「王妃様……」

片眼鏡がアミリアといふ女性を気遣つように声をかけるも、女性の嗚咽は強くなるばかりだった。

勘弁してほしい。それが霧の本音だった。一体何がどうなつてこ

んな場所に連れてこられたか分からぬ上に、実は貴方は王様でした、そして目の前の女性は母親でしたなどと言われても納得も理解も出来るはずもない。

「あ、とため息を吐いて、霧は席を立つた。

「帰してくれ。僕は魔王でもなければなんでもない、ただの人間だ」

「いえ、貴方は紛れもない魔王様です。その証拠に」

ちらとアミリアを見て、男は言つ。

「貴方様はここにいらっしゃる」

「なに?」

「魔王様をお呼びした召喚陣は、十年前に魔王様を別世界に転移したものを使ふたものでして、その対象は魔王の血を引くものをこちらの世界に呼ぶというものです。その魔法を使つた結果、現れたのは魔王様、貴方でした」

「……」

「魔方陣は七日の日をかけて綿密に作り上げたものであり、幾度も確認を重ねたのでミスはありません。また、触媒にしたものも、魔王様の血と反応するように王妃様の血を使いました。それによつて導き出されるのは、先代魔王と王妃様の血を引く者、つまり魔王様、貴方しか考えられないのですよ。貴方がここにいらっしゃる、それが貴方が魔王様であるという証明なのです」

それはつまり、どうあっても自分は魔王ということを受け入れなければならぬということなのだろうか。霧は思う。そんな馬鹿らしいことがあつてたまるかと。それに、霧にはもう一つ、自分が魔王ではないという根拠があつた。

「なるほど、その魔方陣が実際どんなものかは知らないが、そっちはそつちなりに俺が魔王だという根拠があるわけだ」

「はい」

「そうか……」小さく笑い、霧は言つ。「ならばそれを否定する材料を与えようか」

「といいますと？」

「まず一つ、魔族は人間よりも強い力を持っているといったな？」

「はい」

「それはつまり、肉体的にも普通の人間より強靭なものをもつていると、そういうことだな？」

「もちろんでござります」

「ではこうしたらどうかな？」

霧は石垣で作られた壁に向かってゆっくりと近づいた。一体何をするのかという視線を向ける三人の前で、霧は思い切り壁を殴りつけた。

「」

強い衝撃が拳に返ってくる。その後に、鈍い痛みがじわりじわりと拳全体に広がってきた。麻痺しているかのような感覚の中に、熱い痛みが霧を襲つた。

「これで、どうだ？　これでもまだ俺は魔王とやらなくなるのか？」

霧は血が滴る己の拳を見せつけるかのように顔の前へ掲げた。

「もしも俺が魔王というのなら、どうしてこの程度で傷を負う？　それとも魔王というのはそんなに弱い存在なのか？」

「いえ……しかし……」

片眼鏡の男は答える窮屈した。彼にとつて、霧が魔王というのはもはや確定的なのだ。魔方陣にミスがないとか、触媒を使ったのが母親の血だからとかそんな理由ではない。彼の家は代々魔王に仕えてきた一族だ。己が使えるのは魔王ただ一人だと妄信的なまでに信じてきたこの一族は、ある一つの秘術を己の血族に用いている。それは、魔王の血を認識する魔法だ。遙か昔、魔王の血を用いて作り出したその魔法は、決して魔王の存在を間違えぬだけに作り上げられたものだ。無論、ここにいる片眼鏡の男の体にもその魔法は使用されている。その秘術がいうのだ。目の前の男は魔王だと。

だが、確かに魔王であるならばこの程度で血を流すのは不自然だ

つた。魔王の体とは例え鋭い刃物で切り付けても切り傷一つつかない強靭なものであるはずなのだ。

どうしたものか。悩む男は、自分の田の前に座る王妃の姿を見た。

王妃は先ほどの涙を堪えながら、ジッと霧の姿を見ていた。しばらく霧を見つめたままだったアミリアは、ハッとしたかと思ひと、片眼鏡の男に命令した。

「坊やの手の治療を」

「はっ」

どうやら自分も相当動搖していたらしいと、片眼鏡の男は思った。魔王が怪我をしているのに、それをただ眺めているなどと、先祖に知られたらならば呪われる程度では済まないだろ？ 男は慌てて霧に近づくと、その手を取った。

「失礼致します」

「何を？」

「今治療を行います故」

そう言って、男は霧の血が溢れる手に、己の片手をかざした。突如淡い光が霧の手全体を包み込む。僅かに驚きの表情を浮かべながら、霧はその様子を黙つて見ていた。光は数秒ほどするとだんだん弱くなり、最後には怪我をする前の霧の手がそこにはあった。

「これは……すごいな」

自分の手をひっくり返しながら全体を見る。そこには流れた血の跡はあっても、傷の形跡は見当たらない。

「ありがとうございます」と

「ライ、ライ・ノライと申します。ライとお呼びいただければ幸いです魔王様」

「そうか。すまないライ。だが、俺は魔王ではないと、今証明されただろう？」

「それは……」

困ったようにライはアミリアに振り返った。するとどうだうどうか、

アミリアは先ほど悲しみの表情はどこかに忘れたかのように呆然とした顔をしている。

「王妃様、如何されましたでしょうか?」

「……いえ。ただ、今まで一つ思い出したのですよ、ライ

「それは……?」

「少し、いいですか?」

アミリアは霧の傍によると、先ほどまでライが掴んでいた手を取つた。

「何をする」

咄嗟に振りほどこうとした霧の手を、アミリアは両手で掴む。「すぐ終わります。少しの間だけ、こいつすることを許してくれますか? 坊や」

「……少しだけだな?」

「ええ」

アミリアは霧の手を両手で掴んだまま、自分の額をそこに当てる様にして俯いた。そのまま呟くかのようにして、何かを口にしている。それが何なのか霧にはまるで分からなかつた。もしかしたら先ほどライが使つたような魔法を唱えているかも知れないが、それならそれで霧にはどんな魔法を使おうとしようとしているのか理解できるはずもなかつた。

しばらくまるで念佛のように聞こえるアミリアの声を聴きながら、霧はこれからのことを考えていた。もし自分が魔王ではないと認められたとして、果たしてこの人たちは自分を元の場所に帰してくれるのであらうかということ。まかり間違つて殺されるということはないと信じたいが、果たして王の一族であるような人たちにこれだけ無礼な物言いをしたのだ、確實に帰れるという確証はない。その場合は何とかしてこの場から脱出し生きていかなければならぬのだろづが……

「坊や、少しだけ、お話をいいですか?」

「……何だ」

「今から十年前、坊やがまだ小さく、そして、異世界へと旅立つた日のことです」

アミリアは滔滔と語る。

「ある日、私と陛下は他国へと出向いていました。とあるパーティーに出席するためです。楽しいパーティーでした。陛下が居て、私が居て、坊やがいる。平和で、安穏としていて、きらびやかに感じる日でした。そうして私たちは帰宅の途についていました。坊やははしゃぎ疲れて眠ってしまい、私もうつらうつらとしていた時のことです。突然陛下が馬車を止められました。何かあったのかと思うと、私は、陛下は言されました」

そこで一息を吐くと、アミリアは顔を上げた。

「『息子を頼む』と、そう仰られたのですよ。陛下の真意を理解できない私でしたが、次の瞬間、陛下は倒れられました。何の前触れもなく、馬車の中に倒れられた陛下は、そのまま息を引き取られました……寿命だったのです。魔王といつもの強大な力を持つと同時に、その生涯はひどく短いのが特徴なのです」

説明は続く。

「国に帰った私は、先ず何をしなければならないかと考えました。国のこと、自分のこと、そして……坊やのこと。坊やはまだ幼かったから、魔王の血を継いでいても、その力を行使する方法を知らなかつたのです。私は考えました。魔王が死んだという情報は隠しきれるものではない。だとしたら、このままではまだ幼い坊やの命も危ない、と。だから、私は急ぎ違う世界への扉を開き、そこに送りました」そう、とアミリアは力強く言った。「坊や、貴方を」「なに……？」

「その時に、向こうの世界で不自由がないこと、私は坊やにある魔法を施しました。それは、こちらの世界のことを一時的に忘れるさせる魔法です」

「……」

「私の名前はアミリア・エクスーケワ。幻の使い手。そして今、貴

方の中に封じられた記憶を開錠しましょう」「う

突如、霧の意識を襲うものがあった。水の中に身を浸したかのような柔らかな何かが、頭を、肩を、腕を、全身を包み込んでいく。

「あ……」

それが足元まで達した時、霧は落ちていく自分を支えることが出来なかつた。

一話（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

ガタン、ゴトンと揺れている。まるで電車のようにも聞こえるその音は、しかし電車の線路の音ほど鋭くはなかつた。聞いたことがない音なのに、自分はこの音を知つてゐる。なんだつたか、と思うと映像が浮かんできた。ゆつたりと流れいく景色は美しいもので、少なくとも日本という国では見ることは叶わないものだつた。広大な草原があり、鬱蒼と茂る森林があり、遠くには巨大な獣の姿があつた。

と、その時突然体が浮かび上がつた。腋に感じる僅かな痛みは、自分が持ち上げられたのを教えてくれた。そのまま自分は外の景色の見える窓から離され、柔らかい感触のする場所に座らせられた。お尻も、背中も、柔らかい。振り返つてみると、そこでは母上が自分を見て微笑んでいた。正面を見ると、父上が自分を見ていた。どうして自分が見られているのか分からなくて、取り敢えず幼い自分は笑つてみた。それをみた父上は僅かに頬を上げ、母上は頭を撫でてくれた。

場面は変わる。

巨大という言葉では足らないほどの大樹があつた。自分と父上はその前に立ち、樹の話を聞いていた。樹が言うには、森を荒らす魔獣が居るのでそれを退治してほしいとのことだつた。父上は頷いてからその魔獣を退治しにいつていた。自分は父上が魔獣を退治する様を、少し離れたところから見ていた。一つ目で一足歩行をするその魔獣は恐ろしかつたけれど、父上はそんな脅威を前にして何の恐れも抱いていなかつた。殴りつけられても、噛みつかれても、父上は黙つてなすがままになつていて、魔獣がとうとう何もしなくなつたときに、少しだけ動いた。少なくとも自分の目には少し動いたようにしか見えなかつたけれど、その僅かな動きで、魔獣の体は吹き飛んでいた。父上というのはすごいんだなあと幼いながらに思つ

た瞬間だつた。

場面は変わる。

田の前では母上が泣きながら何かを言つてゐる。自分は魔方陣の光が発する結界に遮られて、母上が何を言つてゐるのかまるで聞こえなかつた。外に出ようとしても、結界が邪魔をしてそれ以上前に進めなかつた。母上、と呼んでも、母上はただ泣いているばかりでこの結界を壊すことはしてくれなかつた。不思議なことに、自分はこれから母親と別離しようとしているのだなど理解していた。それは嫌だとも思つたが、自分にはどうすることも出来なかつた。何故なら、この結界を壊すほどの力を自分は持つていなかつたのだから。

母上は泣いていた。自分も、泣いていた。そして、自分は違う世界へと旅立つたのだ。

田覚めは突然だつた。ぼやけた視界と頭でゆつくりと覚醒するのとは違い、暗闇から一瞬で明るみへと意識が移る、そんな田覚めだつた。

見覚えのない天井だと思つた。石垣で出来た天井は、何だか陰気くさい空氣を漂わせていたが、見ているうちに段々と趣のある景色にも見えてきた。年よりの家に入ったときに感じる、あの雰囲気に似ていると霧は思つた。最初はただ古臭いとしか感じられないのに、そこに居ると歴史の積み重ねを感じさせてくる、あの空氣だ。

霧は体を起こした。そこでよつやく、自分がベッドの上で寝ていることに気が付いた。同時に、ここが魔王の私室と呼ばれている場

所だといふことも思い出した。自分とアミリアという女性が座つていた椅子には今は誰も座つておらず、部屋の中にも霧以外の人影は存在しなかつた。

どれほど寝ていたのか、窓から入るのは陽光ではなく夜闇がもたらす暗闇だけだった。その代りに、部屋の中にはぼんやりとした明かりがつけられている。ロウソクかとも思つたが、すぐさまそうではないと気づく。部屋の四隅、そしてその点と点の間に数個、明かりは存在していた。それは何かを燃やして出来る明かりではなく、光そのものが光を発しているという、霧自身よくわからないものだつた。けれど光は確かに光として存在し、この部屋の中を照らしてくれている。

霧はベッドから降りた。ベッド脇に置いてあつた靴を履き、窓辺まで近づく。出窓の向こうに見えるのは暗闇の中に浮かぶ光点だつた。何となくは気づいていたが、ここはきっと魔王が住むためにつくられた城なのだろう。そして眼下に見えるのはその城下街だろうか。光点は結構な距離を持つて向こう側まで続いている。まるで祭りのような景色を独り占め出来るのはここが魔王の私室だからだろうか、などと霧はどうでもいいことを考えた。

窓から離れて、少しばかり部屋の中を歩いてみた。何があるわけでもない部屋の中は、やはりパッと見ただけでは陰気な空気を漂わせている。だとうのに、どうしてだろうか、霧はこの空気が嫌いではなかつた。馴染む、とでも言えばいいのだろうか。自分はここ の空気を知つていて、ここに居るのが当たり前なのだといふ氣になつてしまつ。

霧はこれと同じ経験を何度かしていた。それは旅行から帰つた時に感じるものだ。修学旅行などで県外に出ると、新鮮さと同時にどこか疎外感のようなものを感じる。それはきっと間違いではなくて、ただの旅行者でしかない自分は行く街の中で余所者でしかないのだ。そう感じるからこそ、地元に帰ってきたときの、おかえりと言われているかのような空氣を心地よく思うのだろう。

霧がこの部屋に感じているのはもうこつた空氣だった。

「……はは」

霧は笑った。この部屋にそう感じてしまっている自分に対しても、その事実に不自然さを感じていない自分に、堪えられないものを感じた。

霧は先ほど自分が見ていた夢を覚えていた。まるで明晰夢のように鮮明に映し出されたそれらは、霧が知っているものだつたのだ。

「ははは」

右の掌で両手を覆い、椅子に座つた。

夢で見た光景なんて、この一十年間の中で一度たりと見て見たことはない。それは断言できる。霧は確かに一十年を現代の地球は日本で育つたはずだから。

だが、ならばなぜ、あの光景を知つていると思ったのか。霧は眠りにつく前に、アミリアが言つた言葉を思い出す。

『私の名前はアミリア・エクスーケワ。幻の使い手。そして今、貴方の中に封じられた記憶を開錠しましよう』

アミリアはそう言つた。ならば、あの夢は今まで封印されていた自分の記憶ともいうのだろうか。

分からぬ。

それが今の霧に出せる結論だつた。

いつのこと彼らが言つようにここで魔王というものをやるものいいのかもしれない今まで思い始めた。思うだけで決して実行に移そうとはしないが、そんな戯言を考えてしまつぐらうに、今の霧は参つていた。

魔王の私室とほぼ同じつくりをした部屋の中に、三人は居た。

「それで……魔王様の記憶は元に戻られるのでしょうか？」

「それは分かりません」

ライの質問に、アミリアは首を振つて答える。主觀だけで答えるならば、まず間違いなく戻つているというのがアミリアの思いだつた。霧に施していた魔法はあくまでも一時的に違う記憶を認識させるというものなので、そもそも時間さえ経てば解けてしまつていてもおかしくないものだ。それが今日まで継続していることが驚きなのだ。

ほうと溜息を吐く。アミリアの予定では、自分の息子はこちちらに戻つてきたときには既に記憶を取り戻していて、早ければ数日後にも魔王即位の報を各地に飛ばすつもりだつたのだ。それが呼び戻してみれば何故か肉体は人間程度に落ち、記憶は戻つていらない。どうしてこんなことになっているのか、もしかしたら向こうの世界で何かあつたのかと憶測を立てることもできるが、それは所詮想像の範疇を出ることはない。

「とにかく、今は坊やが記憶を取り戻してくれていることを祈つて待つしかありませんね……ライ、坊やはまだ眠りからは？」

「は。部屋の前に待機させている近衛兵からは何の連絡も来ておりません故、まだ眠りに着かれているものかと」

「そうですか……」

一度目を閉じてから、アミリアは何気ない動作で部屋の中を見回した。元々装飾品を好みない魔王は、部屋に必要以上のものを置こうとはしなかつた。無論、夫を差し置いて妻である自分が装飾品類を過度に集めるわけにもいかず、アミリアの部屋は魔王の私室と同じように、侘しさすら感じる様相を醸し出している。

それでも、十年前まではこんな部屋でも明るい空気を発していたころも確かにあつたのだ。遠い昔のように感じる記憶は、今では自分ひとりしか忍ぶ者はいない。けれども、霧が記憶を取り戻してさ

えくれれば、アミリアの悩みは一つ解決するのだ。アミリアは今は亡き魔王に、どうか記憶が戻りますようにと祈った。

「それで……王妃さま、魔王様のことですが……今後は如何いたしましょうか。もし記憶が戻ったとしてですが、何故か魔王様はその力のほとんどを使えないご様子。もしもこのままですと……数ヶ月後に行われる舞踏祭で……それに、記憶が戻らなかつた場合の対処についても考えておかねばならないかと」

「ええ……そうですね……」

そう、もし霧が記憶を取り戻したとしても、使えない力についてどうにかすることも視野に入れておかなければならぬ。

「力」「もしも坊やの力がしばらく戻らない場合、貴方にその件について託すことになりそうですが、大丈夫ですか？」

この場に居るもう一人の男 カコ・イクオールはその言葉に、初めて口を開いた。

「無論でございます」

それだけを言って、カコは静かに目を閉じた。魔王を護るために存在する近衛隊の隊長である彼は、自分の使命を全うする以外の時はあまり口を開かない。それはアミリアも分かっているのか、それ以上を求めようとはしない。

「それと王妃様……もう一つ懸念するべきことがあるかと」

「ええ、分かつています。坊やが向こうの世界に戻りたいと言つた場合でしよう?」

「はい……その場合、どう申されるおつもりで」

「……」

アミリアは返答に窮した。たつた一人の我が子とようやく再会を果たしたのだ、どこにその息子を手放したいと思う母がいるものか。だが、霧が取る選択肢の中で最も可能性の高いのが「元の世界に帰してくれ」とこちらに要求してくるものだ。記憶が戻ればそんなことはない、と信じたいが、自分たちが知らない生活を霧は十年もの間向こうで送つてているのだ。友が出来ただろうし、恋人と呼べる相

手もいるかもしない。そうなった場合、やはり霧は戻りたいとうだらう。

アミリア達にとつて最も理想と言える状況は、このまま霧が記憶を取り戻し、魔王の力を取り戻し、この国に君臨してくれることなのだ。どうにかしてその方向にもつていかなければならぬのだが……

「今は……何とも申し上げられませんね。先ずは坊やが記憶を取り戻してくれるることを祈るしか……」

とうとう、アミリアは答えを返すことはなかつた。とにかく霧がどんな状態にあるのかを把握してからでないと、今後の行動の指針すらたてられないのが現状なのだ。

しばらくそのまま黙り込んでいたアミリアは、ふと気づいたように顔を上げて立ち上がつた。

「王妃様？」

「いえ……坊やが起きたような気がしたので、少し様子を見てこようかと」

「なるほど、それではお供させていただきます」「ええ」

アミリアの後ろに、ライは続く。カコも黙つてその後ろを着いて行つた。

突然響いたノックの音に、テーブルの上に突つ伏していた霧は顔を上げた。一体誰が、と思うも、ここに訪れる存在に心当たりはある三人しか思い浮かばなかつた。返事をするべきか、と逡巡するも、

今顔を合わせて何を話せばいいのか分からぬ霧は、そのまま無言で扉を見つめた。

それから一度、二度とノックの音が響いたが、それを全て霧は無視することにした。もう少し考える時間が欲しかったのだ。

だが、状況は霧の都合のいいようには進んでくれないらしい。しばらくノックの音がしなくなつたかと思うと、「入りますよ」という言葉の後に、ゆっくりと扉は開いていく。

扉の向こうから顔を覗かせたのは、やはりアミリアといふ女と、ライという男ともう一人仏頂面の男だった。

「……」

アミリアは返事のなかつたのに霧が起きていることに驚いたのか、室内に入つてから目を見開いたが、そのままゆっくりとテーブルへと近づいた。

「起きていたのですね」

「ああ……いつ自分が寝たのかすら分からなかつたがな」

皮肉とも取れる霧の言葉に、アミリアは困つたように笑いながら、椅子に座つた。その後ろには氣絶する前と同じように、二人の男が控えている。

「それで、何の用だ？」

分かりきつている質問を、霧はあえて口にした。

「……坊や、記憶は戻つたのですか……？」

予想通り、アミリアの口から出てきたのはそんな質問だった。

霧は悩んだ。先ほど見た夢の内容をそのまま話すべきか。その場合自分はそのまま魔王というものに成らせられる可能性が高い。それは現状、霧にとつてあまり望ましくない展開だ。だが、だからといつてあの夢の内容全てを否定するには自分はあの夢を現実にあつたことだと感じ過ぎている。

どう答えたものか悩んだ末に、霧は逆に質問を返すこととした。

「その前にいくつか聞きたいことがある、いいか？」

「ええ、私に答えることならばなんなりと」

「では一つ。あんたは幻の使い手と自分で言つてていたな？」

「はい」

「それはつまり、現実になることでも、『そうあつたこと』のように認識させることが出来るとか？」

「それは……」

アミリアにとつてそれは答えづらるものだった。何故なら、霧の言つ通り、彼女の力をもつてすれば現実になかった状況をそうであつたかのように認識させることが出来るからだ。だからといって、ここで素直に頷いてしまつのはよくない状況を生み出すとアミリアは確信していた。

こんな質問をしてくるといふことは、霧はきっと記憶の一端なりを思い出したに違ひなかつた。でないと、そんな点が気になるわけがないのだから。

かといって、息子に嘘を吐けるほど、温い愛情を持ち合わせていなアミリアは敢えて濁した答えを返した。

「状況によつては、そういうことも可能です」

「状況によつては？　それはどんな状況だ？」

「そうですね。じつくりと時間を置いた状況下であれば、落ち着いて魔法を使用することができるのです」

「……」

霧は考える。先ほど自分が氣絶する前の状況は落ち着いていて魔法とやらを使えたはずだ。となると、やはりあの夢はこの女の使つた魔法で錯覚しているだけか……

「……」

だが、どうしてもあの夢が錯覚であるとは考えにくい霧は、質問を続ける。

「次の質問だ。その魔法は……何と言えばいいのか。そうだな、例えはある男がこの世に存在すると錯覚させるとする。その男の肌の色、行動、声、それら全てをあなたが指定することは何出来るか？」

「それは……その男を、私が見聞きしたことがあるのであれば、可能です。」

その言葉を聞いて、霧はかかったと思つた。つまり、アミリアが見たことがある存在ならばその人物が居たと錯覚させられる。あの夢の中に出でてきた魔王らしき男の存在も、霧の中に見たことがあると錯覚されることも可能だということだ。

王手をかけた気分のまま、霧は最後の質問をした。
「では聞くが、魔王とやうは俺と同じ肌の色をしていて、身長はやこの男」

と、力口を指さして霧は言つ。

「その男とほぼ同じ身長をしていて、髪は俺と同じ感じで間違はないか？」

『おお……』

途端、アミリアとライは口を揃えて声を出した。それは霧が記憶を取り戻したという喜びの声だったのだ。

しかし、続いた霧の言葉に一人は閉口することとなる。

「だが　　それは、あんたが俺にそう錯覚させた、ともいえるわけだ」

「そんなことは」

「　　ない、とは言い切れないだろ？』

そう、たつた今、霧の質問に答えたのはアミリア本人だ。違うとは言えるわけもない。アミリアも、こうなるのは途中から感じていたことだったが、それでも彼女は我が子に嘘を吐くことだけはできなかつた。返す言葉もないまま、アミリアは俯き、ライはそんな女を後ろから見つめていた。

「ふん……何とでも出来るよな。確かに俺は見たさ。あんたと、その先代魔王とやらと一緒に馬車に乗っている光景を。巨大な樹と話している魔王と僕の光景を。魔方陣の中からあんたの泣き顔を」

「ちょっと待ってください」

突然、喋る霧の言葉を、アミリアが遮った。

「なんだ？ まだ言い訳があるのか？」

「今、巨大な樹と話していると言いましたか？」

「ああ、言つたがそれが何か」

「あるのか。そつ言おうと思つた霧の言葉は続くライの言葉にかき消された。

「 ありえない」

「 なに？」

「 巨大な樹とは……それは、もしや契約の森の主では？」

「 契約の森？」

「 はい……」

ライの説明日く、その森は魔王とその血を引く者しか立ち入りできない聖域だとのことだ。

それはつまり 魔王の血を引いていないアミリアではその森の光景を見ることは出来ないということだ。

「 あ 」

そこに至り、霧は思い出す。あの光景の中には、アミリアといつ女性の存在はどこにもなかつたところのこと。

そこから導き出される答えは

「 そんな馬鹿な……」

ガターンと音を立てて、立ち上がる。同じように、対面に座つていたアミリアも両手を口に当つて立ち上がつた。

「 おお……坊や……」

「 魔王様……」

アミリアの、ライの声がどこか遠くに聞こえる。

霧は認めざるを得なかつた 自分は、この世界の住人であると。

— 話（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

浅間霧という人間は、いつの頃からか何事においても全力で取り組むということを忘れた存在だった。

褒められる、賞を取る、結果を残すといったものに何の価値も見出していない。それらを得たからといって、得る前と何が違うのかという疑問を心の底から抱いていた。人というのは所詮何かをしたからといってその本人に何か変化をもたらすこともない。個人は個人であり、それ以上でもそれ以下でもありはしないのだと、霧は常常思っていた。

だからといふわけでもないが、霧は物事に真剣に取り組むということをした記憶がなかつた。幼いころまでは記憶にないが、少なくとも中学校に上がつた頃には惰性で生きる浅間霧という一人の人間が出来上がつていた。

期待などというものは自分には関係なく、努力という言葉とは無縁であり、精神論などというものはゴミ箱に捨ててきた。

だからこそ、自分が魔王であるという自覚を持つことは、かつてないほどの困難であった。

朝がやつて來た。室内に灯されていた光はいつの間にか消え去り、代わりに眩いばかりの太陽光が室内に侵入してきている。魔族が住む国にも朝日はあるのだなと茫洋とした気持ちで霧は思った。

昨日の小さな会談は、霧の「考える時間が欲しい」という一言に

よつて一先ずの解散を迎えていた。霧は三人と別れてから、ベッドの上に座り込み、一晩を過ごした。眠りにはついていない。霧は座り込んだまま、思案に暮れて夜を過ごした。

何か解決したということはなかつた。ただ、自分が過ぐしてきたこの二十年のどこまでが本物で、どこまでが偽物なのかを判断しようとしたり。記憶の蓋が外れたのか、次々に浮かんでくる見たことのない記憶を脳裏で眺めていたり。自分はこれからどうするべきなのかと先行きの見えない悩みを抱えたり。そのどちらも霧の肩に重荷を載せるだけで、何かしらの答えを導き出してくれることはなかつた。

それでも、誰にも会わず一晩悩んだお陰か、気持ちを落ち着かせることには成功していた。それが“考へてもどうしようもない状況にいる”のだという答えからくるものだとしても、霧は構わなかつた。自分が冷静さを取り戻した、それが何よりも大事なのだから。

「……はあ」

肺の中にたまつたものを吐き出すかのようなため息。

「まあ……取り敢えずは色々と聞いてみないとどうしようもないよなあ」

誰に聞かせるでもない独り言は、朝の空氣の中に消えていく。霧はベッドから降りて、窓へと近づいた。窓外では、昨日暗くてはっきりと見ることの出来なかつた城下街が広がつていた。まだ朝も早いだろうに、広い街路を、馬車や多くの人々が行き交つている。家は総じて木か石造りで出来ており、見たことはないがヨーロッパなどの住宅街はこんなものだろうかと霧に思わせる。それにしても木で出来た家が日本風の趣を醸し出しているが、そもそも国々の様相の違いなど霧には分からなかつたので、この国がどんな発展の仕方をしているのか予想を立てることも出来ない。

霧は両開きの出窓を開いた。突如侵入してくる朝の空氣は冷たく、薄らぼんやりとしていた霧の頭をすつきりとさせてくれる。大きく深呼吸をすると、腹の底にたまっていた何かが抜けていくような気

すらしていく。

日はのぼり、人々は動き出す。霧も、動き出す。

浅間霧の異世界生活の初日は、こうして始まった。

「ンン」というノックの音がした。昨日とは少し音の大きさが違うノックに、アミリアではないなと思いながら、霧は返事をした。

「失礼いたします。魔王様の朝食をお持ちいたしました」

ゆっくりと開かれた扉の向こうに、メイド服に身を包んだ女性が三人、各自両手に皿を持って立っていた。既に椅子に座っていた霧は持つてこられたその皿の量に思わず目を見開いた。どう考えても一人分の食事の量とは思えなかつたからだ。

「失礼いたします」

そう言いながら、メイド三人は小さなテーブルいっぱいに皿を並べていく。

「一つ聞くが」

「はい、なんでございましょう」

「これが魔王の通常の朝食なのか……？」

もしや魔王というのは大食感だったのだろうかと不安になる。もしそうなのであれば、自分とそんな化け物と一緒にされても困るからだ。

「いえ、こちらは王妃様の指示によるものです」

「王妃の指示？」

「はい。朝食は魔王様と一緒にされると伺っております」

「……」

少なくとも、霧はそんな話は一言も聞いていない。それに、一緒にいたるとしても、その本人がここに居ないではないか。

そう思つていったら、開いたままの扉からアミリアが姿を見せた。

「おはよう、坊や。昨夜はゆっくり眠れましたか？」

「ああ……まあ少しほはな」

何だか素直に言つのが癪にさわったので、敢えてばかして返答をする。対照的にアミリアのほうはぐっすり眠りに着くことが出来たのか、その顔色は悪くないよう見える。とはいへ、女性というものは化粧で多少の疲れならば隠すことが出来るとはテレビから得た知識だった。見た目通り彼女が眠りに着いていたのかどうかは霧の知るところではなかつた。

「それで、どうこうつもりだ？ わざわざひこに食事を持つてこさせで」

「母と子が食事を取りのに何か理由が必要でしようか？」

「……」

正論だった。半ば自分がこの国で生活していく、目の前の女性の息子であるのではないか、といつ思いも抱いていたために、強く否定することは出来ない。

「それに、本来であれば食堂で食事を見る所を、坊やが気を使つてはいけないとこに料理を持つてこさせましたが、お嫌でしたか？」

「いや……ひこで構わない」

なるほど、確かに王族なのであれば専用の食堂があるのである。霧はテレビの中の世界でしか見たことのない、巨大なテーブルで一人だけで食事している光景を想像し、頭を振つた。

「一晩経つて坊やも色々と聞きたいことは出てきたでしょうけれど……先ずは食事に致しましょう？」

「ああ、分かつた」

確かに体は空腹を訴えている。霧は素直に頷いた。

改めて料理を見ると、いつもこいつらの話題が、はたまた自分がこっこ

居るからなのか、朝からにしては豪勢にも過ぎる光景があった。鳥のソテーも、肉厚のステーキも、更に言うならばワインのようなものも朝から胃に入れたいとは思えないが、仕方なく霧はナイフとフォークを手に取った。胃がもたれない程度に食べれば問題はないだらう。

「……」

静かな時間が流れる。アミリアも、霧も、料理を口に運ぶだけで何も言葉にしようとはしない。アミリアはマナーの点でそうなのかかもしれないが、霧は単純に何から聞こつか悩んでの沈黙だった。

何を聞こうか。何を聞けばいい？ そんなことばかりが頭をよぎる。

自分はどうしたいのか、どうすればいいのか？ 徹宵して考えたことが再び浮かび上がってくる。

料理は非常に美味しかったような気がしたが、考え方の所為で霧はあまり味を覚えていなかった。

一人では食べきれない料理は結局三分の一を残して終了となつた。霧は黙つてナイフを置き、それを見たアミリアはメイドに下げるよう指示を出した。

テーブルの上には水差しと一人分のコップだけが残つている。霧は自分のコップを口に運びながら、これから的发展を考えていた。と、どう切り出したものか霧が考へていると、先にアミリアの方から切り出してきた。

「それで」霧の目を真つ直ぐに見つめて、アミリアは囁く。「この国の」とさじこまで思い出すことが出来ましたか？」

「……どこまでと言わると、返答に困るが」

一拍の間をおいて、霧は喋りだした。

「物心がついてから、先代の魔王と思われる男と、あんたと一緒に過ごしていく記憶は覚えている限りは思い出したんじゃないかなと思

「う

それを聞いて、アミリアは嬉しそうに目じりを下げる。

そんなアミリアに、「だが、」といって霧は続ける。

「この記憶がこまで本物で、こまで信用できるのか、正直俺には判断がつかない。ただ、浮かんでくる映像を見て、俺自身は確かに知っているとは思った。昨日の会話で、これがあなたの作り出した幻覚ではないというのも……まあ、分かった

た幻覚ではないというのも……まあ、分かった

その上で、と霧は言う。

「あんた達は俺をどうしたいんだ？ 昨日ライと**いう**男が言っていたようにこの国で魔王とやらをやれば満足なのか？」

「……」

アミリアは答えない。それでも、昨日の沈痛な表情とは違う、確かな喜色が表情に表れているのを、霧は感じ取った。

「そうですね……先ず、坊やにはこの国の現状から教える必要がありますね」

「……」

「少し長くなりますが……」

そう前置いて、アミリアの説明は始まった。

まず、魔族といつものは魔族領という範囲で暮らしているといふ。魔族領には六つの国があり、魔王が君臨しているのは領土の真ん中にあるギリアムといつ国に当たる。ギリアム以外の国々の頂点にはそれぞれ辺境伯やら公爵やらを名乗って統治しているとのことだ。本来、魔王とは血脉によって受け継がれるのが現在の慣習になつてゐるらしい。魔王の力は血によつてのみ受け継がれるのが確認されているからで、それがいつの間にか慣習になつていたとのこと。

だが、現在は魔王の席が空位になつており、これまで王妃であるアミリアが状況を説明して 次期魔王である霧が存在し、それが十年後に戻つてくると 事なきを得ていたらしいのだが……

「武闘祭……？」

「ええ」

なんでも数年に一度、魔族の力を高めるためといふ名目で、各国

家の代表と、自由参加の者たちが集まって所謂腕試しをするらしい。

これまで十年ものあいだ魔王が空位になつたことはなかつたので、次期魔王が現れたのを大々的に公表するためにも、その大会に出て優勝してもらいたい、というのがアミリアの言い分だつた。

「……本気で言つているのか？ 昨日見せただろう、俺の肉体はただの人間と変わりないんだぞ？」

アミリアの説明に、霧は食つて掛かつた。記憶が戻つたとはいえ、霧の体は今もただの人間にすぎない。そんな状態で猛者が集うであろう大会に出ても、結果は火を見るよりも明らかだろ。

「ええ……その点についてですが恐らく長い間魔王として、魔族としての生活を送つてなかつたことから、単純に力の使い方を忘れているだろ」というのが私たちの見解です。なので、坊やには力の使い方を取り戻してもらひ……」

「待て、待つてくれ」

思わず霧は言葉を遮つた。

「その前に、俺はどうしても魔王とやらにならなければならぬのか？」

それは、霧が一番聞きたかったことだつた。霧にとつて一番都合のいい流れは、元の世界に戻してもらつて、平穏無事な生活を送ることなのだ。向こうとしてはそうなつては困るのだろうが、霧としては自分の身の安全を確保するのが最優先事項なのだ。だが、反面、アミリア達が自分を元の世界に戻してくれるかどうかについては、不可能だろと霧は考えていた。向こうにとつて一番の流れは、自分が魔王として君臨することなのだろうから。

「……」

案の定、アミリアはただ困つた顔を向けてくるだけで、返事をしようとはしない。それが、霧を元の世界に戻す気はないのだという何よりの証に見えた。それでも、ただ黙つて成り行き任せにしていては、きっと自分は魔王とやらにさせられてしまう。だから、霧は思い切つて聞いてみた。

「なあ、俺を元の世界に戻すことは可能なのか？」

「……」

アミリアは答えない。それが聞かれることが予測出来ていた質問であつたとしても、返答を準備しておくことが出来なかつたからだ。率直に言つてしまえば、可能“だらう”というのがアミリアの考えだつた。絶対に出来るとは言えない上に、現段階では魔力の補充が出来ていないので、限りなく不可能である、というのがアミリアの答えだ。だが、それを答えてしまつていいものかどうか。彼女にとって、霧という存在は最後の肉親に当たる。可愛い我が子が魔王になりたくないといふのであれば、それもやむを得ないのかとすら考へていて。けれど、もしそうなつた場合、ギリアムという国には違う魔王が君臨することになるだろ？。

どう答えばよいか、悩むアミリアを見て、霧はやはりという気持ちを抑えきれなかつた。戻せないわけはない。何故なら、一度霧はこの世界から地球といふ世界に送られているのだから。ここで返答をしないのは、送りたくないという思惑があるからだろ？。けれど、それは最終的に地球に送ることは出来ないといつ結果でもある。

どうあっても、自分は元の世界に帰ることは出来なさそつだ、といつ諦めにも似た気持ちを霧は抱いた。それは従来の面倒くさがりが顔を出したのだろう。けれど、仮にもこの国で生活を余儀なくされたとしても、魔王とやらになるのだけは拒否しなければならない。

だって、自分はそんな立派な存在ではないのだから。
「分かった、もう答えるなくていい。この国で生きるといふならそれに従おう……」

アミリアは咄嗟に晴れた表情を浮かべた。そんな、自分の母親であるうつ相手に心を痛めながら、霧は言つ。

「力の使い方とやらも、忘れているだけならば留おう。自分の身を守れるくらいの力が俺の血に流れているといふのならばそれに従お

う。ただし、俺は魔王という柄じゃない

「そんなことは」

ない。アミリアがそういう前に、霧は手を挙げて遮った。

「あなたがどんな風に俺を見てくれているのかは知らない。けれど、俺は十年の歳月を違う世界で暮らしていたんだ。こっちの世界で俺が十年暮らしていいたとしても、それと同じだけ、向こうで俺は生活していたんだ。俺のことは俺がよく知っている。その俺が言おう……俺は、魔王なんて高尚なものに着ける存在じゃない」

話は終わりだと言わんばかりに、霧は席を立ち、アミリアに背を向けて窓辺に近づいた。そのまま眼下を見下ろして、人々の流れを眺め見る。

背後で、アミリアが立ち上がる気配がした。そのまま彼女は霧のすぐ後ろまで近づいた。霧もそれを感じているが、振り返ろうとはしなかった。

突然、抱きしめられた。霧は驚きに一瞬体を硬直させるが、抵抗しようとは思わなかった。

「……わかりました」

長い長い沈黙の後に、アミリアはそう言葉にした。

「坊やが魔王になりたくないというのであれば……私はそれに従いましょう……ただし、一つだけ、一つだけ、お願いがあるのです」

「……なんだ」

それは、十年という歳月を一人で耐えた母親の心からの嘆願だったのだろう。その言葉を聞いた瞬間、霧は静かに頷く自分を感じていた。

「私のことを、昔のよつこ、母上と呼んでくれますか……？」

「……」

言葉はなかつた。静かな領きを返しただけだが、アミリアには伝わったのだろう。背中に違つ熱を感じた。それはきっと、自分の母親の涙だらうことは、振り返るまでもなく分かつていて。

その涙が何の意味をもつのか。霧には分からなかつた。分からな

かつたが、その涙は、この女性が自分の母親であるということを証明する何よりの証拠なのではないかと、霧はそう思つのだつた。

そんな母子の様子を、扉の向こうから透視している男が居た。ライ・ノライ。魔王の御側付きである男は、その様子をただじつと眺めていた。

「どうだ？」

ライの隣では、透視能力を持たない力コ・イクオールがその様子を眺めていた。普段無口なこの男でも、中でどんな状況が繰り広げられているかは気になるようだつた。

「……あまりよろしい状況とは言えませんね」

「……というと？」

「魔王様は魔王となることを拒否されました」

「……」

それが、どういう意味を持つのか、分からぬ力コではなかつた。

「王妃様はなんと……？」

「さて、ね……」

透視というプライバシーの侵害甚だしい能力を用いながら、ライは中での状況を力コに話そうとはしなかつた。それは、親子の重要なページを誰かに話すのが躊躇われたのと、単純にライは力コといふ男のことを好きでなかつたからだ。

代々魔王の御側付きを担うノライ家と、代々魔王の近衛隊隊長を担うイクオール家の間には、ライバル関係のようなものが介在して

いる。お互に表だつて敵意を露わにすることはないが、内心では互いに魔王の傍にいるのは自分だという自負を掲げている。それが、自然な流れで互いの中に敵対心を生み出させているのだった。

「……」

はつきりとした物言いをしないライに、カコはそれ以上追及することはなかつた。この男がこういう物言いをして喋つたことは過去に一度たりとてなかつたからだ。

「まあ、私達は魔王様がなんと仰られようが、そのお傍に付けばいいでしよう。もつとも、貴方の場合は魔王様に力の使い方を伝授するという重大な役割があるのでしきょうけどね？」

皮肉染みた言い方で、ライは言う。過去、魔王に力の使い方を传授したという話は存在しない。ライの物言いは、その光榮な役割を担うのが自分ではないことに対するハッ当たりのようなものでもあつた。

「自分は与えられた役割と、担うべき役割をただ全うするのみよ」カコはそれだけいふと、背を向けて歩き出した。しばらくその背を眺めていたライも、小さく鼻で笑うと、その場から去つて行つた。

二話（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

少し疑問なんですが、読んでくださっている方はこの文章読みづらかったりするのでしょうか？

少しとのあたり不安な読人でした。

翌日から、魔王ではないものの、それに限りなく準ずる形で霧の生活は始まった。

その前に、ギリアムという国における魔王のあり方を説明しよう。魔王とは国の王ではありながら、その生活は人間族の王族とは若干の違いを見せる。人間の王族であれば、日中は政務に励んだり、あるいは軍の訓練を視察したりと仕事があるのだろうが、魔王にはそれがない。魔王に求められるものは、ただ一つ、純粹な力のみである。その他の雜務などは御側付きであるライがその役割をになつたり、近衛隊の訓練で言えばカコがそれにあたる。魔王が君臨するギリアムには軍隊というものは存在しないので、視察というものはそもそもありはしない。

そのため、魔王が毎日何をして過ごすのか、それは魔王の赴くままに決められる。何の力も持たない状態の霧では、半ば一ート染みた立ち位置にはあることになるが、幸いというべきか、今の霧にはやるべきことがあった。それは、カコという大男に魔族としての力の使い方を学ぶことだった。

魔族が力を使うにはとある手順を踏む必要がある。若干話はずれるが、そもそも人間族と魔族の違いとは、その体に『魔素』と呼ばれる成分を取り込んでいるかどうかによる。その魔素を如何に取り込めているかどうかで魔族としての質が決まるのだが、どの魔族であっても、この魔素がないと力を行使することは出来ない。なので、魔族が力を使う場合、まずは周囲に漂う魔素を己の内に取り入れることから始まる。

「……」

しかしながら、現代に生きていた普通の人間である霧にとって、その魔素とやらをどう取り込んだらいいのか分かるはずもなかつた。

力コから魔素という存在、その取り込み方について「魔素を感じて、それを皮膚から呼吸するかのように吸い込むのです」と説明は受けたものの、それで出来ればきっと誰も苦労はしないと霧は思つた。

「陛下、慌てずにゆっくりと、大気に満ちる魔素を感じるのです」額に汗をにじませながら瞑想するように集中する霧に、力コは助言を加える。先ほどから何度も同じようなことを聞かされているもの、一向にその魔素とやらを感じることは出来ていない。何がいけないのでどうかと霧は思うものの、その答えは出るはずもなかつた。

そもそものはずで、そもそも魔族が魔素を取り込むことは呼吸するのと同じようなもので、生まれ持つて出来て当然の技術の一つなのだ。人間が呼吸の仕方を誰かに説明するとしても「息を吸って、吐く」としか説明できないのと同じように、力コにも実際どういう原理で魔素を取り込むのかという説明は出来るはずもないのだ。

だが、力コからしてみれば、相手は十年と短いながらもこちらでの生活を送っていて、更に魔王の血を引き継いでいる正真正銘、魔族の最高峰に位置する存在なのだ。魔素の吸い方が分からないということ自体、力コには理解しづらいものがあった。

既に訓練を初めて三時間が経過していた。その間したことと言えば、説明と、あとはひたすらに霧が目を閉じて集中しているだけだつた。何ら進展のないこの状況に、力コは何が違う方法を試すべきかと考え始めた。

「ふう……」

見れば、霧も若干疲れの表情を見せている。力コは周囲に立つ近衛隊の一人に目配せをした。合図を送られた近衛隊の一人は、自分の腰に下げていた、竹のようなもので出来た簡易の水筒を手に持つと、霧に近づきそつとそれを差し出した。

「陛下、これを」

「ん？ ああ……」

肉体的には何ともないが、精神的に酷く疲労していた霧は、簡単な返事だけをしてそれを受け取った。差し込んである蓋を抜いて一口飲みこむと、水かと思っていたのは果実水だったようで、仄かに甘味を感じさせてくれるものだった。

額を流れる汗を袖で拭いながら、霧は陛下と呼ばれることに慣れ始めた自分が何だか可笑しくて苦笑を浮かべた。

霧たちが居るこの場所は城内の、主に近衛隊が訓練を行う一室だつた。広さは現代でいうところの学校の体育館ほどはあり、数百人は収容することができるだろう。部屋の奥には的なのだろう、木で出来た人型の人形がずらりと並んでいる。百人はいると聞いた近衛隊の三分の一は現在その的に向かつて何やら魔法らしきものを發しており、残りの三分の一は霧から十歩ほどの距離を取つて円の形に待機している。

朝食が済んでからずつとこの調子だつた。霧が少し暑そうにすれば待機している近衛隊がタオルを持つて来たり、先ほどのように水分を渡してくれたりする。その際に彼らは必ずと言つていいほど、霧のことを「陛下」と呼んでいく。最初は否定していた霧だが、五度目になるあたりになつて否定する気も失せていた。

母親には魔王になるつもりはないとはつきり断言したはずではあるが、その話がもしかしたら末だ家臣一同に伝わりきつていないのでどうかと推測するが、きっとそれは違うのだろうなとも思った。何故なら、霧が最初に「俺は魔王ではない」と否定したにも関わらず、断固とした視線で「陛下」と呼び続いているのは近衛隊を率いる力「その人であつたからだ」。

何を持つて力コという男がそれほどまでに自分を魔王と呼びたがるのかは分からなかつたが、少なくとも彼の中には譲れない信念みたいなものがあるのかもしれない。だが、だからといつて実際に魔王ではない自分のことをそんな風に呼ばれ続けることは、どこかくすぐついたい様な申し訳ない様な気持ちになつてしまつ。これは後で母親に言って聞かせてもらわないといけないかな、と霧は思いながら

「いや、一向に進展のない魔素を感じる訓練を再開した。」

結局昼を迎えるころになつても霧が魔素を感じることは出来なかつた。いつの間にか入室していたメイドの「ご昼食のお時間です」という言葉を合図に、訓練は一先ず終了を迎えたのだった。

同時に訓練を行つていた近衛隊も休憩の時間を入れるらしく、力口は近衛隊を整列させると、色々と指示を出していた。その指示の中に、自分の警護をする人員を選別しているのを聞いて、霧はついつい口を開いてしまつた。

「まで、俺の警護はいらないぞ」

「」

遮る形での言葉に、力口はゆっくりとした動作で霧を見た。そこには指示を邪魔されたことに対する不満は見えなかつたが、同時に何の感情も見出すことは出来なかつた。霧はその視線に気圧されるかのように一歩下がつてしまつたが、ここで引いたらざるざると魔王扱いされてしまうと思い、ぐつと耐えた。

「……しかし陛下、今は陛下は力を使いになれない状態。もしも刺客が現れた場合、如何様にされるおつもりでしょう

抑揚のない、しかしづつしりと重みを感じさせる声で、力口は言う。

「と言わてもな。そもそも魔王でない俺を狙う輩がいるのか？」

「陛下を魔王ではないと捉えているのは、恐れながら陛下ご自身のみかと存じます」

「む……」

そう言われてしまつと、確かにそうなのかもしないと思つ。先日とは違い、今日の朝食の場には母親であるアミリアと、ライ、更にはカコまでもが居たのだが、その際、先日のアミリアとの話の流れを伝えたというのに、一人の態度は一向に改まる気配を見せなかつた。ライもカコも、自分のことは「魔王様」あるいは「陛下」と呼び続けたのだ。身の回りの世話をするといつことで付けられたメイド達も、霧のことをただ「魔王様」とだけ呼び、霧がいくら呼び方を直させようとしても、まるで糠に釘を打つてゐるかのように効果がなかつた。

そんな経緯があるために、カコの言葉に思わずうな頷いてしまいそうになつた霧ではあるが、しかし自分は魔王になるつもりはないわけで。

「確かにそうかもしねい。だが、俺と母上との間で、俺は魔王になるつもりはない」という話があり、母上もそれを了承したんだ。お前が臣下ならば、王妃の決定には従わなければならぬのではないのか？」

「お言葉ですが」

と、カコは初めて感情らしきものをその表情に浮かべた。それは先ほどは見せることのなかつた、確かな不満の色だつた。

「我ら近衛隊の主人は魔王様ただ御一人にござります」

今度こそ霧ははつきりと気圧される自分を感じた。が、しかし反面若干の安心もしていた。それは、まるで口ボツトのようなカコにも人間らしい感情が見えたことに対する安堵だつた。先ほどよりも気持ち喋りやすくなつた霧の口は、揚げ足を取るかのような言葉を発した。

「じゃあその魔王である俺が

と、そこまで口にして、霧は自分から墓穴を掘つた氣分になつた。

「なにか？」
「いや、なんでもない」

霧の狼狽した顔を、また無表情に戻したカコが見つめる。霧はそれから逃げるようにして、室内から出ようと扉に足を向けた。

馬鹿か俺は。何を自分から魔王だと名乗るうとしているんだ。

早足に歩を進めながら、先ほど自分の発言を叱咤する。これ以上迂闊なことは喋れないと感じた霧は、そそくさとその場を去る。そのまま部屋を出ると、そこには先ほど呼びに来たメイドが立つていて、ペニシリと優雅な一礼を見せた。

「それでは魔王様、ご案内いたします」

たつたいま自分で墓穴を掘つたばかりなので、魔王と呼ばれることに何だかやりきれない思いを感じた霧だった。

霧が去った扉を見つめながら、カコは腕を組んだ。

「ふむ……」

取り分けて自分から誘導したつもりではなかつたのだが、霧が自分から魔王であると名乗ってくれそうになつたとき、内心でカコは喜色の感情が浮かんでくるのを感じていた。そのまま自分は魔王であると認めてくれたならどんなに嬉しいことだつたらうか。

ライのように魔王が魔王であるという確認をすることも出来ないカコにとつて、霧が魔王であるというのはある意味思い込みにも近いものがあつた。だが、王妃が自分の血で呼び出したのが霧であることと、心底気に食わないことだが、ライの秘術によつて霧が魔王であるということは確定的になつてゐるのだ。例え霧がそれを否定したからと言つても、カコにとつて霧が魔王であることは既に確定

事項なのだ。

当の霧は何故か魔王であることを否定して護衛を拒否しているが、そんなものはカコには関係なかった。何故なら、元来魔王には近衛隊という存在自体が“いらない”ものなのだから。今更霧に護衛がいらないと言わても、そんなことは百も承知なのである。だが、今の霧は歴代の魔王とは違い本当の意味で力がなく、それこそ魔族の刺客と相対した場合瞬殺されてしまつほどにか弱い存在なのだ。ある意味、ギリアム国近衛隊は隊を作られて初めてその価値を見いだせる状況に居るといつても過言ではない。

「まあ、焦る必要はあるまいな」

少なくとも、霧がこの国で生活することは確定している様子なので、時間が立てば自然と近衛隊が周囲に待るようになることにも暗黙の了解をもらえるようになることだろう。

カコは滅多に見せることのない笑み ほんの少し、頬を動かしてだけだが を見せると、待機している近衛隊に指示を出すのだった。

突如鳴ったノックの音に、ライ・ノライは目にしていた書類から視線を上げた。

「入りなさい

「失礼いたします」

ライの言葉に反応して入室してきたのは、先ほど霧を昼食の場まで案内したメイドだった。彼女はするりと部屋の中に入ると、僅かな足音も立てずにライへと近寄った。

「ふむ……では報告を聞きましょうか」

「はい」

一礼して、メイドは口を開いた。

「魔王様は朝食後から昼食になる今までにはひたすらに訓練室にて魔素を取り込む訓練を行われており、今は王妃様と昼食をとられております」

「他には？」

「いえ。魔王様は朝食後に訓練室に入つてからはずつと訓練を続けていたご様子で、部屋から出たということは一切ございません」「なるほど……」

わずかに俯き、顎に手を当ててライは考え込んだ。

ライの居るこの部屋も、魔王の私室やアミリアの部屋と同じように、やはり質素な様相を醸し出している。ただ違うのは、大量の書類をこなすために置かれたテーブルが大きめの事務机のような形をしていることと、客を迎えるために一対のソファーが置かれているところだろうか。

ライはそのまま立ち上がり、窓辺に寄ると思案に暮れた。

まだ初日とはいえ、魔王様はこちらの生活を苦に思われていない……か？

その証明が、朝食後からずっとあの堅物頭との訓練に明け暮れていることだ、とライは思う。もしも嫌だと思うのならば、ずっと私室に引きこもつていればいいだけなのだから。そうではなく、眞面目に訓練に明け暮れているということは、少なくともここでの生活を前向きに考えてくれているということだ。

このまま魔王様が順調に力を手に入れてくれれば言つことはない。如何に本人が魔王ではないと声高に叫ぼうとも、周囲がそうであるという認識があれば問題はない。

魔王というものはそもそも政務にも携わらず、ただ存在するだけで権威を発する。他国の貴族が何といおうが、これが長年のギリアムの施政なのだ。霧がこちらの世界で生活してくれると考えてくれ

てはいる以上、あとは魔王としての力を取り戻してくれれば何も言つことはない。

ただし、一つだけライにとつて懸念するべき事項がある。それは、霧が魔王としての力を取り戻した際にについてだ。もしも霧が力を取り戻して出奔する、あるいはその力でもつて自力で元の世界に帰るという手段を取られた場合のことだけがライは心配していた。

もしも力を取り戻しても元の世界に戻りたくないと思わせる何が必要か？

それは何か、と考えたとき。ライは自分の妹の存在を思い浮かべた。年はそれなりに幼いものの、魔素を取り込んだ魔族特有のメリハリのある体つきをしている自分の妹が霧と腕を組んでいる姿を想像し、ライは僅かに微笑んだ。

「ふふ……」

悪くない。ライはそう思つた。妹がどう思うかという点も考えたが、刹那の内に懸念は消えた。この国に住んでいて、魔王の傍に居ると喜ばない存在はまずありえないからだ。

ライは窓から振り返つた。そこには指示をまつてゐるメイドの姿がある。特別な訓練を施してあるこのメイドも、“そういう方面”には優れている。酒池肉林という言葉があるように、片つ端から綺麗どころを魔王の傍にあてるのもありかもしない。

「くつくつく……」

ライは湧き上がる喜びを堪えることが出来なかつた。先代の『ノライ』家の当主である父から魔王に仕える喜びは、それこそ暗唱出来るほどに聞かされている。今まで実感の伴わなかつたそれは、確かに今、ライの心をくすぐつていた。

なるほど、これが魔王陛下に仕える喜びですか。

傍からすれば勝手に魔王のことを考えて行動しようとしているようになつたが、これがこの国における魔王への忠誠の表れなのだ。カコの率いる近衛隊のように、そもそも魔王には御側付きなどといつもの必要はないのだ。魔王という存在はただあるだけで最強

であり、完璧なのだ。そこに補佐する魔族も警護する魔族も必要ではない。

では何故ライやカコのような存在が居るのか。それは、過去に、魔王の存在に心酔した存在が“勝手に”その護衛を努めるようになつたり、御側付きをするようになつたからだ。

だから、ライやカコは迷わない。己のしていることがエゴでしかないと気づいているからこそ、その方針を変えるつもりはない。もし本当に魔王にとつてふさわしくないことをこいつちがしてしまつたならば、そのとき初めて訂正すればいいだけなのだから。

「さて……考えることは山ほどありますね……」

事務机の上に山のようになっている書類を見ながら、しかしライ・ノライの脳裏には、魔王に関することだけが次々と思い浮かんでいた。

四話（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

結構な人に読んでもらえているみたいで幸いです。

自分では内容がありきたりにならないように気を付けていのつも
りなのですが、なんか読んでみたら結果的にその辺にある小説と変
わりないようにも思える今日この頃。

精進精進。

ここで、ライ・ノライという男の役割について語りつつ思つ。

『ノライ』家は代々、魔王の御側付きを自称し、実際に魔王の身の回りや世話を勝手にこなしてきた。先代の当主である父は先代魔王が崩御した際にものあつさりと隠居しているために、現在ではライがノライ家の当主に収まっている。

ギリアムという国において、魔王は政^{まつじん}に一切の口出しをしない。それは初代魔王の頃から続いている慣習で、それはこれからも続いていく不文律だろう。過去に魔王が国に関することで口を出したことと言えば、三代目魔王が国に名前をつけたことと、五代目魔王が自身の性をエクスーケワと決めたことくらいである。

故に、国の政治に関することはライが受け持ち、周囲も報告・裁可の類は全てライに持つていくことにしている。とはいへ、人間族に比べると、魔族国家の政治は分かりやすいものだ。魔獣などで被害が出たとしても、各々の村や町には一人くらい実力をもつた魔族があり、わざわざ国に居る貴族や近衛隊を派遣するまでもなく退治してしまう。税金もギリアムという国だけに関していくならば、厳密な税率は決まっておらず、毎年取れる農畜産物や掘り出される貴金属を“自主的に”国民が納めているのが現状だ。それだけ魔族にとって魔王というものは特別な存在であり、尊い扱いをすべき対象なのだ。

そのため、ライが行うのは献上された税物をまとめることと、各地の報告、そして貴族からの嘆願を聞くことがその主なところだ。

そしてこの日もまた、ライの元には一つの嘆願書が上がってきていた。

「ふむ……魔王様に顔見せをしたい……か」

手に持った嘆願書を、ライは机の上にひらりと放った。現在魔王を召還したという事実は魔族国家の他国にはまだ知られていない。

が、国内の貴族、あるいは何らかの権力や地位を持っている魔族は魔王召還の現場を直接見ている。霧が魔王にはならないという意思を見せていることは“敢えて”知りせていないので、彼らにとつてみれば未だに新たな魔王の誕生を祝う式典をしていないのが不思議で仕方ないことだろう。

何らかの事情があることは式典を行つてないことで察しているだろうが、しかしだからと言って魔王という尊い存在がいるのに自分の存在をアピールしないのはギリアムに住む権力者にとつてはあり得ない。実際に、霧が召還されて次の日から、幾度となく霧と顔合わせをしたいといつ嘆願書が送られてきていた。しかしライはそれら悉くを拒否してきた。折角霧が調子よくこちらの世界に馴染もうとしてくれているのに水を差すような真似をしたくなかったからだ。

だが、今日送られてきた嘆願書に記されている者のサインを見て、ライは僅かな躊躇いを覚えた。

「ふうむ……どうしたものですかね」

嘆願書を送つてきた者の名をトヴィー・ゼイツといい、魔族としての格で考えると下の下もいいところの弱卒だつた。しかし、彼は魔族としての格の低さを利用して人間族の世界に足を運んで情報や色々なものを持って帰つてくるという重要な役割を果たしている。そして、それらを上手く利用して各地の貴族に伝手を持つている利け者でもあるので、下手をするとその辺の貴族よりも扱いが難しいのだ。

嘆願書の内容は顔見せだけでなく、献上物があるというので直接それを渡したい旨が記されている。ただ会うだけならば霧に煩わしさを与えてしまうが、贈り物があるのならば少しほれも薄れるだろうか？

「いえ……しかし……」

もう一つ、ライが気になるのは、トヴィー・ゼイツが霧と会つてから、その印象を他者に吹聴してしまうことだ。今現在の霧は嘘で

も魔王として相応しいとは言えない力なのである。もしも一人を会わせたときにゼイツが霧にあまりよろしくない印象を覚えてそれを流布されてしまうと、少々不味いことになる。まあ、トヴィー・ゼイツは良くも悪くも“強者”に這いつぶばる弱者なので、王妃並びにライ、カコを敵に回すような言動を取るとは思えないのが安心といえば安心だが。

「さて……これは私だけでは判断しかねますね……誰がある」ライが机の上に置いてあつた鈴を鳴らすと、ノックの後に一人のメイドが入室してきた。

「王妃様の元へと向かいます。貴女はイクオールを呼んでもらえますか？」

「かしこまりました」

メイドは優雅に一礼をすると、するりと部屋から出て行った。

「全く……世の中うまくは回らないものですね」

どのことについて言っているのか、ライは顎に手を当てながら、そう呟いた。

この気まずい空氣は何とかならないものか、霧は今日何度も何回も分からぬため息を吐いた。

現在は昼食を終えて一時間が経つたくらいだろうか。霧は自室で椅子に座り、所在無く時間を過ごしていた。段々と慣習化しつつある訓練は午前だけにするのが最近の暗黙の了解なのか、午後はこれといってすることがない。自分から訓練をさせてくれと言えばもしかしたらカコは頷くのかもしれないが、そこまで勤勉でもない霧は

ゆつたりとした午後の時間を過ごすことにしていた。

だが、唯一不満を上げるとするならば、まるで見張りのよう立つ近衛隊の姿だった。彼ら、あるいは彼女らは室内の四隅、そして四辺の真ん中にそれぞれ立つており、霧はずつとその八対の視線を浴び続けているのだ。また扉の向こうでは二人の護衛も立つており、まさに軟禁状態ともいえるほど警護つぶりを近衛隊は見せてくれている。自分のことを魔王とは思つておらず、またそういう扱いをしてほしくない霧にとつては軽い拷問にも等しい扱いではあったが、訓練初日の件があつて、霧は力コにこの扱いを止めてくれと強く言えないところがあった。

力コは力コで、霧が何も言わないことをいいことにじつして日に日に護衛の数を増やしている。現在はこれでも近衛隊全員の数からすれば少ないほうで、追々は訓練をしてない半数を警護につけるつもりである。

「はあ……」

また、ため息。いつそのことと昼夜でもすれば早く時間が経つといいのかもしれないと考えたが、こんな視線を向けられた中で寝れるほど霧は神経が太くなかった。何かいい時間つぶしはないものかと考えたが、こちらの世界の娯楽は何があるのか分からぬ霧ではいつもはずもなかつた。

かといって、この視線のグサグサさる空間の中でじつとはしていたくない。思い切つて、霧は散歩にでもいくことにしようかと思つたその時、部屋にノックの音が響き渡つた。

「……？ 誰だ」

疑問に思いつつも誰何した声に返つてきたのは、ここ数日で聞くなれたものだつた。

「私です、坊や。今は入つてもよろしいですか？」

「ああ……どうぞ」

本当は顔を合わせづらこ相手ではあるが、拒否する材料もない霧は力なく了解を出した。

自分のことを母上と呼んでくれと言われ頷いた霧ではあったが、氣恥ずかしさと僅かな躊躇いがあつて、未だに一度たりとて彼女のことを持上と呼んではいる。彼女は彼女で朝食と昼食はこの数日ほぼ毎日のように顔を合わせていて、その都度何か期待した視線を送つてくるのだが、霧はそれに応えてあげることは出来ていなかつた。

「では、失礼しますね」

言いながら入つてきたのは、アミリアだけではなかつた。その後ろにはライとカロ、そして見たことのない男が居た。

一体そいつは誰なのかと訝しげな視線を送る霧に、アミリアはいつものおつとりとした口調で説明を始めた。

「今日は坊やに挨拶をしたいといつ臣下がいたので紹介しようかと思ひます。……これに」

アミリアの言葉のあとに、まるで生まれたての子猫のように身体を震わせる男は恐る恐るといつた体で霧に近づいてきた。

「ま、ま魔王へへ陛下におかれましては、『』、『機嫌麗しく……！』

なんだこいつ？

それが霧の率直な感想だった。何に怯えているのかさつぱり分からぬいが、それともこれが素なのか、小柄な体の男は霧の方を見ようとせず、視線をずらしたままに膝を着いて頭を垂れた。

「ほほほっ、本日は魔王陛下のたた、為に献上したきき、物が『』ぞいましてえつ！」

一瞬、ほんの刹那の間ではあつたが、言い終わると同時に男の視線がこちらを向いた。するとますます怯え口調だった男は叫ぶよつてかん高い声を上げた。

一体どうしたらいいのか、困惑した顔を上げると、視線のあつたライが頷いてその男に視線を向けた。

「トヴィー・ゼイツ、名を名乗らぬか」

いや、そうじやなくてさ。思わず声に出して突つ込みそうに

なる自分を、霧はぐつと耐えた。

「は、はは！ 申し訳ございませぬ！ わわ、わたくしめの名前はト、ヴィー・ゼイツと、申します！ いい以後お見知りおきを魔王陛下……」

「あ、ああ……」

霧は返事を返すのが精いっぱいたった。男の態度は、自分のことを魔王と呼ぶことを訂正させようとする気が失せるほどものであつたのだ。

「でで、ではこちらに献上したきものがござこまして……」

男はパンパン、と一度手を叩いた。すると、外に待機していたのだろうメイド一人が何やら手に持つて入室してきた。

「ここちらはせせ精霊を閉じ込めましたビンであります、いい一般ではまず手には入らないものであります」

「はあ……」

思わず霧は声をあげた。両手で輪を作つたくらいの大きさの瓶の中に、何やら小さな羽を生やした何かが入っているのだ。じつくりとそれを見つめると、現代では絵本や何かでしか見たことがない妖精のようなものが入っていた。妖精はその小さな体で何かを言いたげに瓶を叩いているが、生憎と霧には何を言つているのか聞き取ることは出来なかつた。

霧が興味を持ったことで世話心が湧いたのか、ライがゼイツの続きを引き継ぐかのように説明を始めた。

「こちらは精霊の中でも希少種である風と水を司る精霊族の一種でして、主な使用方法としては田の保養に飾るか、あるいは契約して用います」

「へえ」

気持ち半分に聞きながら、霧の視線はその精霊に向かっていた。透明な一対の翼に金髪の長髪、花をあしらつたようなゴシック系のひらひらした服を着ている妖精は、今まで見たこともないほどに愛らしいものだつた。

「こちらの世界に来て初めてともいえる霧の様子に、アミリアはどこか満足そうな顔を浮かべ、ライも同様に頬を上げている。カコは無表情を貫いているので何を考えているのかは分からぬ。

「それで？ もう一つっていうのは？」

妖精の姿に気分を良くしたのか、霧は機嫌のいい声で促した。

「は、はは。ここちらは名工が打ちました剣でござります……」

霧の機嫌のいい声に少しは調子をよしたのか、男は気持ち気楽な声で説明をしていたが、剣をメイドが差し出したあたりで言葉が尻すぼみになつていつた。それは、剣を出した瞬間にあからさまに霧ががっかりとした表情を見せたのが原因だった。

「ふーん……」

霧にとつて剣などはこの先使う予定もなければ欲しいとは思わないものの一つだつた。確かに刀剣類というものはロマン溢れる一品かもしれないが、先に出された妖精の印象が強すぎて、すぐい剣ですといわれても今一つ喜びにかけてしまう。

「それで、トヴィーといったつけ？」

「は、はあっ！」

膝を着いたまま、トヴィーは両手を組んで頭を垂れる。

「これって、本当に俺がもらつてもいいの？」

「むむ無論のことござります！」

「……」

とは言われても、実際は自分は魔王でもなんでもないのに、本當にもらつてもいいものかどうか。判断に困った霧は、ライに視線を送つてみた。するとライは当然といった風な表情で鷹揚に頷いた。

まあ、もらえるものはもらつてしまえばいいか。そう考えた霧は、それじゃあと言つて賜物を受け取ることにしたのだった。

霧との対面が終わって、城の入口でライとトヴィーは向かい合つていた。

「それにしてもゼイツよ、貴様何故あままで魔王様に怯えるような様子を見せていたのだ？」

魔王に畏敬の念を抱くのはライにとって当然だが、それにしても先ほどのトヴィーの様子は行き過ぎているかのようにも思えた。事実、トヴィーが商人として商つて居る貴族相手でも、あそこまで低頭するところをライは見たことはない。無論、見たことがないだけで知らない所ではもつと卑屈な態度をとつて居るかもしれないのだが。

「ははは……いえ、やはり畏れ多くも魔王様の前に立つと緊張してしまいました……」

「ふむ……そうですか」

正論と言えば正論なので、ライはそれ以上追及することをやめた。

「まあ、本日の献上物には魔王様も思いのほか喜ばれていたようです」

「そうであれば幸いです、はい」

「また何かありましたら嘆願書にてお願ひいたします」

「かしこまりました。それでは私はこれにて失礼します……」

まるでコマをするかのように頭を下げて、トヴィーはライに背を向けて去つて行つた。しばらくその背を眺めていたライは、内心で安堵の息を吐いていた。今日の様子を見る限りでは、トヴィーが魔王の悪い噂を流すといったことはないようだと思えたからだ。あれが全て演技だとすれば立派なものだが、あの怯えようは紛れもない本物だとライは確信していた。

「さて、私も戻りますかね」

そう言って、踵を返したライは、ふと疑問に思つた。

先代魔王様の時代にも、彼はあそこまで怯えていたのだろうか、と。

些細な疑問ではあつたが、何故か心の中に刺さるその答えを父ならば知つていいだろうかとライは思つた。もしそうならば、今度聞いてみようかとも。

しばらく歩いてから、トヴィーは後ろを振り返つた。もう城の扉ははるか向こうになつていて、ライもとうの昔に去つて行つたようだつた。トヴィーは広い街路から外れて裏路地へと入り込んだ。薄暗いその場所は表通りに対して汚らしげな印象を与えるが、今の彼はそんなことを気にしている場合ではなかつた。

正面を見て、後ろを見て、誰も居ないことを確認した彼は漸くといつたふうにして両膝を着いた。それは耐えていた何かが切れたような落ち方だつた。

「はつはつはつは……」

動悸が激しいのか、息苦しいのか、顔中に汗を搔いたまま、とうとうトヴィーは両の手を地面に着いた。四肢を地面に着いた状態のまま、トヴィーはしかし立ち上がるとはしなかつた。いや、立ち上がろうと思つことすら出来なかつた。彼にとつて、こゝにしてここまで歩いてこれたこと 자체が奇跡に近かつたのだ。

果たして、気づいていただろうか。王妃は、ライ・ノライは、力コ・イクオールは。霧の召還の際、ただ一人怯えて腰を抜かしていのがトヴィー・ゼイツであったことを。トヴィーが今日、霧と会

う前から毎日毎日怯えた日々を暮していたことを。彼らは気づいていただろうか。

「なんだ、なんだ、あれは」
吐き捨てる様にトヴィーは咳いた。それは信じられないものを目の当たりにしたかのような声だった。

あれが今代の魔王か。あれが、魔族の最高峰に位置する存在か！

内心で叫んだ。それは怯えであり、歓喜だった。

魔族として力に優れていらない彼は、ライの思つていたように魔族の中では弱者でしかない。しかしそんな彼にも、魔族らしく一つの特殊な能力が備わっていた。それは、相手がどれほどの力を持っているのかを脳裏にイメージで焼き付けることが出来るというものだつた。彼はその能力を使って、これまで強者である方について立ち回ってきたのだ。

そんな彼は、先代魔王が崩御したとき、そして次代の魔王が即位しなかつたときに、悩んだ。果たしてこのままギリアムという国に居ていいのか。もしこのまま次代の魔王が居なくなれば魔王の座を巡る争いが起きるに違いない。しかし王妃は時代の魔王は今は隠れているだけで十年後に戻つてくると言つた。

彼は悩んだ末に、その言葉を信じてみることにした。そして、彼は結果的にその賭けに勝つたのだ。誰が何といおうと、霧という存在は魔王以外に違いない、途方もない力を秘めた存在だったのだから。

彼は見たのだ、ドラゴンが己の体を鎖で雁字搦めにしている姿を。そんな鎖も、魔王自身が“望めば”今すぐにでも壊れるだろうもうさを持つている。

「はは、ははははは！」

まるで狂ったかのような笑み。だが確かにトヴィーは正気を保つていた。ただ、歓喜に狂っていた。

「はははははははは！」

誰も聞こえない、静かにトヴィーの声が響き渡っていた。

五話（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

なんだかんだでHIT数が上がってきてアクセスを見るたびに一
ヤリとする類が抑えられない誉人です。

少し質問なのですが。

このままの量と質で毎日更新するのと、量と質はあがるけども数
日に一度更新するのと、読者側からすればどちらがいいのでしょうか？

今日のはなんだか元気ない内容だなあと思ったので疑問に思つた
誉人でした。

霧が一九九〇の世界にきて、早くも三週間が過ぎようとしていた。

その間、霧がしていったことといえば、もはや日課となつた午前の訓練と、こちらもまた定例となりそうなお祝いの品を持ってくる者たちの相手だつた。トヴィーが来てからというもの、賜物を持って来ればいいと思ったのか、色々な貴族連中が霧の元を訪れるようになつた。以前はそんなことなかつた状況は、トヴィーが訪れたときの霧の反応を見たライが、嘆願書を出す貴族に会わせても問題ないと判断したことから転じた状況だつた。

確かに霧自身、自分のためと色々なものをプレゼントされることに忌避はないものの、その対象が魔王という点ではいまいち腑に落ちないところがある。自分は魔王になるつもりはないと“アミリア達には”はつきりと明言しているはずなので、こうして自分の元を訪れる貴族連中はそんなことを関係ないと思つてゐるか、あるいは単純に魔王の息子という点を評価してゐるのかな、と真相をしらないう霧は思つていた。

殺風景だつた魔王の私室がだんだんと賜物でいっぱいになつていく光景は喜ぶべきなのか、何とも悩むところだつた。送られてくるものはそこまで霧の琴線に触れないのもまた複雑な心中を生み出す要因となつてゐる。武器やその他飾り物を送られても、霧はそれに何の価値も見出していくないし、使おうとも思わない。かといって捨てるわけにも売るわけにもいかず、こうして放つておくしかないのだから扱いに困る。

今の所まだましだつたかな、と思うものは衣類くらいのものだつたが、それにして明瞭に高価だと分かる質感をしてゐるのだから普段着や寝間着に使いたくても使えない。結局のところ、霧がこれまでもらつた賜物の中で喜ぶべきものといえば……

「お前くらいだよなあ、ピク」

「 」

テーブルの上に置いた瓶の中には、トヴィーからもらった精霊族とやらの可愛い女の子が座り込んでいた。彼女はこっちの声が聞こえるのか、話しかければちゃんと反応してくれるのだが、残念なことに向こうの声は霧の耳には全くと言っていいほど届いていないのだ。もしかすると言語 자체が違うのか、瓶に特殊な何かを施しているのかと思う霧だったが、その辺りについて説明を聞いていなかつた。

ピク、というのは霧が付けた名前だった。ピクシーから取つてピク。本当はベルにしようかとも思ったのだが、その名を持つ妖精の姿とピクとでは何だか印象が違つたのでこうして彼女の名前はピクに決まつたのだった。

今日の午前の訓練と昼食は終わつていて、霧はいつものごとく暇を持て余している状態だった。そしていつもの如く部屋の中には近衛の姿があり、その数は八から十四人まで増えている。きっと部屋の外の護衛も人数が増えているんだろうなと思う霧だったが、わざわざ確かめようとは思わない。

さてこれからどうしたものかな、と思う霧の脳裏に、一つの疑問点が浮かび上がる。

「 そういえば…… 」

ピクの言葉が分からぬで気づいた。こちらの世界の文字は一体どうなつているのだろうか。どういう理由かはわからないが、こちらの世界に来ても言葉は通じていて、では文字はどうなのだろうか。今のところこちらの世界に来てこちらの文字を見た記憶はない。

「 …… 」

霧はちらと近衛隊の一人を見た。無言無表情で立つてゐる彼と視線が合つ。

聞いてみるか？

三週間も護衛をされておきながら、霧は彼らと一言も言葉を介したことがなかった。話す必要性がなかったことと、話しかげづらい

とこうのが理由ではあつたが、今は話す必要性が生まれている。

「……」

やめた。

数秒見つめ合つてから、霧はそう結論を出した。聞かなくても城の中を彷徨つていたら勝手に図書館なりに着くだらうと考えてのことだつた。

折角なのでピクも散歩がてら連れて行つてみるかと思い、霧は瓶を優しくつかむと、その足を扉に向けた。そしてさあ外に出ようかといつところになつて、扉の前に立つ一人の魔族に声をかけられた。

「魔王様、どちらへ？」

「散歩」

「それではお供します」

霧が何か言う前の一つ返事で決められてしまつた。背後でプレートメイル同士が奏てる音が聞こえたかと思い振り返ると、室内に居た護衛全てが霧の後ろに集い始めた。

「いやいやいや、待つた待つてくれ。散歩といつても城内を散策するだけだから護衛はいらないよ」

「お供します」

暖簾に腕押しとはこうことこのことをいつのか。霧は知りたくもなかつた状況に頬を引くつかせた。彼らはあのカコの部下なだけあって、こちらの話や都合はあまり耳に入つてくれないらしい。嘆息を一つ吐いてから、それならばと逆に聞くことにした。

「それじゃあ、図書室かそういった類の部屋は城内にはあるか？」

「じざいます」

「そこに案内してもらえるか？」

「かしこまりました」

思いのほかスムーズに決まつた話に、こんなことならじゅつと早くにお願いしていたら退屈な時間を過ごさなくてよかつたのかも、と霧は思った。なんとなしに会話の切つ掛けを掴んだ霧は、このまま

会話を続けてことにした。

扉を出て、先行する護衛の一人に声をかける。

「なあ」

「なんでしょうか」

そう言われて、聞きたいことがありすぎて霧は言葉に詰まった。
近衛隊のことについても聞いてみたいし、カコ・イクオールについても知りたいし、文字についても教えてほしい。

だがこうして直接近衛隊と話しているのだから、彼らのことを聞いてみるべきかと思う。

「近衛隊の面々は普段何をしているんだ?」

「魔王様の護衛をしております」

それは知ってる、と霧は思つた。

「そうじゃなくてさ、俺の護衛の時間以外だよ

「訓練をしております」

「他には?」

「いじやいません」

「……」

会話が終わってしまった。確かに地球に居た頃からあまり人付き合いのいいとは言えない霧ではあったが、今の自分の会話には何の非もないはずだと思い返してみる。

「……」

考えれば考えるほどに会話に問題はなかつたよなあ、と思う。何だかこのまま会話を続けようとしてもきっと今のような流れになるんだろうなという結論に達した霧は、田的に着くまでは黙つておくことにしたのだった。

「なんだこりや……」

図書室に入つて霧が最初に発した言葉がそれだつた。

霧が図書室のつもりで入つたそこは、広さこそ学校の教室四つをくつつけた程度ではあつたが、その高さが途轍もない。円形の壁一面にはめ込まれた本棚が遙か上にまで続いている。部屋の中央につくられている螺旋階段も同様に天に上らんとする高さを誇つていて、一体どれほどの本がここにあるのか見当もつかなかつた。

螺旋階段は一階分上がる」とに踊り場のような場所をとつていて、そこにはテーブルと椅子が用意してある。気に入つた本があればそこにもつてきて読めるようになつてゐるのだろう。

「これ、どんだけあるの?」

「城の高さと同等の高さがあると聞き覚えがあります」

霧の呴きに答えてくれたのは、先ほど会話をぶつちぎつてくれた近衛隊の男だつた。

「はあ……」

首が痛くなるほどに上を眺めていた霧は感嘆の息を吐いた。まさか図書室につれできてもうつもりが巨大な図書館だとは思いもよらなかつたからだ。しかし、考えようによつてはこれだけの本があれば退屈はしないだらうというプラス思考も湧いてくる。

部屋の至る所に散らばり始めた近衛隊をあえて視界から外して、霧は一先ず本棚に近づいてみた。

「……あー、なるほどね」

背表紙を見た途端、霧は納得の声をあげた。そこに書かれている文字が全く見たことないものだつたからだ。地球上に居た頃は確かに英語かハングル文字くらいしか目にしたことがない霧だつたが、きっとこの文字はそれ以外のどれにも該当しないのだろうなと何となく思つた。一度テーブルが置いてあるところまで移動し、ピクの入つた瓶をそこに置くと、もう一度本棚に近づいてみる。一応という

」とで一冊の本を抜き取り、ぱらぱらと捲つてみたが、やはりそこに記されている文字は霧の読めるようなものではなかつた。

「はあ……」

いい暇つぶしが出来るかと思つたのが早速頓挫したこと何だか悲しいものを覚えながら、手に持つた本を元に戻す。いつそのこと今までからは午後はこちらの文字を覚えることに使うのもありかもしない。そう考へると、ある意味時間つぶしが出来たことになるのだが、しかし霧はあまり勉強が好きではなかつた。午前に行つてゐる魔素の取り込み方の訓練はもはや惰性でしかないので、例外だ。早速することのなくなつてしまつた霧はどうかりと椅子に腰かけた。そのまま背もたれに体重をかけながら、先の見えない遙か天井を眺める。

「どうすっかなー……」

恥ずかしいので近衛隊に聞こえない程度に呴く。退屈な時間の訪れに目を閉じて静かな空間に身を浸す。すると、静謐な空間には自分が発する僅かな呼吸の音以外何も聞こえなくなつた。

懐かしいと思つた。霧は地球に居た頃に、こんな経験を数多くしていたことを思い出した。大学に入つてからは若干ではあるが自由に扱えるお金が入つたこともあり時間つぶしをすることが出来たが、高校を卒業するまではそれこそ毎日退屈な時間と戦つっていたのだ。何故自分は生きているのか。何をするためにここにいるのか。これから何をしようというのか。哲学染みたそんな思考は、霧が児童養護施設に世話をになつてからずつと纏わりついていたものだつた。結局その考えは大学に入り一人暮らしを始めたために答えを得ることとなかつた。だが、お陰様といふべきか、霧はこつした退屈な時間過ごすことを苦に思わなくなつていた。

何もすることがないからだろう。目を閉じたままでいると、色々なことが思い浮かんでくる。自分の誕生パーティーを開いてくれるつもりでいた施設の先生や子供たちは心配しているだろうか。いきなりいなくなつたことでやはり警察なりに届けを出しているのだろう

うか。今年は母親の墓参りに行くことが出来そうにならないな、など。

「

その瞬間、何か気づいてはいけないことに気が付きそうになつた。それが何なのか、はつきりとはしない。言葉に出そうなのに喉元で止まっているような、思い出せそうなのに靄がかかつたような、そんな曖昧な何か。

霧は目を開けた。一体今自分は何に気付こうとしたのか。今考えていたことを振り返るが、それが何なのか、はつきりしない。

知らず、眉根に力がこもる。見えてこないそれは、しかし自分が知らなければならない何かだと、いう確信があった。何故かはわからぬ。分からぬからこそ、自分はそれをはつきりと理解しなければならないのだと、自分の中の自分が囁く。

先ほどまで考えていたことを思い出す。施設、先生、子供たち、

退屈、警察、そして 母親。

「 つ！」

そうだ、と霧は思った。今まで自分の中に当たり前に存在していたから疑問にも思わなかつたが 自分の母親は一体何者なのだろうか？

自分は十年前にこちらの世界から地球へと送られたのだ。ならば、その世界で母親が居たこと自体がおかしいのだ。向こうに送ったのは自分だけだと確かアミリアは言つていたはずだ。ならば迷い子のように彷徨つっていた自分を拾つてくれた優しいだれかが、自分の母親だったのだろうか……

「 ……あれ」

と、そこで霧は一つの事実に気が付く。向こうの世界における自分の母親の顔が思い出せないのだ。おかしい、そう、それはおかしいのだ。何故なら、アミリアの力によつて、自分は向こうの世界で十年を過ごしたという記憶を持っているのだから。だから、少なくとも十年間母親と一緒に居たはずなのに、霧はその母の顔を思い出すことが出来ないでいた。

霧はしばらく幼少時代の自分を思い出そうと努めた。こちらの世界のではない、向こうの世界で生活したというまやかしを覚える限り思い出す。幼稚園、小学校低学年、確かに自分はその記憶を持つている。所々しか思い出せないのは単純に覚えていないからだうつと考えることが出来るが、しかしそ中のどれもが母親の顔を映し出そつとはしない。

「……」

もしかしたらここまで気にすることではないのかもしれない。ある意味、十年という期間自分は母親と死別してきたのだ。あまり頭のよくない自分が覚えていないのも、当たり前かもしない

……

「

が、霧はそんな自分の思考を唾棄した。自分が向こうの世界の母親のことを忘れることが当然であつてたまるものかと霧は自身への憤りを隠そとしなかつた。記憶の中にある母親は、自分のことを守つてくれていた。周囲と馴染めなくて悩んでいる自分の話をしつかりと聞いてくれて、時に抱きしめてくれて、慰めてくれて、どんな時でも母は一緒にいてくれたのだ。だからこそ、霧にとつて母親は前の世界の母しか居ないと今も思い続けているのに、そんな自分がどうして母の顔を忘れるかを茫然と思えるだらうか。

「ふう――」

息を吐き、頭を冷静にしよう努める。考えをまとめようと、霧は一度頭の中をからっぽにして、改めて母親のことを纏めてみた。

母親は突然現れた自分を見てくれる人だつた。

自分の向こうでの十年間はアミリアによる幻だつた。

母親は自分が十歳のころに亡くなつた。

「……」

考えれば考えるほどに分からぬ。もしかしたら地球に送られる際に最初に自分と出会つた人間が自分の世話をするような幻をアミリアが使つていたのかとも思つたが、そんなに都合のいい魔法の使

い方があるのだろうか。

「……」

分からぬ。これまで自分のことを最も理解してくれているのは母親だと信じていたのに、その自分は母親のことをまるで分かつていなかつたのだと知り、霧は愕然とする思いだつた。酷く胸が痛むような気がして、思わず霧は自分の胸倉を掴んだ。

しばらくそのままぐつと耐えて、大きく深呼吸をした。少しは落ち着いてくれた自分の心中をそのまま冷静にしようと努めて、霧は椅子から立ち上がつた。

明かりはあるものの、どこか薄暗い印象を持たせることにいると、何だか嫌なことを次々に考えてしまいそうになる。霧はピク入った瓶を掴むと、出口に向かつて歩き始めた。自然と集まつてくる近衛隊のこと気にもせずに、霧は扉を開けて外に出た。

向かう先は自身の母と名乗る女性 アミリアの元だつた。

ついてくる近衛隊の一人に案内をさせてついたアミリアの私室の前で立ち止まり、霧は振り返つていふ。

「ここで待つてろ」

聞いてくれるか分からなかつたが、これから入るうといふのが王妃の部屋だからか、近衛隊の面々は素直に頷いて廊下に整列をしてくれた。そのことに内心で安堵しながら、霧は扉をノックした。

思いのほか強く響いたノックの音に自分で驚きながら、アミリアの返事を待つ。

「はい」

「俺だ」

「坊や？ …… どうぞ、お入りなさい」

何かをしていたのか、一拍の間をおいてから、アミリアは入室を許可した。

そういうえば自分の部屋以外に入るのはこれが初めてかもしないと思いながら室内に入ると、霧は一瞬呆けたような表情を浮かべた。それは、内装が賜物で埋まる前の自分の部屋とまるで同じだったからかもしない。

そしてもう一つ驚いた理由は、アミリア一人だと思つていたところにライが一緒に居たからだつた。一人は何かを話していたのか、霧が入ってきたときにはまだ向かい合つて座つていたが、霧が入室するどライは立ち上がり、アミリアの後ろに回つた。

「中へどうぞ。立つたままもなんでしょう、椅子にお座りなさいな」

それと何かお茶を、ヒアミリアは後ろに立つライに命令した。ライは鷹揚に頷いてから、室内を出て行った。

霧はその背を眺めてしばらくしてから、アミリアの反対側の席に座つた。

「それで、何か私に御用ですか？」

单刀直入に聞いてくるアミリアの言葉に、もしかしたらそれを察してライは席を外してくれたのか、と霧は思った。

「ああ……」

ここまできたというのに、霧はなんと切り出したものか未だ悩んでいた。しかしじつと眺めてくるアミリアの視線に負ける様にして、霧は思うまことに聞いてみるとした。

「あなたの力についてなんだがな」

「私の？」

「ああ……」

霧は視線をアミリアと交わさせて言つ。

「あなたの力は、例えば遠距離に居る無差別の相手にかけることも

可能なのか？」

「遠距離……それは、どのくらいですか？」

「……違う世界くらいだ」

「……」

一瞬、アミリアは黙り込んだ。それは霧が言つてることを理解しようとする時間だったのだろう。

「それは不可能です」

「……」

「基本的に、私の魔法は私が視界に収められる範囲内でしか使えない限定的なものです。なので、坊やの言つように、遠く離れた相手に任意の幻を見せるということは実質的に不可能です」

「そうか……」

霧は両手の間に指を当てて俯いた。知りたかったことは聞いたが、それで余計に向ひつの世界における自分の母親の謎が深まつたからだった。

「何か、他に聞きたいことはありますか？」

「……いや、いい。それだけだ、邪魔したな」

霧は頭を振りながら立ち上がった。

「お待ちください。今ライが紅茶を持つてきますからそれを飲んで

」

「いや、今はそんな気分じゃない。すまないが下げるおいてくれ。邪魔したな」

霧はそれだけを言つと、まるで逃げるかのように扉に向かい、部屋から出て行つた。

室内には残されたアミリアだけが残つている。アミリアはしばらく霧の出て行つた扉を眺めていたが、力なく憂いた表情を浮かべると、小さく息を吐いた。

霧がこちらの世界に来て早三週間が経つたが、これまで一度たりとて母上と呼んでもらつたことはなかった。確かにあの時、頷きを返してくれたはずの霧がそう呼んでくれないのは、まだ母親と認め

られていないからだらうかとアミリアは思った。けれど、自分が霧にしてやれることはそうない。唯一聞いたわがままと言えば、魔王になることを拒否したのを認めたくらいだった。それはそれでこの上ない条件を聞いたことになるのだが、それがどういう意味をもつか知らない霧にとつては何のありがたみもないだらう。

それに、先ほどの質問。あれは、間違いなく向こうの世界における母親について聞いていたのだろうとアミリアは思う。あえて先ほどは口にしなかつたけれど、あの母親の正体について霧に話すべきだろうか。しかし、どうやら霧の中ではあちらの世界の母親は相当の価値をもつてゐるのはこれまでの会話で把握出来ていた。

その母親の正体がアレだと知つた霧がどんな反応をアミリアにしてくるか分かつたものではない。それを恐れて、アミリアは敢えてアレの正体を霧に話そうとはしていない。無論、直接聞かれたならば答えざるを得ないだらうが、それまでは極力話したくない、それがアミリアの本音だつた。

「……はあ

「」
いじりを考えると、自分はなんとも母親らしいことをしてあげられないな、とアミリアは思つた。もしもアミリアの心境をライ・ノライが知つたならば全力で否定しちだらう。しかし、アミリアの思いはアミリアだけが知りうるもので、彼女の悩みは今しばらくの間彼女の中に轟き続けるのであつた。

六話（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

霧が一いつ切さいの世界に来て一月が過ぎようとしていた。毎日の訓練^{じんしゅう}で空しく霧の魔族としての力の使い方は進展を見せることなく今日を迎えている。霧自身はあまり焦った様子はなく、出来ないものは出来ないで仕方ないだろうと達観した考えを持っているが、そうは捉えられない者たちもいる。

アミリアの部屋に集まっているのは部屋の主であるアミリアと、カコ、ライの三人だった。

「それで、魔王様の調子はいかがですか？」

問うたのはライだつた。主語の抜けている言葉だつたが、その真意はきちんとカコに伝わつたらしく、カコは重々しくうなずいてから口を開いた。

「未だに魔素の取り込み方すら出来ておられん」

「それはそれは……」

答えに困る状況ですね、とライは顎に手をやる。

「私の教え方が悪いのかと思い他の近衛隊の者にやらせてみたが、やはり結果は変わらぬままだつた」

「ふむ……」

それは異常な状態だと、この場にいる三人は共通の見解を得た。魔族にとつて魔素は、人間が呼吸するのと同じレベルで“出来て当然”のことなのだ。それが一ヶ月経つても出来ないとなると、霧自身に何か問題があつたと考えるのが常道だろう。

「向こうの世界に居る間に、何かあつたのかもしれませんね……」
ぱつり、と呟いたのはアミリアだつた。

「何か、と申されますと？」

「それは……分かりませんが……少なくとも、坊やは向こうの世界に行く前は魔素を取り込むことは出来ていましたし、簡単な魔法も使用していました」

ライの問いに、アミリアは昔を思い出すように手をつむったまま語る。

「その点に関しては魔王陛下も認めていらっしゃいましたから、魔王としての資質も持ち合わせてしているのはまず間違いないでしょう」「……と、なると、やはり向こうの世界で何かあつたと考えるのが筋ですか……」

ライの言葉に、沈黙が下りる。もしも向こうの世界で何かあつたとして、それが何かなどと分かるはずもないからだ。

「今度、私が直接坊やに問い合わせてみましょつか」

「そうですね……それがよろしいかと」

ライの返答に、力也も同様に頷いた。魔王に直接物を訪ねるのは不敬にあたる場合がある。状況によっては 例えば最初に霧を召還してすぐの時など 仕方ないとはいえ、基本的には臣下である自分たちが魔王である霧に物を訪ねるのはあつてはならないことなのだ。その点、アミリアならば母親であり王妃という立場からも聞きやすい。

一まずは今後の対応を話し合つたこともあって、場の空気が少し軽いものになつた。自然と解散の流れになりそつたその時、部屋にノックの音が響く。

「誰か

アミリアの代わりにライが答える。すると、返つてきたのは近衛隊のもので、霧から言伝があるとのことだった。

「入りなさい」

「失礼いたします」

慇懃に礼をしながら入ってきたのは、霧の護衛を務めている近衛の一人だった。一体何かといぶかしげにする二人の前にひざまずいて、近衛の男は言った。

「魔王陛下が城下街に出かけたいと仰せです」

その言葉に、思わず三人は顔を見合わせるのだった。

「さて、どうなるかなー」

魔王の私室内で、椅子に座りピクの入つていてる瓶を眺めながら霧は呟いた。

いつものように午後は退屈な時間を過ごす予定だったのだが、窓から見える城下街の街を眺めていると、ピクが外に出たがっている様子を見せたのだ。逃げられるかも、と思いながらも霧は瓶の蓋を開けようとしたのだが、蓋はまるで強力な接着剤でくっつけられているかのように固く、霧の力ではびくともしなかった。その様子を見て、いたピクが何だかがっかりした表情を浮かべたので、何とかして外の景色を見せてやれないかなと思ったのが、街に出たいと思つた切つ掛けだつた。

考えてみれば自分はこちらの世界に来てからまだ城内しか出歩っていない。それはそれで何とも不健康なことだし、いつそこの機会に一度城下街を歩いてみるのも悪くない。

思い立つたが吉日とばかりに、霧はさつそく城下街に出る口を近衛の者に告げて外に出かけようとしたものの、それは何故か近衛の者に止められてしまった。どうせ自分に着いてくるのだと思つていた霧は、何故止められたのか分からずその理由を尋ねてみると、どうやら自分が外に出るのにはライ達の許可がいるとの返答があった。

別にそんなものは必要ないだろうと思つた霧だが、扉の前に立つ近衛隊の面々の顔を見ていると、強引に行こうとしても止められてしまうなという予想が浮かび、素直に従うことにしてしまったのだ。
そして今はその許可の返答を待つていてるというわけだ。

「出れるところ一ヶ所」

「

霧の声に、ピロははにかむような笑みを浮かべた。素直に可愛いと思えるこの妖精と、どうせなら喋ってみたいなと霧は思う。今度時間があるときに 時間はいつも有り余っているが でもピロとの会話の方法をライ辺りに聞いてみようかと考えていると、部屋にノックの音が響いた。

来たか、と思い霧が入室を許可する顔を面葉にすると、案の定部屋の中に入ってきたのはライ達の元へ言葉を持つて行つた近衛隊の男だった。

「城下街へおりる許可をいただいてまいりました。ただし、一つだけ条件があることがあります」

「条件？」

「は」

「それってどんな？」

「近衛隊から決して離れない」とのことです」

「ふーん」

霧はそう返しながら、内心ではそんなもんかと首をかしげていた。近衛隊が自分に付きまとつてるのは今更なので、わざわざ条件付けされるほどのことではない。霧も見知らぬ街の中を一人で歩きたいとは思はないので、特に思うこともなく、領きを返す。

「了解、じゃあそれで。今から出ても問題ないのか？」

「いえ、近衛隊が着替えをする僅かな時間を頂けたなら幸いです」「着替え？ 何で？」

「このままで陛下と共に参りますと、陛下の身分を周囲にむやみやたらと知らしめる」とになりますので」

「あー、なるほどね」

確かに全身鎧と剣を携えた人間を十数人もぞろぞろ引き連れていたらしいにも私は身分が上の者です、と吹聴しているも同然だ。

「じゃあ待ってるから終わったら声かけてくれ

「は、急ぎ着替えてまいります」

そう言つと、室内に居た半数が部屋から出でていく。全員が着いてくるわけじゃないんだなと思っていた霧だが、その理由をすぐに知ることとなる。

「それでは参りましょうか、陛下」

「……」

城の巨大な門の前で、霧は目をぱちぱちと瞬かせた。それもそうだろう。八人と少なくなつた護衛といざ城下街に出かけようとしたら、門の前には私服だらうものに着替えたカコ・イクオールが仁王立ちで待っていたからだ。

「え、お前も行くの？」

「無論です」

「条件は近衛隊を連れて行け、だけじゃなかつたつけ？」

「私も近衛隊の一員です」

「あー……」

言われてみれば近衛隊の隊長であろうとも確かに一員ではあるだろう。何だか騙された気持ちでいっぱいになつた霧だが、ここでごねたら下手をすると外出自体が白紙に戻されない。しぶしぶながらカコの同行を許し、共に行くことにした。同時に、道理で護衛の人数が減つてるはずだとも思いながら。

近衛隊は門から出るとすぐに、一人とカコを残して散らばつて行つた。

「あれ、一緒に居ないの？」

てつきり病院の回診の如くずらすらと護衛を引き連れていかねばならないのだろ？と思つていた霧は、自分のすぐ後ろに立つ力口に尋ねてみた。

「無意味に集まつても余計な視線と輩を集めるばかりです。城内ならばともかく、城下街ではつかず離れずの距離を保つて護衛するのが一番よいかと存じます」

そんなものか、とよくわからぬままに頷いた霧だが、同時に疑問も浮かぶ。

「でもさ、どうせ俺が魔王の息子つていつのはあんたが一緒に立つていると分かるんぢやないか？」

「貴族であれば分かるでしょ？ 今はまだ市井には広まつてあります。それに、私自身もあまり民の前には顔を出しませぬ故、陛下が陛下と判断出来るものはおらぬかと」

「へえ」

貴族が知つているのであれば、普通は一般大衆にも広まつていてもおかしくはないのだろうかと霧は思ったが、所詮それは素人考えであることも理解していた。それにここは魔族の国であり、現代人間の世で生きてきた自分の感覚を基準に考えるの自体が間違いなのだろうと結論付けることにした。

霧は護衛のことを一先ず頭から擱けて、街の様子を眺めることにした。

城門から出ると、すぐに交差点がある、左右に広がる道は城壁に沿つて向こう側へと続いており、正面真っ直ぐは主要街道なのだろう。三車線道路程度の広さを持つたその道の左右には露店のようなものが軒を連ねている。

霧は手に持つた瓶の中に居るピコにもよく見えるように氣を付けてやりながら、ゆっくりとその街道を歩いていく。露店では様々なものが売っていた。果実もあればアクセサリーもあり、衣服もあれば武器もある。中には祭りの露店よろしく何かの肉を焼いてパンで挟んで売っているものまであった。それが何の肉なのかは分からな

かつたが、そそる香ばしい匂いを漂わせるその店に思わず足が向いてしまったのは仕方ないことだった。

「へえ、うまそうだな」

「いらっしゃい」

中で肉を焼いているのは黒色の肌をした如何にも頑固そうな親父だった。

「これって何の肉なの？」

「シージーの肉を香辛料で焼いたもんだよ」

不愛想に質問に答えてくれた親父には悪いが、霧はそんな名前の動物を聞いたことがなかった。助けを求める様に力口に視線を送ると、無表情の彼は霧にだけ聞こえる様に説明をしてくれた。

「シージーは草食性の魔獸ですな。一般的によく出回っている肉の一種で、それをパンで挟んで食べるのが民に人気です」

「へえ」

感心するようにして親父の手元を見ていると、買つのか？ と尋ねるような視線を向けられた。食べてみたいのが本音である霧ではあるが、残念なことに彼の手元には金銭が一切なかつた。仕方ないな、と離れようとすると、後ろに立っていた力口がずいと前に出た。

「いらっしゃだ」

「一つ三ギルだ」

「安いな」

「安い美味しいがうちの持ち味でね」

「そうか」

そう言いながら、力口は金を親父に渡し、パンでサンドされた肉を受け取っていた。

「どうぞ」

そしてそのままそれを霧に渡すと、また後ろに下がる。

「……いいのか？」

「無論です」

思わず尋ねた霧に、カロはまた無表情でそう言つた。今までは何だか取つ付きにくいという印象しかなかつたカロの意外な一面を見た気がして、霧は思わず頬を上げた。

「ありがとな」

「とんでもないことです」

長さ十センチ程度のバケットのようなパンに肉が挟んである。霧は滴るソースをこぼさないように気を付けながら、一気にかぶりついた。パンはバケットのようでありながらふんわりとしていて、パンにまでそのソースと肉汁が染み込んでいて、口の中に入れた瞬間香辛料の香りが一気に広がってきた。

「ん……うまい」

もぐもぐと口を動かしながら、霧は感嘆の声をあげた。現代では食べたことのない類の肉の食感と味だった。それでも強いて例を挙げるとするならば、テリヤキバー ガーをさらにこつてりしたような味だろうか。すぐに飽きそうではあるが、それまでは手が止まらないような癖のある味をしている。

「これは……いいな」

一気に半分ほどを食べた霧はそんなことを呴きながら店の前から離れる。

「喜んでいただけたなら幸いです」

後ろからカロのそんな声が聞こえた。何も言わずとも傍を着いて離れない彼に、これまでとは違つた感覚を霧は覚えた。今までは何度も煩わしいと思っていたのに、今はそんな思いを感じることはない。そこに居るのが当たり前、とまではいかないものの、居ても違和感を感じない、という何とも表現に困るものを感じていた。

そのままシージーサンドを食べながら、霧は街道を歩いていく。

並んでいるの店の種類自体は変わらないのだが、その中にもまた趣向の違う商品を並べてあるので退屈しない。偶に足を止めて聞いてみれば他国からの商品を多く取り揃えてあるようで、商品が似たり

寄つたりでないのはそういうた理由があるからか、と霧は納得した。

時折交差点のような場所に着くたびに、霧はカコにじっちに行つたらいいのかを訪ねていた。

「ここを右に曲がれば主に商会の建物があり、左に曲がれば職人たちの工場があります。真つ直ぐに進みますと民の住居が連なる場所に着きますな」

「へえ……」

こと大きな交差点についたときに聞いたその話に、ビビやいら区画整理のようなものがきっちりされているようだと霧は思う。歴史というか、勉強そのものに疎い霧はそれが優れた施政の結果だということには気づかず、そうなのか、と素直に感心する。

商会に行つても仕方なく、工場に行つてもまたどうしようもない。消去法で、霧たちは真つ直ぐに進むことにした。

街路を進んでいくと、確かに人の数が少なくなつており、がやがやとした雰囲気はなくなり住宅地に入り込んだような静けさが目立つた。時折すぐ傍を子供たちが走り去つていくのを眺める。今通り過ぎたのは若干白めの肌をした白色の髪をした子供と、黒色の肌に黒色の髪の毛をした子供だった。露店が並ぶときから気になつてはいたが、どうやらこの国には色々な種族が共生しているのだな、と思う霧だったが、そこで一つのことを思い出す。

「なあカコ」

「は」

「確かに、こっちの世界には魔族と人間族、それに亜族つてやつしかいないんだよな？」

「はい」

「だったら今通つた子供たちって何の種族になるわけ？」

すると、カコは一度だけ今通り過ぎて行つた子供を振り返り、口を開いた。

「あれは両方魔族の子供ですな」

「え、肌の色も髪の色も違うのに？」

「正確に言ひなならば違うのですが…… そうですな。黒色の子供は純粹な魔族であり、白色の方は亞族が魔族へと成った変種でしょうか」

「ん？」

よく分からなかつた霧は首をかしげる。そんな説明は今まで聞いたことがなかつたからだ。

「そうですね。改めて説明するのも恐縮ですが」

「そう言って、力コは説明始めた。

そもそも、魔族というのは人間族が魔素を多く取り込んで変種した種族を指すらしい。亞族というものは人間族とは違う進化を経た種族で、その亞族も魔素を多く取り込んでしまうと魔族へと変わらししい。純粹な魔族と亞族の変種魔族ではまた能力も変わつてくるらしく、どちらが優れているというのは判断の付け所が難しいとう。

「へえ」

感心したように霧は声を出した。

「あれ、でもそれってさ、じゃあ今でも魔素を取り込んでしまつた人間は魔族に変わつてしまふのか？」

「そうなりますな」

「ふーん……」

それだと、最終的に魔族だけの世界になるんじゃないだろうかとも霧は思つたが、その辺りまで聞くと説明が長くなりそうなので今度にすることにした。

それにしても、と霧は首だけで振り返る。そこには少し離れた位置にばらけながらもついてくる近衛隊の面々が居る。ちゃんと仕事をしてるんだなーと頭の下がる思いながら、通りすがるときにつりうど視線を向けた路地裏にある看板を見て足を止めた。

「どうかされましたか？」

同じように足を止めた力コが霧と同じ方に視線を向けながら問う。

「あれって……何屋になるの？」

住宅地のようなどころなのに、店を商つてゐる様子の看板に若干の好奇心が湧いてくる。看板には何かの文字が刻んであるだけで、霧には読めないので、それが益々好奇心をくすぐる。

「あれは酒場ですか。今は時間のせいもあってそういう人は居ないでしょう」

「へえ」

酒場か、と霧は思う。今まで友達との付き合いといつものがあまりなかつた彼は酒を飲んだことがなかつた。流石にこんな時間から飲んでみたいとは思わないが、少しどんなどこか見てみたい気持ちもある。

「酒場っていうとガラの悪いのが集まってるって印象があるんだがその辺りどうなんだ？」

「間違つてはいませんな。今の魔王様にはあまりお勧めできない場所ではあります」

「そうか……」

やつぱり不良染みた輩のたまり場なのかと思うのも、しかし自分には今百戦錬磨が如き男と、その部下に警護されている身だ。もしも何かあつたとしても大丈夫だらうといつ樂觀した考えが霧の中にはあつた。

だからだろう、氣楽にこんなことを言えたのは。

「ちょっと見てみたいから入つてみよつぜ」

「む……しかし」

「どうせあなたとその他近衛隊が居るんだろ？」

「わ……」

僅かに唸り悩んでいた力口だが、霧の最後の言葉に否定の言葉を口にできないと気づいたのか、渋々といった様子で了解を出した。

「ただし、あまり長居はせぬよつお願ひします」

「分かつてゐる分かつてゐる」

そう言つて、霧とカロは酒場へと足を向けた。

それが、霧にとつて魔族といつもの考え方を変える第一歩になるとは気付かぬままに。

十話（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

長くなつたのでわざわざこつました。

室内は昼間だというのに、全体的に薄暗い印象を与えた。壁に点々と灯る蠟燭の光だけが窓明かりすらない室内に明かりを灯し、ゆらゆらと揺れる影を生み出している。

室内には六人の男が居た。一人はカウンターの中で静かに腕を組み佇んでいる。五人の男はまだ時刻も昼だというのに酒類の入った木製のコップを片手に大声で喚いている。この店の店主であるカウンターの中に居る男はそんな客に対して何を言つことなく、やはりじつと立っているだけ。

「――！」

客の男たちの一人が何かを言つと、それに反応してじつとした笑いが起きた。既に出来上がっているのだろう、誰もが自分たちの声が騒がしいという思いを抱くことなく、ただ思い思いの感情を発露させている。

ここは酒場という場所ではあるが、それなりに暗黙の了解というものがある。住宅街の中にあるというのもその理由だが、無意味やたらと騒音を出す輩は本来ならば店主直々に話し合いの場を設けるのが常だ。しかし今は他に客もおらず、また外に響くほどに喧しいわけでもない。よつて、店主は酒やつまみの催促を受けるまでは何も言わないのだ。

そのとき、室内に違つた音が響いた。それは扉の蝶番が立てる金の音だった。店主だけでなく、騒いでいた男たちもがそちらを向く。

「へえ……こんな感じなのか」

そこに立っていたのは到底この場に似つかわしいとは言えない優男だった。その後ろに続いて現れたのは優男とは対照的な偉丈夫で、更にもう一人中性的な顔立ちをした、計三人が酒場へと入ってきた。

先頭を歩く優男である浅間霧は、店内を興味深そうに眺めながらカウンター席へと近づいていく。その際に一瞬だけ先客である男の方を見たが、そのまま視線を動かしてまた店内を眺め始めた。しばらくそんな霧達を見ていた男五人は、興味が失せたかのように視線を戻し、また酒を口に運び出した。

「……いらっしゃい」

カウンターに着いた霧たち三人に、そこで初めて店主である男は顔を上げた。そして霧を見、カコに視線を移したところでわずかに目を見開いた。だが、それだけで店主は何を言つでもなく静かにメニューの書かれたお品書きを差し出した。

「……」

それを受け取った霧はしばしの間それを眺めていたが、そのお品書きをそっとカコに渡した。

「読めない」

ぼそりと呟かれたその言葉に、

「へ……む」

と一瞬口元もってから、カコは霧に尋ねる。

「……酒類は飲めますでしょうか？」

「あー、そうかそうだよな。ここは酒場だから酒を飲むのが普通かあ」

その時、先に居た五人の男たちから笑い声が鳴り響いた。昼間から元気なことだと霧は思いながら、酒を飲んでいいものか悩む。もう二十歳にはなったものの、これまでの人生で酒を飲んだ経験は皆無に等しい。だからこそ酒場という響きに心踊らされるものがあつたのだが、果たして今飲んでもいいものかどうか。

「んー……子供でも飲める軽いお酒つてあります?」

「ある」

店主らし男に尋ねるとあっさりと返ってきた言葉に、じゃあそれをお願いと霧は言つ。

「つて、あ、勝手に頼んだけどよかつたか?」

霧は当然の如く持ち合わせがない。だから、自然とこの支払いは力口に頼むようになるが、霧が視線を向けると何事もなかつたかのように頷いてから、カ口も注文をした。

そこに居たり、霧はカ口を挟んで向こう側に居る近衛隊の姿に気が付いた。そういえば最初に城門を出てからは、カ口とこの近衛兵が一緒に来てくれているのだと思い出したのだ。

「なあ、そういうば名前なんていうんだ？」

体の大きなカ口をよける様に前のめりになつてその近衛兵を見ながら霧は問う。するとカ口はそれを気遣うように僅かに体を引いてみせる。そこでようやく近衛兵のカ口をはつきりと見ることの出来た霧は若干驚きの表情を見せた。

「女……？」

はつきりとそう思つたわけではないが、中性的な顔立ちをしたその近衛兵の顔は非常に整つていて、女性と言われても男性と言われても納得してしまう容貌をしている。

だが本当の驚きはその後にやつて來た。その近衛兵ではなく、カ口が口を開いたのだ。

「こやつはシャル・イクオールと申しまして、私の子です」

「はつ？」

「シャル・イクオールと申します」

カ口の説明に視線を合わせることなくペコリと頭を下げたシャルに、今度こそ霧は驚きの声を上げた。その声は飲んだくれている五人にまで届いたらしく、喧騒の声がぴたりと止み、霧は少し氣まずそうに椅子の座りを直した。

「そつか……子供があ……」

カ口の子供ということで不躾な視線をシャルに向ける霧。シャルはそれに対してもう一歩前に進み、視線を受け止める。カ口はそれをどこか楽しそうに眺めている。

「お待ち」

そうしていると店主がそつと木製のカップを差し出してきた。霧

はそれを黙つて受け取ると、じいカップの中を見つめ始めた。薄暗い店内ではそれが透明色をしていることしか分からない。今度は鼻を近づけてみるが、果実酒なのか仄かに甘い香りがした。

「何か？」

その行動を不思議に思ったのか、店主が尋ねる。

「いや、俺酒つて初めてだから、どんな匂いがするのかなーって思つてね」

その時、またもや五人の間から笑いが漏れた。あまり大きな声で話しているつもりはないものの、どうやらこちらの会話は向こうに筒抜けのようだった。感じ悪いなあと想いながらも、それを理解しながら入ってきたのは自分かと霧は気にしないよう努めた。

「別に何も変なものは入っちゃいねえ。黙つてぐつといきな」

そう言われても、まだ心の準備が出来ていらない霧は視線をカコとシャルに向けた。二人は自分が飲むのを待っているのか、カップに手をつけたまま飲もうとしない。自分が先頭をきらないといけないのかと思つた霧だが、脳裏に閃くものがあった。

「なあ、こっちには乾杯の風習つてないのか？」

「乾杯、ですか。一応あることはありますな」

カコの答えに満足そうに頷いて、霧は言う。

「じゃあ乾杯しよう」

「と、申されましても、何に乾杯しましようか」

顔だけではなく声までも中性的なシャルの言葉に、少しだけ悩んでから、霧はカップを掲げた。

「そうだな……じゃあ、俺たちの出会いに、乾杯」

『……』

何に驚いたのか、霧の言葉に最初固まっていた二人は、その後少しだけ表情を柔らかなものにしてから、霧のカップに自分のカップを合わせた。

『乾杯』

それを皮切りに、霧は最初に舐めるようにカップに口をつけて、

それから一口ぐいと飲みこんだ。子供でも飲めるといつのは嘘ではないらしく、僅かもアルコールの匂いはなく、ジュースを飲んだような爽快感だけが口の中に残った。

「へえ、おいしいもんだ」

ただ、ジュースに比べるとどこか味わい深いものを感じて、これが酒かと初飲酒に霧は内心浮かれるものを感じた。続けて一口三口と飲んでいき、とうとうカップが空になるまで飲み干した。

「ふー……いいなこれ」

自分が飲んでから力口達の様子を見てみると、向こうもさうぞ飲み終えたのかカップを台の上に置くところだった。

「なあ、あんたやシャルはよく酒を飲んだりするのか？」

「私どもですか……いえ、普段飲むのは水か果実水ばかりで、こいつた飲み物は口にしませんな」

「へえ、それはまたどうして」

「……」

返答はなかつたが、代わりにじっとした視線を向けられて、霧は察した。彼らは近衛隊であり、普段は訓練か自分の警護ばかりしているのだ。

「ふーん……」

呴きながら、霧は以前から気になっていたことを言葉に出そうか悩む。どうして彼ら近衛隊の兵士は自分にそこまで近くそうとするのか、霧はそれがどうしても理解出来なかつた。確かに王である者に傳ぐのは近衛兵としては当然のことだろう。だが、霧は魔王としての力もなければその地位を引き継いだわけでもない。現段階をもつてすれば魔族の中でも最低の力の持ち主のはずなのだ。それなのに、彼らはまるで本物の魔王に忠誠を尽くすかのごとく毎日訓練と警護に明け暮れている。霧にはそれがどういった理由からくるものなのか、憶測をたてる事もできない。

どうしようかと悩んでいると、何だか口が寂しくなるのを感じた。あんまり甘えてはいけないとは思いつつも、ついつい霧は口を開い

てしまつ。

「なあ、おかわりしてもいいか？」

「む、それは構いませんが、あまり飲まれるのも」

「大丈夫大丈夫。子供でも飲めるものを大人の俺が飲んだって何ともないさ」

知らず大きな態度に出る霧に、カコは言葉を噤んだ。結局そのまま霧は先ほどと同じ酒を店主に頼み、すぐに持つてこられたそれを一気に飲み干してしまう。

「ふあー！」

見れば、霧の頬はどこか紅潮しているように見える。薄暗い店内の視界なので正しく認識は出来ないが、明らかに今の霧は気分が高揚している 言い換えれば、酔っ払っているように見えた。

「む……そろそろ」

お暇しましょう、とカコが霧に声をかける前に、それを遮るような声が店内に響いた。

「おー兄ちゃん結構いける口か？ ならこいつちきてちょっと付き合えよ」

そう言つてきたのは五人の男たちの中でも一際がたいのいい男だった。男はカップを片手に霧の首に手を回すと、酒臭い息を吐いてきた。

思わず半身を引いてしまう霧を逃さんとばかりに力強く引き寄せた。男は言う。

「なーにちょろつと強い酒かも知れんが兄ちゃんならいける。それで、男は言つ。

「飲め」

どん、と男は霧の前に自分が持つていったカップを置く。その中にはまだ並々と酒が入つている。だが、匂いからそれは霧が飲んでいるものとは比べ物にならないほどアルコールが強いものだろうと察したカコがそれを止めようとする。

「ならん」

威嚇するかのように重苦しい声で言つが、酔っ払っている男はま

るで力コの言葉が聞こえなかつたかのように霧にカップを近づけていく。

「ほれ、ほれ、ほれ！」

「んー、しかたねえなあ」

何だか気分の良かつた霧はよく考えることもなくそのカップを受け取つた。

「それじゃあいっただつきまーす！」

力コの制止の声を聞きながら霧は一口それを含み、

「ぶふー！」

吐き出した。

「てめえなにしゃーがる！」

「なんだよこれー、まずいじやん」

霧は自分が酒を吹きかけた男には目もくれず、ジーとカップを眺め文句を言つ。そして何がおかしいのか、けらけらと霧は笑い始めた。

それに反応したのが男と、テーブル席を陣取つていた残りの四人だつた。

「おう兄ちゃん、俺の酒にけちつけやがつたな」

がたん、と音を立てて男たちが立ち上がる。自分を見つめてくる男達の視線に、わずかに酔いが覚めてきた霧は状況を把握し始める。

「んー……なあ、力コ。これはまずいのか？」

「あまり褒められた状況ではありませんな」

「そうかそうか。大丈夫か」

ははは、と笑う霧は次の瞬間、胸倉を掴まれ宙に浮いた。

「貴様！」

咄嗟に手を出そとした力コを、しかし霧は掌を向けて止める。

「だーいじょうぶだいじょうぶ」

自分が宙に浮いているというのに何を根拠にそういうのか、霧は苦しそうにしながらも力コに首を向けてそんなことを言つ。

だが、自分を無視されていると感じたのか、男は霧を締め上げるかのように持ち上げる。

「つ……ぐ……」

苦しそうにする霧に、男は酷薄な笑みを浮かべる。仲間だらう四人の男もそれを見て囁し立てるかのように声をあげる。

カコもシャルも手を出さはしない。それは魔王である霧が大丈夫と言った言葉に従っているまでであり、もしも許可さえ出ればすぐさま男たちを叩きのめしてしまうだろう。

「おう兄ちゃん、すいませんでしたって頭を下げな、そうしたら許してやらんこともないぜ」

「

霧の口がぱくぱくと開く。何かを言おうとしている霧に、男は頬を持ち上げるとゆつくりと霧を下した。苦しそうに呼吸をする霧は、しばらく咳き込んでいたが、すぐに調子を戻すと、頭を上げて笑つた。

「酒くせーんだよ、禿げ」

次の瞬間、霧は吹き飛んだ。

魔族とは、人間族が大量の魔素を取り込んだことにより変質した存在と考えられている。魔族へと変質した者は元来持ち合わせている腕力などが全体的に上がり、魔素を使用した魔法を使えるようになる。

もちろん人間族にも優れた膂力を持つ者もいるが、平均的、総合的に見た場合、魔族の方が種族として優れているというのは変える

ことのない事実なのである。

そして現在、霧は何の力も持たない人間族と変わりない肉体の持ち主である。それが腕力の優れた魔族に殴られた場合の結果は推して知るべきである。

霧は吹き飛んだ。それは殴った男ですら驚くほど軽く、そして勢いよく壁にまで到達し、壁にひびを入れてしまった。本来であれば少し顔を吹き飛ばす程度しか男は想像していなかつた。それが、どうしてかまるで自分が“貴族のように強大な”力を得たかのような吹き飛ばし方をしてしまった。

しばし呆然と霧と自分の拳を見つめていた男は、酔いが醒めたかのようにつまらない表情を浮かべた。

「ちつ、何だよしけてやがる」

そのまま自分たちのテーブルに戻ろうとするのを、しかし許さないものがいた。

「……」

カコ・イクオール、その人である。その子であるシャルは壁に背を預けたまま動かなくなっている霧の元へと向かっている。

「なんでえ、やんのか」

「……」

道を遮るカコに、男は意氣込む。だが、そんな程度の気迫では、カコを脅かすには到底足りるわけもなかつた。始まろうとする喧嘩の空気に、仲間である四人の男たちも再び腰を浮かせ、カコを取り囲むように陣取り始める。

「おう、やんのか？」

その状況になつても微動だにしない力コに苛立ちを覚えたのか、先ほど霧にしたように、男は力コの胸倉を掴んだ。

しかし、

「お……」

その体は浮かび上がるどころか、びくともしない。まるで巨大な樹を持ち上げようとしている印象を覚え、男は思わず手を放した。そして次の瞬間、近衛隊隊長、力コ・イクオールは動いた。

霧は夢を見ていた。それは今となつては遠く遠く昔に見たことのある夢だった。それが夢であるということを認識しているのは、きっとその夢の中に、今は亡き母親が出ていたからだろう。顔には靄がかかったかのようになつているが、確かにそれが母親であると霧は確信していた。

夢の中の霧は、先ほどまで同じクラスの男子と喧嘩をしていた。霧一人に対して向こうは十人という多勢に無勢もいいところの喧嘩ではあつたが、しかし霧は圧倒的なその力でもつて相手をコテンパンに叩きのめしていた。

もちろん、そうなつたら悪者になるのは霧のほうだった。向こうがいじめの対象として霧を選び、霧はそれに抗つただけなのに、結果だけを見れば暴れていた霧を周囲のクラスメイトが止めようとして、全員が怪我をさせられたという結果だけが残つてしまつた。

保護者である母親は学校に呼び出され、暴れたと思われている霧は一人一人に頭を下げなさいと担任に言われたが、決して彼は頭を

下げるとはしなかった。彼にとって、クラスメイトの面々を叩きのめしたのは悪いことではなく、自分を守るための正当な行動であつたからだ、しかしそれで納得するのは彼だけであり、叩きのめされたクラスメイトの親たちはこぞつて霧、そして霧の母親を攻めた。

彼は納得が出来なかつた。出来なかつたが、これ以上自分の母親が攻められる姿は見たくない、結局一人一人に頭を下げた。

帰り道、彼は涙を瞳に湛えながら言った。

「僕は悪くない」

それに対し、母親は言つ。

「そうね」

それ以上母親は何も言わなかつた。霧も、何も言わなかつた。ただ、母親だけは霧の味方でいてくれることを彼は感じていた。同時に、自分の言動がこんな悲劇を生み出していることもまた理解していた。

浅間霧という人間は、周囲と比べるまでもなくなんでも出来てしまふ少年だったのだ。何でも出来るから、霧はそうではないクラスメイトからすれば異物でしかなかつたのだろう。だから、彼は虐められ、避けられ、迫害されていた。

彼自身はそれに対して思うことはなかつた。ただ、それが結果的に母親の心労になつてゐるのではないかという不安だけがあつた。そして、その不安は数か月もしないうちに現実となつた。母親はこの世を去り、彼は一人になつた。彼はそれを、自分の所為だと思つた。自分が母親に迷惑をかけてしまつたから、こうなつてしまつたのだと。だから、彼はこう考えた

自分が普通であれば、母親に迷惑はかからなかつたのだろうか？ と。既に母が亡くなつてしまつた後となつてはもはや確かめようがない。だが、確かめようがなかろうと、彼は自分の行いを悔いた。悔いて悔いて、そうして彼は普通の人間になることを選んだ。

それは、霧が人間となつた日のことだった。

「い……て……」

「田を覚ましたか、陛下」

田を開けると、猛烈な痛みが体中にあつた。特に痛いのが左の頬で、まるで感覚が麻痺しているかのように、ぼんやりとした鈍痛がある。

「あれ、俺どうなつたんだっけ……」

「あ、まだ動かれないでください」

立ち上がろうとした霧を、シャルが押しとどめる。

「あ、それって……」

先ほどからずっと自分の左頬に当たられているシャルの手が光っているのを見て、霧は呟く。

「ライが使つてたのと同じ……？」

「はい。治癒をほどこしています。ノライ様に比べれば私の力など到底及びもしないのですが」

それが謙遜なのかどうかは霧の判断のつくところではなかつたが、少なくとも段々と痛みが取れていくこの感覚は嘘ではないと霧は思つた。

「どうなつたんだっけ……？」

抑えられているために置きあがることは出来なかつたが、首と視線を動かすことだけは出来た。まだぼんやりとする視界の中で、視線を彷徨わせていると、突如鈍い音が聞こえた。

「？」

それが何かと考えてみると、向こうからカ「が近づいてくるのが見えた。

「陛下、御無事ですか？」

「はは、どうなんだろ？」

一体自分がどうなつてこんな状況になつていいのかすら分からぬ霧には、その質問は答えられそうにはなかつた。

「陛下の調子はどうだ？」

今度はシャルに訪ねる力口。

「……もう少し、時間がかかります」

「そうか……」

深刻な表情を浮かべるシャルにそれだけ言つと、力口は霧から離れていく。

「ああ……なあ、何があつたんだっけ？」

「……陛下は先ほどの暴漢に殴られました」

殴られた、とシャルは言つ。殴られた、殴られた……やつ反芻していると、段々と先ほどの記憶を思い出してきた。

「ああ、そうか……俺、喧嘩売つたんだな……」

そうして殴られてしまつたのだと、よつやく霧は思い出す。同時に、あれは痛かつたな、とも。

「魔族つて、強いんだな、シャル……」

「……」

霧の咳きに、シャルは答えない。代わりといつわけでもないだろうが、霧の治癒に全力を注いでいる。シャルの返答がないというのに、霧の咳きは続く。

「俺、喧嘩つてしまつたことないと思つんだけど……あんなに吹つ飛ばされたのは生まれて初めてだよ

そう言つたあとに、霧はあれ、と思つ。

「俺、喧嘩したことなかつたつけ……？」

先ほどで、自分は喧嘩していた自分を見ていたような気がする。

それはいつの頃のことだろうか、思い出そうとしても、中々思い出

せない。

「なあ、なんか頭がぼんやりするよ」

「もうしばらくお待ちください」

そう言われても、何だか落ち着かないものは仕方がないだろうと霧は思った。思い出さないといけないことを無理やり忘れさせられているようで、何だか気持ちが悪い。それともこれは殴られた影響だろうか、と考えるが、違うという自分が居た。

魔族つて、強いんだなあ。

殴られて吹き飛んだ自分。そして、去っていくカコの背中。自分を治してくれているシャルの魔法。

そのどれもが霧に自分とは一線を画した強さを感じさせ 同時に、それは自分にも出来るのではないかという思いを抱かせるのだった。

どうしてこんなことを考えるのか、霧にはよく分からなかつた。分からなかつたけれど、それが何だか重大なヒントのようにも思えて、霧は何度も何度も、その思いを反芻していた。

「迷惑をかけたな」

既にのした四人の男には目もくれず、カコは店主に近づいてそつと金貨を数枚差し出した。しかし店主はそれを抑える様にして、口を開く。

「イクオール様から御代を頂くわけにはまいりません」

「む……知っていたのか」

「はい。先代魔王陛下がご存命の頃に何度も」

「そうか……だが、迷惑をかけたのは事実であろう。とつておけ」物も言わさずに、カコは金貨を店主の手に握らせると、そこで初めて自分が叩きのめした男たちへと視線を移した。まるでゴミを見るかのようなその視線の先では、カコを取り囲んでいた男たちが息も絶え絶えに倒れこんでいる。これでもカコは手加減したつもりだつたのだが、思いのほか力が入っていたのかもしれない。自分の目の前で魔王に手を出されるという失態を、八つ当たりの如くぶつけてしまつていたのだらう。未熟な自分を齧めるように、カコは息を吐いた。

だが、一人は逃がしてしまったものの、残りは痛めつけることが出来た。あとは霧の傷を治せば良しとするべきだろうかと思つが、この情報がライ・ノライに伝わってしまうところになるだろうと、カコは先ほどとは違つた意味のため息を吐く。

それもいいのかもしれない。カコはそう思う。自分がすぐ傍に居たというのに霧が傷ついてしまつたという事実は変えようのないものだ。だが、自分を罰するものは魔王という存在を除けばそれこそ数が知れている。だから、もしもライに何かを言われようとも甘んじて受けようと思つた。

八話（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

霧が酒場で怪我を負つてから一夜が明けた。肉体的な傷はシャルが施した治癒によつて治つていたが、精神面にもダメージがあつたのか、霧は城に帰るなりベッドで横になつていた。

カコはアミリアとライにあつたことを包み隠さず話し、案の定ライはカコの行動を責めた。アミリアは何も言わなかつたものの、その辛そうな表情こそがカコにとつては何よりも責め苦に感じるのだった。

そうして霧は次の日の朝まで目を覚ますことなく、どこか重い空氣を残したまま一夜が明けた。

目を覚ました時、霧は倦怠感のような重さを体に感じた。ゆつくりと頬や額、腕や足を触つていくも、どこにも怪我らしきものはない。筋肉痛でもないし、風邪の時に感じる関節痛でもない。ただ、だるい。まるで夢が猿に食べられてしまつかのように、やる気が何か見えない動物にでも食べられてしまったかのようだるさだ。

どこかぼんやりとした意識のまま、霧は室内を見渡した。メイドも居なければ護衛も居ない。しんと静けさを漂わせる室内を見ていると、湧水が染み出すように、ゆっくりと昨日の出来事が脳裏に浮かびあがつてくる。

自分は酔つていたのだろうと霧は思う。でないと、あんな挑発的な態度を自分が取るはずもないのだから。そう、確かに自分は酔つていた。けれど、あつた出来事は鮮明に思い返すことが出来る。自分はあの酔払いに喧嘩を売り、たつた一発のパンチで気を失つてしまつたのだ。

情けない、とは思わない。霧は自分が平均的な身体能力と平均的な頭脳しか持つていなことを自覚しているし、これまで学校で築き上げてきた成績が何よりもそれを教えてくれている。だから、人間よりも大きな力を持っている魔族の、それも腕力に優れていそう

な男に一撃でのされてしまつたことだつて、ある意味当然とも思えてしまつ。だから、悔しいとか、そういうた感情は浮かんでこなかつた。

その代りと言つては何だが、霧は自分が何のためにここに居るのかが分からなくなつていた。元々こちらの世界における自分に価値を見出していたということはなかつたが、昨日のことがあつてそれはますます大きくなつてゐる。

アミリア達が自分をこうして丁重に扱つているのは、自分が先代魔王の息子であり、魔王としての可能性を秘めているからだ。それなのに、その対象である霧は三週間が経つても魔族としての基本を修めることもできず、その辺の暴漢にやられてしまう始末だ。いくら霧に魔王になる気持ちがなかつたとしても、色々と考えさせられるものがある。

霧は立ち上がりつた。靴を履き、ゆっくりと窓辺に近づき、外の景色を眺める。城門の前には一人の近衛兵らしき者が立つていて、その向こう側では昨日と同じ様の露店商が色々な商品を並べてあり、その前には多くの客が眺めている。更に奥を見れば、きっと昨日行つた住宅街のような静かな光景があるのであらう。

そのどれもが、何だか遠い、テレビの向こう側で起きている出来事のように霧は感じた。現実感がない、とでもいえばいいのか。自分が見聞きしている出来事なのに、それは全てまやかしなのではないかという違和感がある。

「……はー」

霧は天井を仰いだ。まだ疲れているのかもしれない。無自覚に昨日の出来事がトラウマのようになつていて、単にそれを思い出したくないだけなのかも、そう霧は思つた。

こんな状態で今日もまた訓練があるのであつたと思つと、若干憂鬱な気持ちになる霧だつた。

と、その時小さな音がした。その出所を探してみると、テーブルの上に置いてあるピコの方から音はしているようだつた。霧がテー

ブルに近づくと、ピコが瓶を両手で叩いていたところだった。

「どうしたんだピコ？ 何かあったか？」

椅子に座り、そう語りかける霧。しかし、こちらの問いかけは向こうに届いても、向こうの言葉はこちらへ届かないことはこ数日間ではっきりとしている。

ピコは瓶の中でパタパタと羽を動かしながら必死に仕草で何かをこちらに伝えようとしている。が、ピコの健闘空しく、彼女が何を伝えたいのか、霧には全く分からなかつた。

「んー……元気を出せ、とでも言いたいのか？」

思いつきで吐いた言葉だつたが、どうやらピコの言いたいことを当ててしまつたらしく、彼女はこくこくと頷いている。

「そつかそつか、はは……」

霧は苦笑を浮かべながら瓶をつんつんと小突いた。未だ倦怠感は薄れないものの、この小さな妖精に癒されるのを感じた。

そんな彼女と、そろそろ本当に喋つてみたいなと思う。今日あたり、昼食後에서도その方法について聞いてみるかと、愛くるしい妖精を見つめながら霧はそう考えるのだった。

ライ・ノライは執務を行う部屋の中で、一つの書類とにらみ合っていた。まるでその書類が親の仇でもあるかの如き視線は、普段の彼からは決して感じ取れないものである。

取り分けて緊急事態を知らせるものではないのだが、落ち着いてことを構えるわけにもいかない。書類にはそういうた類の内容が記されている。彼は眉間に寄つていた皺を意識してほぐすと、手に持

つた紙を机の上に放り、椅子の背もたれに体を預けた。自分の体重を支えて軋む音を聞きながら、どうしてこうも面倒なことはまとめてやつてくるのかとライは思った。

昨日の霧が暴行を受けた件は、実を言えばカコから報告を受けるまでもなくライの耳に届いていた。カコが近衛隊で霧の傍を守っているように、ライはライで専属の諜報部隊とでも言つべき人員を用いて霧の周囲を見張つている。流石に時間帯もあり酒場の中に入ることまでは出来ていなかつたものの、帰り際にシャル肩を貸してもらつて歩いている姿を見れば中で何があつたかを推測するのは容易いことだつた。

アミリアがカコを責めるようなことはしなかつたが、ライは自分でも不快になるくらいになつてカコを責めた。カコも言い訳じみたことを一切言つことなくそれを受け止めていたので、一時間もしない内に言つことはなくなつていたが、本来であればまだまだ言いたいことは山ほどあつたのだ。だが、それを言わなかつたのも、もう起きてしまつたことをどうこうするよりも、これから霧をどうしていくか、とこう話し合ひの方が重要だつたからに過ぎない。

そもそも霧の外出に三人が許可を出したのも、彼にもつとこちらの世界に愛着を持つてもらおうという下心が働いたからに過ぎない。それが逆に怪我をして帰つてしまつたのでは本末転倒も良い所だ。これでもしも霧が外に出ることに忌避感を覚え、更にはこの世界で暮らすことそのものに否を感じられてはライ達の思惑は全て崩れ去つてしまつ。

話し合いの結果、今日一日は霧にじっくり休んでもらつてまた明日から訓練を再開するようにはしているが、霧が訓練の再開を快くやってくれるかは分からぬ。

それに

「思つたよりも早かつたですね」

ライは放つた書類 正確には便箋であるそれに視線を落とす。

その右下、記した者の印象が押されたそのマークを見て、再び眉に

力が入る。それはギリアムの東から南南東にかけて存在する『グーア』という国に居る貴族が用いる印竜だ。グーアは人間族の国家と国境を接していて、人間でいう所の辺境伯を担っている。人間族國家と接しているためか、本人も酷く好戦的な性格をしているのをライは覚えている。好戦的なのは魔族全般にいえることだが、彼の貴族のそれは他の魔族の追随を許さぬものがある。

そのグーアの頂点に居る貴族が、魔王である霧と会いたい旨を記した手紙を持った特使をよこしたのが今日の今朝方の話だ。まだこの手紙の存在はライの所で止めてあり、アミリアには知らせていない。昨日の今日でもまたもやアミリアに沈痛な思いをさせるのも苦であろうというライの気遣いからの行動だつたが、どちらにせよ知らせぬわけにはいかない。国内貴族の顔見世の嘆願書であればいくらでも断れるが、流石に他国の、それもトップに君臨する貴族の手紙を無視するわけにはいかないからだ。

ここで重要なのは、ライ達は霧の存在はまだ他国には“正式には”知られていない点である。霧が魔族としての記憶を持ち、魔王としての力を持っていたならば即座にその存在を周囲の五カ国に知らせていただろう。だが、現状がアレな霧を魔王として知らしめるわけにはいかず、情報を国内だけに留めていたつもりではあつたが、やはりというべきか、魔王召還の儀式をいつまでも他国に知られずにはいられなかつたらしい。

それはライ達も予測していたことではあつたが、知られるのは一ヶ月から二ヶ月はかかるだろうと考えていた。それが一ヶ月もしない内にこうして書状が届くことになるとは、どうやら国内の貴族の誰かが漏らしたと考へるのが常道だらう。

「全く、余計なことばかりしてくれるものですね……」

ふう、と息を吐く。ただでさえこつちは霧の力が戻らないでヤキモキしているというのに、それに拍車をかけるかのような状況を呼び寄せなくともいいだろと、誰にでもない愚痴を内心で吐く。だがいつまでもこうして手紙を向き合つっていても仕方がない。――

つ一つ確実に片を付けるために、ライはメイドを呼ぼうと机の上にある鈴を鳴らそうとして、その前に響いたノックに顔を上げた。

「誰です？」

「私です」

その声は霧の様子を普段から監視しているメイドの声だった。

「入りなさい」

読んでもないメイドが訪ねてきたことに眉を顰めながら、ライは入室を許可する。

「失礼いたします」

いつものように優雅な一礼をして、メイドは部屋に入ってくる。

「どうしました？ 今日は特に用事があるとは言つてなかつたかと思ひますが」

「はい。それはそうなのですが、魔王様についてご報告がありまし

て」

「ほう

そこで初めて、ライは聞く体制に入る。

「魔王様に何かありましたか？」

「特別これといって何かがあつたわけではないのですが……魔王様は本日も訓練をされるご様子です」

「……おかしいですね。確かにイクオールの下の者から今日は訓練は中止する旨の報告が魔王様にあつたはずですが」

「はい。それはあつたのですが、お食事中に魔王様直々に本日も訓練を行いたいという言葉を仰せになられまして、王妃様がお止めになられても頑なにすると仰られまして」

「ふむ……そうですか……今は魔王様はどうじゅに？」

「もう既に訓練室に向かわれている頃かと」

「分かりました。貴女は仕事に戻つてくれて結構です

「かしこまりました」

一礼をして、来た時と同じように楚々とした動作で彼女は去つて行つた。

「……ふむ。これは、いい吉兆と捉えるべきなのですかね？」

ライの声は、どこか喜色を含んだものだった。

何故か観客の多い日だな、と霧は思った。いつもの訓練室に、今日はいつも近衛兵とカーボン、それに加えてアミリアとライの姿があったのだ。もしかしたら休みだというのに自分から訓練を申し出たのが珍しくてこうして見に来たのだろうかと、何だか恥ずかしいものを霧は感じた。

確かに今日は元々やる気の出ない一日だったことは霧自身、自覚のあることだった。だけれども、ピカの励ましがあったからなのか、いつも、頑張らないといけない、という気持ちが自分でも知らず知らずのうちに湧いてきて、どうしても今日は訓練をしなければならないという気持ちにさせられていたのだ。倦怠感はまだあるし、だるいという気持ちももちろんある。それでも、自分の内から湧いて出たこの決意に何か意味があるような気がして、今日も訓練をすることにしたのだった。

だが、決意があるからといって、訓練がうまくいくわけでもなかつた。霧はいつものように胡坐をかけて静かに瞑想しながら、大気に満ちる魔素とやらを感じよつと努めた。だが、一時間が過ぎ、二時間が過ぎてもそんなものは一切感じられなかつた。時折休憩を挟んで近衛隊の面々に色々聞くも、この一ヶ月で既に聞きつくした感はある。近衛兵もそれが分かつているのか、霧の質問に答える時はどこかやりづらそうな表情を浮かべていた。

「ふー……」

もうあと三十分で訓練も終わりというところになつて、霧は集中力を切らして息を吐いた。両手を後ろについて、顔を上にあげて、力を抜く。そしてこつた首筋をほぐすかのよつて左右に振ると、こきこきと小気味いい音がした。

「だめかー……」

霧がそう呟いていると、アミリアが近づいてくる。その手には近衛兵から受け取つたであろう水筒を持っている。

「坊や、どうぞ」

「あ、あー、どうも」

思わず近衛兵かと思い氣安く声をかけようとして、霧は戸惑いながら水筒を受け取つた。誰が近づいてきたか分からぬくらいに疲れていたのかと、ここにきて初めて気が付いた様子だ。受け取つた水筒から水分を補給し、出来るだけ目線を合わせないよつにしながら、霧は水筒を返した。

「……」

アミリアが見つめ、霧がそっぽを向く構図が生まれる。アミリアは何も言わず、霧は何も言えない。気持ちとしては、運動会に保護者が来た時のような気まずさがそこにはあった。

「じゃあ、続きをんで」

とうとう耐え切れなくなつて、霧はそっぽでアミリアの返事も待たずに田をつむつた。そうすると、暗闇の中で近くにいたアミリアが去つていく足跡が聞こえた。内心で安堵の息を吐きながら、霧は暗闇の中に意識を落とそうとする。

この一ヶ月で、集中するということには慣れが生まれていた。最初の内は雑念ばかりが浮かんでただ座つて考え方をしているだけ、というのが常だったのに、今では真っ暗な世界で何も考えない状態を続けることが出来ている。それは言い換えれば、考えたいことだけを考えることができる、ということである。

ふと、霧は昨日のこと思い返した。吹き飛ばされて、治癒して

もらつたあの瞬間のことだ。あれは一体どんな原理で吹き飛ばし、治していたのだろうか？

吹き飛んだのはまだ分かる。魔素とやらが体を強化していく、特別な何かをしなくても腕力が増強されていたのだろう。では治癒はどうか。人の肉体は傷つけば超回復で治るようになつていて。それを促進させているのか、はたまた魔素とやらがまた何か関係しているのか。多分後者だろうと霧は思う。だって、魔素がないと魔族は魔法を使えないと言つていたはずだから。

なるほど。と霧はどこかすつきりした気持ちでそう思つた。要は、魔素というのは空氣と一緒になのだ。体の中に空氣が入り、酸素を供給する。魔素はその酸素と違うけれど同じようなものなのだろう。それを皮膚呼吸で受け入れるようにすれば……

「ん……？」
その時、霧ははつきりと何かが自分の中に入つてくるのを感じていた。その感覚に驚いてそつと目を開けてみると、そこでは自分よりも驚いた表情を浮かべるアミリアの顔があつた。

「うおっ」

思わず驚きにのけぞつてしまい、後ろに倒れた。すぐに体を起こして周囲に視線をやると、そこにもアミリアのよつに驚きに目を見開いた誰彼が居る。

もしかして、今のが魔素を取り込むつてことなのか？

「なあ、今のつて」

「はつ　今のが、魔素を取り込むつてことがあります」

霧の疑問に、カコが答えた。霧はその返答に嬉しくなり、もう一度目を瞑つて想像してみた。自分の皮膚の汗腺から呼吸するかのように、酸素のような分子を取り込むように……

そうイメージすると、先ほどよりも多くの何かが体内に入つていくのを感じる。同時に、身を包んでいた倦怠感がどんどんと薄れていく気がした。だが、きっとこれは気のせいではない。そう、これ

が

「取り敢えず、第一歩は成功、かな？」
霧の、魔族への第一歩だった。

霧の訓練が終わり、昼食が終わってから、アミリアとライの一人はライの執務室にいた。一人ともどこか機嫌のいい表情を浮かべていて、この場に流れている空気も昨日とは打って変わったものとなつていて。

ライも、昨日から続く不祥事に悩ませていたものが一つ取れた気がしてどこか晴れ晴れとした顔をしている。

とはいって、これからまた詰まらない話をアミリアにしないといけないのかと思うと頭の痛いところだが、何も嬉しいことがない状況に比べればましかと頭を切り替えることにした。

「王妃様、お喜びの所大変心苦しくはあるのですが……こちらを……」

そう言つて、ライは今朝届いたばかりの便箋をアミリアに渡す。ライの表情にあまりよろしくないものを感じたのか、気持ち顔を引き締めながら、アミリアは受け取り、中身を読んだ。

「……」

沈黙。

先ほどの晴れ晴れしい空気はどこへやら、途端に重苦しいものが室内に蔓延し始める。だが、これでも朝一人でライが見たときにはましな状況下で手紙を読んでいると思う。今朝はまだ、霧が魔素を取り込むことを出来ていなかつたのだから。

「……そうですか、もう状況は差し迫つてきているのですね」

「はい……この様子だと、その他の国からも同様の書状が来るかと思われます」

「そうですね……ですが、まだ時間はあります」

そう、例え他国に霧の存在が知られたとしても、今の現状までも知られるというわけではない。魔王が誕生したという正式な報告はあと数か月後に行われる舞踏祭でと十年前からの約束があるので、急かされる謂れもない。

「ライには迷惑をかけますが、何とかその書状はうまくかわしておいていただけますか?」

「無論にござります」

アミリアから返された便箋を受け取りながら、ライは頷いた。

そうして、また場には沈黙が訪れる。だが、それは今までに訪れたものに比べると遙かに軽度のものであることは、一人ともが認識していることであった。

アミリアはライの後に流れる空を見つめた。そこには蒼穹の中に綿のような雲が浮かんでおり、それはまるでこれからアミリア達を示しているかのように、そのままには映るのだった。

九話（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

そこは、豪奢といつて言葉がそのまま当てはまるかのような部屋だつた。

学校のクラス四つ分をくつ付けた程度の広さをもつその部屋の床には、踏めば沈み込んでしまうのではないかといふほどに柔らかな毛糸を用いた、深紅色の絨毯が一面に敷かれている。天井には煌めくシャンデリヤが吊り下げられ、壁際には棚の上に様々な骨董品のような皿や壺がその価値を見せつけるかのように座している。窓際に置かれている机も、長い年月を経た美しい木目に飾られたもので、窓外から入る陽光を眩しく照り返している。机の手前に置かれた二つのソファーも見栄えこそ陳腐あれど、それに用いられている皮は貴重な魔獸の皮膚を使用したもので、座つたならばビックリも沈んでしまうのではないかと錯覚するほどだ。

そして、その部屋の持ち主もまた、部屋に負けず劣らずの華美な服装を着飾つていた。

「ほう……」

その部屋の主である男は、机に座つたまま呟いた。手には一枚の便箋を持つており、それを見つめる瞳は鋭く、だが笑みの形に歪んでいる。なるほどなるほど、と一人呟きながら、男は手紙の文章を流れるように読んでいく。

そんな男と机を挟んで一人の男が立っている。何の特徴もない顔つきをした男は、自分の正面で楽しそうに手紙に視線を走らせる男が読み終わるのをただじつと待つている。主人である男に手紙を持ってきたのは、この男だったからだ。男は主人が手紙を読み終えるのを待ち、そして次に指示をもうつまでは動かないどばかりに、ただじつと佇んでいる。

「ははは、やはりそうきたか。そうであらうな、それしか手はあるまい」

心底楽しそうに、主人たる男は笑っている。それだけのことが、手の中の手紙には書いてあつたからだ。

男が現在読んでいる手紙は、それよりも先に男が出した手紙の返答だつた。独自に調べて突き止めた今代の魔王が既に召還されるという情報を元に、その魔王との顔合わせを望む手紙を出し、その返答が今読んでいる手紙だつた。の中には、次代の魔王陛下は次の武闘祭でのお披露目となるのは過去に決定してあることであり、それを覆してまでそんなことを言葉にするのは如何なものか、とうものだつた。

簡単に言えば、約束あるんだからそれまでは黙つてろ、と手紙の主であるライ・ノライは言つてきているのだ。何とも明け透けな返答だが、だからこそ手紙の内容が滑稽に感じて、男は笑いを堪えようとはしなかつた。

「どうやら噂通り、今代の魔王様は……くくく」

先代魔王が崩御した際、本来であればそのまま次代の魔王が即位するのが通常だといふのに、彼のアミリア・エクスーケワは十年後に魔王がその地位に着くと、周辺国家の代表魔族をその力でもつて説き伏せた。周囲はその時、その“力によつて”納得せざるを得なかつたが、こうして年月が経つとアミリアの施した力も薄れ、実像が明らかになつてくる。

つまり 次代の魔王は実は存在しないのではないか？ という疑問だつた。先代魔王が崩御した際に最も懸念されていたのがその点だつたのだ。

先代魔王の息子は魔王が崩御した際にまだ十歳と幼い年齢だつた。魔王という存在は畏敬の念を送られる対象ではあるが、まだ力の制御が完璧でない幼いころに次代の魔王を亡き者にしてしまおうといふ輩は少なくはない。魔王という称号は魔族にとつての何よりも尊いものではあるが、同時に何よりも欲するべき称号でもあるのだ。この千年の間、魔王という地位は世襲制で引き継がれてきた。だが、その流れに初めて濁みが生めたのが、今回の魔王不在の十年

だつたのだ。

今までではありえなかつたこの出来事に、各国の代表はそれぞれ次代の魔王の隠れ場所を特定しようと躍起になつてゐた。だが、それは結果を成さず、結局魔王不在、次代の魔王も見つからないまま十年の時が流れた。

だが、ずっと居場所が見つからなかつた魔王の存在が再びギリアムに浮上してきた。それをいの一一番に突き止めたのがグーアという国の代表を担つたこの男だつたのだ。

「さあ、どうする。どうするのだアミリア・エクスーケワ。ライ・ノライ？ そしてカコ・イクオール？ 存在もしない魔王陛下を持ち上げて無事に済むほど武闘祭は甘いものではないことは、痛いほどに知つてゐるだろ？」

ライの手紙に、男は次代の魔王などは存在しないと判断した。いや、正確に言えばアミリア達が魔王に祭り上げようとしている者はいるのだろうが、その男が実際には魔王に相応しい力を持つていなといという確信を得たのだ。

実を言えば、男は霧の存在を既に把握していた。あの酒場での一件は、男の耳に届いていたのだ。酒場で霧に絡んだ五人組の内、唯一逃亡に成功した男は、グーアの代表である男がギリアムの中に送り込んでいた間諜の一人だつたのだ。偶然か奇跡か、その男は偶々魔王を護衛することだけに生きるカコ・イクオールが守ろうとする男の存在を発見し、そしてその男がその辺のごろつきにすらやられてしまふ力の持ち主であることを知り、グーア代表の男に報告したのだ。

男は笑う。嗤いつ。上手くいけば次代の魔王の地位が自分の元に転がり込んでくるという想像に、不気味に歪んだ満面の笑みを浮かべている。

ひとしきり笑うことに時間を費やしていた男だが、ふと自分の前に立つ男の存在を思い出す。そう、目の前の男は次の指示を待つてこうしてじつと立つてゐるのだった。

「まあ、じぱらくは茶番に付き合ひてやるとするか」

男は机の引き出しがから一枚の洋紙を取り出すと、そこに返事を記し始めた。内容は謝罪を綴つたもの。そして、武闘祭での魔王即位を楽しみにしているといつものだつた。

「くはは……」

室内に、男の笑い声だけが響いていた。

今日は短めです。

その日、ライ・ノライは霧に呼び出しを受けていた。近衛兵についてその知らせを受けたライは、初め何を言われているのか分からぬと言った表情を浮かべてしまった。これまでに霧の言伝を近衛兵によつて伝えられることはあっても呼び出されることはなかつたからだ。何か重大なことでもあつたのだろうかと、気持ちを引き締めながら霧に部屋に向かつたライは、しかし部屋に入つて椅子に座るなり言われたことにまたもや目をぱちぱちとさせてしまった。

「こちらの世界の文字、ですか？」

「ああ、俺が居た世界とこちぢり全然違うみたいだからさ」「開口一番、霧はこちらの世界における文字を教えてほしいと言つてきたのだ。慮外と言えば慮外だが、言られてみれば確かにとも思う。十年の歳月を向こうで暮らしていたのだから忘れていてもおかしくはない。そう、おかしくはないのだが……」

「お言葉ですが魔王様、こちらの世界の文字は見たことがないのでしょうか、それともただお忘れになつてているだけでしょうか？」

「ん？　いや見たこともなかつたかな」

「それは……おかしいですね」

霧は既に幼少時代の記憶があるとはアミコニアから聞いたことだつた。ならば、それに伴つて文字に関する記憶も浮上しているだらうというのがライ達の認識だつた。

「ふむ……それではメイドの誰かを文字の指導役につけることにしましょ?」

「ああ、そうしてもうれると助かる」

とは言いながらも、ライは内心ですぐに文字については思い出すだらうと確信している。魔王とは力だけでなく、その頭脳の良さも他を圧倒するものがあるからだ。既に魔素の取り込み方は完璧の覚え、今は魔法の使い方の訓練をしているとカロから聞いている。恐

らく今まで魔素が取り込めなかつたのも十年という歳月が邪魔をしていたのだろうと、ライ達は結論付けている。だから、力の使い方や文字に関しても、一度思い出してしまえば後は水が流れる様にスマーズに魔王としての本来を思い出していくことだろつ。

「それで、他には何かござりますか？」

「いやない……あー、もう一つだけあるといえばあるんだが

「何でしょうか？」

気持ち、機嫌のいい声でライは返事をする。霧の力が戻ってきていることもそうだが、こうしてこちらの世界の何かしらに興味を持つてくれるというのはライにとって非常に都合がいいからだ。たとえここ数日連続して他国から魔王についての質問状が届いていようとも、今のこの瞬間、があるのであれば些細なことに過ぎないのだから。

「ピリ……あー、この妖精のことなんだけどさ」

霧はテーブルの上に置いてある瓶を指をして言つ。

「この子つてか、瓶から出したり、喋ったりすることって出来ないの？」

「……」

そう言われて、ライは一瞬固まつてしまつた。それは、どう返事をしたらいいのかという逡巡からきたものだ。

そもそも精靈族というのは魔法言語を用いないで魔法を使用することが出来る。“そうであれ”と言葉にするだけで、彼ら、彼女らは魔法を使ひ出来てしまつ。だから、この瓶の中に居る精靈族の彼女には、沈黙の魔法がかけられてゐるはずだつた。また、彼女の力の源であるマナを吸収できないように、この瓶のガラスの部分は特殊な樹脂からつぶられしており、蓋の部分もその樹皮をコルク状にして作られた特注品である。

そんな彼女をもしも瓶から出してしまつたなら、マナを取り込み力技で沈黙の魔法を打ち破り、下手をすればこちらに牙を剥きかねないのである。

「……」は遠まわしに瓶からは出さない方がいいと伝えるべきだらうか、トライは霧の顔を見た。何か自分がおかしなことをいったのかという表情を浮かべる霧の顔を見て、しかしトライは素直に伝えることにした。そう言つた結果を考えるのは自分の役割ではなく、魔王の役割であることを思い出したからだ。ノライ家は代々、そうして魔王の仕えてきたのだ。それは自負であり、誇りでもあつた。

「瓶から出すことは可能ですが……」

そうして、トライは出した際の危険性や逃げられる恐れがあることを霧に伝える。対して霧は、その事情を知つたうえでこう返した。

「何だ、別にいいじゃないか。元々自然の中で住んでたのを無理やり捕まえてしまつたんだろ？ だつたらもし自然の中に帰りたいって言えば帰してあげればいいさ」

「御意に」

そう言って、トライはピコの入つていてる瓶を手に取つた。施錠の魔法がかけられている蓋に、開錠の魔法をかける。かつちりと閉まつていた蓋から魔法の気配が消えるのを感じてから、トライは霧に瓶を手渡した。

「これで蓋が開く筈です」

「……」

受け取つた霧は、恐る恐るといつた体で瓶の蓋に手をやる。蓋を掴んだ手に力を籠め、次の瞬間、ぽんとう音と同時に、蓋が外れた。

するとその華麗な羽をばたかせながら、瓶の中からピコが空中に躍り出た。

「」

外に出たことが余程嬉しいのか、ピコは「の字を描くように何度も何度も羽ばたいている。彼女が羽ばたいた後には鱗粉が散らばっているかのようにキラキラと輝く軌跡が生まれている。それは精靈族が羽ばたく瞬間を見たことがない霧にとつては貴重な瞬間だったのだろう。

「おー、綺麗だ」

そう言いながらひたすらにピコを眺める霧とは裏腹に、ライと部屋の隅に待機している近衛兵は密かに緊張を高めていた。それは、この精靈族が魔法を使ってここで暴れる危険性を秘めているからだ。ただでさえ精靈族は強い力を持っている。その上、この精靈族は希少な一種の属性を持っている。もしも彼女に害意があつた場合、即座に反応しなければこの部屋が吹き飛んでしまう。

「あれ、でも喋れないのか？」

そんなライ達の危機感を余所に、霧は疑問の声をあげる。するとそこで初めて気づいたかのようにピコが羽ばたきを止めた。両の手をぐっと胸の前で握り、目を瞑つて必死に何かをしようとしている。見た目は愛らしいのだろうが、マナの流れを感じ取れるライ達にとっては益々緊迫感が増す瞬間だった。

今、ピコは魔法を使うためのマナを大量に吸収している。その指向性がこちらに向いてもいいように、ライも同様に魔素を取り込み始める。

見極めるのはほんの些細な瞬間だ。行使されたのが攻撃性のあるものならば躊躇うことなくピコを攻撃する。そうでないのなら何事もなかつたかのように傍観に徹する。

霧の期待の視線、ライの険しい視線の中、ピコの体が一瞬光った。

「うわっ

」

霧は驚きにのけぞり、ライは吸収した魔素を霧散させた。今のは単純に沈黙の魔法を打ち破つただけだと気づいていたからだ。

一瞬の光で目がやられたのか、しばらく霧は目をこすっていたが、少しして視力が戻ったのか、ゆっくりと目を開ける。

そして次の瞬間。

「ありがとねー！」

「うおおー！」

自分の顔に抱き着いてきた妖精に再びのけぞったのだった。あまりに勢いよく背に体重をかけたために、椅子が耐え切れなくなりそのまま倒れてしまう。

「魔王様！」

咄嗟にライは近寄るのとするも、霧の出した手を見てその動きを止める。構うな、という意味だろう。

「ありがとなのねー！　ねー！　霧いいひとー　ありがとー　ありがと！」

「え、あ？　あー？　なんだ」

ピコは霧の頬に抱き着いて何度も何度も頬ずりをしている。その小ささと自分の頬という位置のせいか、霧は自分に何をされているのかが見えないのだろう。先ほどから疑問の声をあげている。

「嬉しいなつ、嬉しいなつ、嬉しいなつたら嬉しいなー！」

「ああ、お前もしかしてピコか？」

「ピコ？　ピコ？　あたしピコー　あなた霧！」

「……何だか瓶の中にいたときと印象が違うなあ」

どこか呆れた風に霧は言う。だが、その様子を眺めていたライからすれば、今の姿こそが精靈族らしいと思つ。精靈族は自然の結晶ともいわれており、その性格は純粋ただ一色に染まつてゐるといつ。純粋が故に、その言動は子供のように天真爛漫だと伝えられているのだ。

「まあいいか……どうでもいいけどピコ、そろそろくすぐりたいよ

「くすぐつたい？　気持ちいい？　霧は気持ちいい？」

「いやそづじやなくつてさ」

苦笑を浮かべながらピコの相手をする霧を見ながら、ライは安堵の息を吐いた。どうやらこの精靈族の少女はこちらに害を与えるとはしていない様子だ。その上、霧に対しても感謝の念まで覚えている。この調子ならば突然逃げ出して霧に寂しい思いをさせることがないだろ?と、一人の様子をみて思つ。

「それでは魔王様、私はこれにて失礼します」

どうやら自分がここにいる用事は済んだようだと思い、ライは霧に一礼をする。

「ん？ ああ、了解。文字の件、頼むな」

「かしこまりました」

そう言つて、ライは霧の部屋を後にすることになった。

部屋を出て、扉を閉める。

「……」

そのまま立ち止まり、しばらく顔を笑顔に染めていたライは、突如その表情を厳しいものに変えた。左右には近衛兵が立っているも、その一人に挨拶の言葉を向けることもなく、ライは歩き出した。向かう先は自分の執務室。霧に呼び出されて中断していたが、ライは他国からの使者が持ってきた手紙の返事を書かねばならないのだ。それは決してライにとって快く感じる瞬間ではなく、まるで敵と相対した時のような心境を与えるのだった。

前回、一番に手紙を送つてきたグーアに遅れること数週間、遂にその他の国までもが霧の存在を仄めかす手紙を送つてきた。ある国はグーア同様顔見せをしたいという旨が記されており、ある国は事實確認の旨を記していた。どの国も最終的には魔王がいまギリアムに存在するのかどうかを知るための手紙であることはライには看破出来たことである。その返事もまた、グーアと同様の内容を記して送り返すつもりではあるが、グーアのように素直に引き下がつてくれる国ばかりではないこともまた、ライは知っていた。

歩きながら、ライは考える。今のところは順調にきている。霧は魔族の力の使い方を覚えてきているし、こちらの世界に溶け込もうとしてくれている。武闘祭までのあと数か月でどこまで従来の力を取り戻してくれるかは分からぬが、今の調子ならば問題はないはずである。

だが、だからこそ今霧の身に何かがあつてもらつては困るのだ。既に他国には霧の存在がほぼ知られていると思つていい。そして、霧は未だ十年前の頃と変わりない力しか持ち合わせていない。魔王の座を狙う者からすれば、今の時期が最も事を成しやすい時期なのだ。

「……イクオールともまた話し合わなければいけないですね」

歩きながら顎に手をやる。執務室への道すがら、時折メイドが通りすぎるも、礼をするだけでライに声をかけようとする者はいない。もしも声をかけたとしても、今のライの耳にはその声は届かないだろ。それほどまでに、ライは自身の世界に没頭している。

「近衛の数を増やすか……しかしそれはイクオールが呑と言つか……ならば黙つて……いや、しかし近衛と衝突されても困る……か……」

ライの咳きは途切れることを知らない。彼の頭の中では、現在の霧の護衛状況と今後どうしたらいいかの具体案が次々に浮かんでは消えている。

そのままライは自身の執務室の前までやつて来た。部屋の前にはずっと待機していたのかメイドの姿がある。

「ふむ……ちょうどいい、部屋の中に入りなさい」

「はい」

ライはそのままメイドに声をかけると、自分の執務室の中に入った。そのまま真っ直ぐに自分の椅子に座ると、正面に立つメイドに声をかける。

「今、“動ける者”はどれくらいいますか？」

「国内だけに限るのでしたらおよそ一十名かと」

「ふむ……」

情報収集や汚れ仕事を引き受け、ライ直属の部下はおよそ百名前後いる。国内に居ないのは情報を得るために他国へと出向いているために、今すぐ呼び寄せるといふことも出来ない。

「その者達は国内の情報を集める様にしてください。どこで、どんな噂が立っているのかを重点的に調べるようお願いします」「かしこまりました」

ライの声色に急ぐものを感じたからだらう、返事だけをして、メイドは急くよじて部屋から出ていった。

「……」

その後ろ姿を眺めながら、ライは再び思考の海に沈みそうになる自分を自制した。

「やれやれ」

机の上には書きかけの便箋が置かれている。同じような内容を書けばいいとはい、その言葉の中に含まれる空しさのようなものを感じ、ライはため息を吐いた。自分が書く文字だというのに、中身が薄っぺらいのを自覚出来るだけに、何ともやりきれないものを感じるのだ。それは要因となる霧への不満というわけではない。ただ、仕方なく生まれた状況に対しての意味のないため息だつた。

「まあ……これも魔王様が居ない頃に比べれば贅沢な悩みですね」

ライは先代のノライである父親から当主の座を受けてから十年、主不在の時間を耐えてきた。魔王の為に、魔王の為に、ただそれだけを願い行動してきた一族の当主であるはずなのに、自分が仕えるべき相手のいない時間。それはどんなに苦痛をもたらしだらうか。あるいは空しさを感じただらうか。

臣下に暇を与えるという言葉がある。それは正に的を射ているものだとライは思う。何故なら、家臣にとつて主人に仕えること以外は退屈な時間でしかないからだ。自分は十年もの間、その苦痛に耐えてきた。寿命が人間族よりも長い魔族ではあるが、ライにとつての十年は自身が生れ落ちてから過ごしてきたどの時間よりも長く感

じた日月だった。

「さて……今は出来ることをやりましょうか」

そう言って、ライは筆を手に取る。今出来ることを、自分が魔王の為に行動出来ているという実感を胸に、ライ・ノライは今日も主人の為に働くのだった。

十話（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

「……お時間です、陛下」

「ん……ああ、お疲れさま」

カコの時間を知らせる言葉に、霧は閉じていた瞼を開いた。長い間目を閉じていると、開いたときに若干の眩しさと新鮮さを感じる。悪くないその感覚に身をゆだねながら、霧は背筋を伸ばした。

霧の訓練は既に魔法を実際に扱うところにまで発展している。とはいっても、行使している魔法は基本中の基本だけで、魔王染みた力はその片鱗さえ見せていない。また、いくら魔素を取り込むことが出来るようになつたとはいっても、霧のそれは無意識の内に行使出来るレベルではない。貴族と呼ばれる上級の魔族は、魔素を無意識の内に取り込み、魔法を発する。霧は未だに意識的にしか取り込みが出来ないので、魔法の訓練が終わる際に復習としてこうして瞑想をするのが日課になつていているのだ。

まだまだ魔王としては程遠い力だが、確かに進歩を見せる霧の姿に、どこか嬉しいものをカコは感じていた。

以前にも思つたことだが、今代の近衛兵は歴代のどの近衛兵よりも恵まれてる。これまで魔王の訓練に立ち会つということも、また魔王に魔法の使い方を伝授するなどという光栄な立ち位置を承ることもなく、ましてや室内の中にまで近衛兵を配置するなどということはありえなかつた。

魔王というのは単体で最強の存在であり、その近衛兵として出来ることと言えば露払い程度のことしかなかつたのだ。

霧自身は護衛されることにあまり良い感情を抱いていない様子ではあるが、最近ではそのことについてあまり気にしてないような様子も見せている。今のままでいいが、力を取り戻してからも近衛兵の存在を許してくれることだらう。そうなればいいとカコは思つ。

「それじゃあ部屋に戻るよ

「はつ」

霧が立ち上がり訓練室から出て行こうとする。力コは素早く周囲に視線を巡らすと、それに反応するように一六人ほどの近衛兵が霧の後ろを走っていく。ぞろぞろと移動する一行を見送つてから、力コは未だ訓練を続けている近衛兵の元へと向かう。

人型をした人形に延々と魔法をぶつけているその姿を見て、まだまだ甘いと判断を下す。ここでこうして訓練をしているのは、もちろんローテーションの関係もあるが、霧の護衛を努めている兵と比べると今一つ魔法を使いこなせていない兵士達なのである。

魔族において魔法行使が達者であるかそうでないかの基準は、その展開速度と威力による。魔素を取り込み、それを意味ある魔法言語によつて指向性を決め、発動する。最初にどれだけ多くの魔素を取り込めるか、それをどれだけ素早く指向性を定めることができるか。貴族などの上級魔族になれば魔法言語を用いなくとも魔法を使用することが出来るが、今ここで訓練に明け暮れている兵士にそこまでを求めるほど力コは鬼ではない。だが、もう少し腕を上げてもらわなければ困るのが実際のところではある。

彼らの訓練を眺めながら、力コは口を出そとはしない。魔法の行使は誰かに教えられるものではなく、自分でコツを掴み自分なりの感覚で使うものだからだ。霧に関しては今までブランクがあるために特別に教えているに過ぎない。

その霧も、すぐに今訓練をしている兵士達を抜くだろうと力コは思った。流石は魔王の血筋とでもいうべきなのか、霧はこちらの言うことを飲みこむのが早い。それは新しいことを覚えているというよりも、昔知つていたことを思い出しているというほうが正しいのかもしれない。霧の中には、こちらの世界での十年の記憶が確かに刻まれているのだと、訓練中の霧を見て力コは確信するのだった。

「ふむ……撃ち方止め」

訓練中の兵士全員に聞こえる様に大きく声をあげる。兵士全員がそれに反応して魔法行使をやめ、力コの方を向く。

「全体整列」

朝から延々と訓練を続けていたにも関わらず疲れを見せない動きで、兵士達は整列を始める。すぐに綺麗に列を成した兵士たちにつ頷いてから、力コはこの後の予定を口にし、全員に指示が行きわたつたのを確認して、解散を告げた。

各々自由に散っていく中、力コは一人ゆっくりと壁際に設置されている人形に向かって歩く。およそ十メートルほどの距離を置いて立ち止まると、小さく息を吸つた。周囲に漂う魔素を取り込み、それが右の掌に集うイメージを作る。一秒ほどの時間を持つて力コの右手に集つた魔素はソフトボール程の大きさを持つてその手の中に形を成した。魔素が具現化したのを感じ取つた力コは、右の手を己が出せる限界の速度で突き出した。その速度に比例するかのように魔素の球体は瞬きの間を置かずに人形に到着し、爆発した。人形は上半身を抉り取られたかのような骸を晒しており、力コは残心をしながらゆっくりと体勢を戻した。

そのまま、自分が破壊した人形に近寄ると、抉れた部分に触れる。悪くはない、と思った。今力コが行使したのは最も単純な魔法であるが、本気で魔素を集めずにこれだけの威力を出せたのならば上等だろう。

「……」

力コは己の右の掌を見つめ、何度も握つては開くという動作を繰り返した。武骨な手はこれまでの訓練の賜物であり、そこには自分の誇りがある。この手で、この身で、この心を持つて、力コは魔王という存在の近衛を努めてきたのだ。

だが、ふと思いつく。自分のその誇りが拠り所をなくした時のことを。先代魔王が崩御したと知つたあの時を。

力コはライとは違い、先代魔王の頃にも近衛隊の隊長を務めていた。もちろん、先代魔王が亡くなつたその瞬間も、馬車の外で護衛をこなしていた。突如として王妃であるアミリアが魔王陛下が亡くなつたと口にしたとき、力コは自分が立っている場所が崩れる音を

聞いた。まるで底なしの穴に放り込まれたかのような錯覚に、思わず両の膝をついたのだ。そしてカコはそのまま自分の持つ剣を手に、首を搔つ切ろうとした。日本でいう所の追い腹だったが、それを止めたのがアミリアだつた。確かに魔王は死んだかもしない、しかし、まだ次代の魔王であるマギー 霧のことだ が生きている。貴方が本物の近衛隊であるのならば、次代の魔王も守るのが道理ではないのかと諭され、カコはそれから十年といつ長く時を主不在のまま過ごすこととなる。

この気持ちちはライ・ノライも味わつたのだろうが、一度主を持ち失うのと、初めから存在しないのでは、そこに感じる痛みがまるで違うとカコは思つてゐる。まだまだカコにとつてはライ・ノライは臣下として新人でしかなく、それなのに彼は自分こそが魔王一の臣下という態度をとつてゐるのを感じるたびに、カコは殴りつけたくなる自分をぐつと堪えてきた。仕え方が違う、それは認めよう。一度も主を持つたことがない、ああそうだろ。だが、なればこそ、こちらの仕え方に口を出すなどカコは思つてゐる。その思いは決して口に出すことはないが、態度には出でているのだろう。自分とライ・ノライが仲が悪いのはそう言つたところが原因なのだろうな、とカコは考えた。

「……」

昔を思い出し、柄にもなくカコは少ししんみりとした気持ちになつた。だが、この気持ちもあとしばらくの辛抱だとも思う。霧が力を取り戻し、魔王としての力を持つてくれさえすれば、またあの羨望の日々が蘇るのだと、カコは心の底からそう信じてゐる。

「ふ……」

最後にもう一度だけ抉れた人形をそつと触れると、カコは踵を返して部屋を後にするのだった。

霧は訓練を終えると、そのまま昼食を取るのが常となつていて。その時に、アミリアが一緒に取るのもまた、何故か分からぬが当たり前になつていて。別段それが嫌というつもりはない霧だが、出来ることなら食事中にじつとこちらを見るのだけは勘弁ならないだろうかとも思う。アミリアは何が楽しいのか、訓練で腹を空かせた霧が並べられた昼食に食らいつくるのを楽しそうに眺めてくるのだ。まるで授業参観のようなその時間に、毎度毎度霧は気恥ずかしい思いを抱きながら食事をしなければならないのだ。

「それで、調子はどうですか？」

「ん？……ああ、悪くはない、とは思つ」

突然尋ねられたことに一瞬逡巡して、訓練のことと気づいて返事をする。アミリアはアミリアで何かすることがあるのか、彼女は基本的には霧の訓練に顔を出しあしない。といつても、報告自体は力「からいつているのかもしねないが。

「そうですか。あまり無理をしないようにしてくださいね？」

「ああ。まあ何が無理に当たるのかは分からぬけどな」

「霧、無理よくないよ？　よくないよ？　元気になるといいなー！」

と、霧の返事を遮るようにしてピコがその姿を現した。結局あれから逃げ出すということもなくこの場にとどまり続けている彼女は、基本的に霧が訓練の最中はベッドの中で横になつていて、部屋に戻つたときにまだ寝ていたので霧は敢えてそのまま寝かせておいたのだが、一人の会話に目を覚ましたのだろう、ピコはいつものように元気な声を張り上げながら霧の頭の上を飛んでいる。

「ピコ、今話してるから静かにな？」

「ピコ静か？　静かにしますー。すーすーすー」

「ピーハ」

「むい」

重ねて言つと、ピーハはじけたかのよつとしてベッドの方まで戻つて行つた。

やれやれと霧が顔を戻すと、アミリアが楽しそうに笑つていた。霧は彼女のこの笑いがどうにも苦手だった。この笑顔を向けられるど、何だか自分が子供に戻つたかのような感覚を受けるのだ。しかし嫌といつても出来ず、結局霧は彼女の微笑みを受けながら昼食を続けるのだった。

そうして食事の時間は終わり、アミリアは自室へと戻る。

「それでは文字の勉強を頑張つてくださいね」

「ああ」

部屋を出る前にそつ言つて残してから、アミリアは去つて行つた。

「さて、と……」

そう言いながら、霧は椅子の背もたれに体重をかけた。これからはライの手配してくれたメイドによる文字のお勉強会が開かれるのだ。既に何度かその勉強会は開かれているが、霧は思つてよりも習得の早い自分に半ば感心染みた気持ちを抱いていた。向こうの世界ではお世辞にも勉強が出来ていたわけではないというのに、どうしてこつちの文字を覚えることだけは早いのか。やはり自分の中には十年の記憶がまだ眠りに着いているのだろうな、と霧は思う。そうでないと、こんなにも早く文字を習得できるはずがないのだから。向こうの世界に居た頃にテレビでやっていたことだが、成人してから新しい文字を習得するのは非常に難しい部類に入るらしい。それを覚えていた霧は、実際の所こちらの世界の文字を覚えるのは一年はかかるとみていた。けれど、現状のペースで行くと一月もかからない内に自在に読み書きが出来るようになると感じていた。

「早くこないかなー」

勉強が待ち遠しいといつ、何とも稀有な気持ちを抱きながら、霧はメイドの到来を待つ。ほんやりと天井を眺めながら、何かいい時

間つぶしはないかと部屋の中を眺めていると、シャル・イクオールの姿があることに今更ながらに気が付いた。未だに男か女か分からぬ彼、あるいは彼女の顔を眺めていると、自分に用事があると思ったのかシャルは早足に霧の元に近づくと膝を着いた。

「何かご用でしようか？」

「あ、あーいや、そういうわけじゃないんだが」

真っ直ぐに見つめてくるシャルに、これと言つて用事があつたわけではない霧は言葉に詰まる。お前つて男なの、女なの？　と直接聞ければいいのだが、その質問がどれだけ不躾なものか理解しているので、何とも言葉にはしづらさもある。何かいい話題の逸らし方はないものかなと思つていると、ふとシャルの髪の色を見て気づいた。

「いや、シャル、だつけ？　シャルの髪の色つてカコと違つけど、もしかしてシャルは母親似なの？」

そう、父親であるはずのカコの髪の色は霧と同じ黒色をしているのに、シャルの髪の毛は綺麗な金髪をしているのだ。

「……そうですね、私はどちらかと言えば母に似たのだと思ひます」

「あー、やつぱりかあ」

顔つきといい、体格といい、シャルはカコの要素をビリにも含んでいないのだ。少なくとも、普通の服装をして田の前に立つていれば綺麗なお姉さん、というイメージしかシャルには抱くことが出来ない。

と、霧が一人で納得していると、シャルはぼそりと、まるで悔やむかのように呟いた。

「本当は……父のような姿に生まれたかったのですが……」

「え？」

薄らと聞こえたその言葉に、最初霧は聞き間違いかと耳を疑つた。そんなに綺麗な目鼻立ちをしていて、そんなに綺麗な髪をしていて、実はカコに似たかった？

「あー」

「こ」は笑う所なのだろうかと霧は真剣に悩んだ。これが仲のいい友人ならば そんなものは居なかつたが お前実は拾われたんだよと突つ込むところなのだろうが、生憎と霧とシャルはまだ片手で数えられるほどしか会話を交わしていない。ならば、本音で呟いたのかと思うも、それはそれでどう答えていいのか分からない。

「……」

「……」

結局、メイドが来るまでその氣まずい空氣は続けられたのだった。

夜。城下ではまだ生活の明かりが灯り人々が活動しているのが伺えるが、霧の居るこの部屋の中はそんな環境とは別世界だった。まるで修学旅行の夜のホテルのような静けさをこの部屋は持っている。最も、それをぶち壊す存在もまた部屋の中に入るのだが。

「霧、霧、遊ぼう遊ぶ？ 今から何する？」

「んー。そうだなあ……もう寝てもいいんじゃないかな？」

「ぶー、ぶー。外れはーずれ。今から霧はピコと遊びましょウ」

彼女は昼間たっぷりと寝ていたので眠気とは無縁なのだろう。といつよりも、精霊族というのは眠気を感じるのだろうか。

「なあピコ、ピコ達つて眠気って感じるの？」

「んー？ 眠気？ 眠い時は眠いよ？」

眠気はあるらしい。が、常時ハイテンションな彼女の言葉はどこまで信じていいのか分からないので話半分に聞いておくことにする。

「そりがー……でも俺は今日お風呂してないから少し寝たいな

「ふー！ ピコ退屈。退屈退屈退屈ー！」

ふんすかぴーと怒るピコに、どうしたものかと霧は悩む。確かにまだ寝る時間としては早い方だろう。だがここ最近は規則正しい生活を送っている霧としてはそろそろ眠りについてもいいんじゃないかと思わないでもない。目の前で綺麗な羽ばたきを見せる妖精はそれを決して許してはくれそうにないが、何とかして彼女の意識が寝る方向に向かないかと霧は考える。

「んー そうだなあ……」

そう言いながら、霧は座っていた体勢から仰向けにベッドへ倒れこむ。するとピコが顔の前にパタパタと羽ばたきながらやって来た。

「霧寝ちゃう？ 寝ちゃう？」

「いやまだ寝ないよ。ただピコと何しようかなーって思つてやー」

「んー、ピコ遊びたい、遊びたい。でも何しよう？」

「何しようかー」

霧がかかり始めた意識の中、何かいい遊びはなかつたものかと霧は考えるが、寝る方向に向いている頭は思考よりも睡眠を欲していふらしかった。考えようとしても考えは考えとしてまとまらず、思いついた端から全て霧散していく。

ああこりゃダメかなーと霧は思つた。もう体と気持ちが完全に眠りにつこうとしている。

「あー」「めんピコ、やっぱり俺眠いかも」

「霧寝ちゃう？ 寝る？ じゃあピコも寝るねー」

そう言いながら、ピコは霧の顔のすぐ横に着地するとそのままこてんと横になってしまった。すぐに聞こえてくる寝息に、精霊族つてこりの実は年中寝て過いでいるんじゃないかと苦笑が漏れる。

さて、と霧は寝ようと/orして、一つやり残していたことを思い出す。上体を起こして、部屋の中にまだいる近衛兵に声をかける。

「もう寝るから退散してくれていこよ」

霧の言葉に、部屋の中居た近衛兵は互いに視線を交わらせてから駆け足で部屋から出て行つた。近衛兵とて、眠りについている時今まで部屋の中に待機しているわけではないのだ。いや、一度待機しようとしたことがあって、その時だけは全力で拒否をした霧に力が折れる形で出ていってくれることになつたのが本当の理由なのであるが。

「じゃ、寝ますかねえ……」

ピロを跳ねあげないように枕にそっと頭を置きながら霧は目を瞑つた。すると待つてましたと言わんばかりに体中から力が抜けていき、ゆっくりと意識が散漫していく。しばらく暗闇の世界を味わつてから、霧は眠りについた。

ふつと自然に部屋の中から明かりが消える。ある時刻達すると、室内の明かりは自動で消えるように設定されているのだ。

部屋の中には霧とピロの寝息だけがある。

安穏とした時間。平穏な時間。安らぎの時間。

だが、霧のその時間は着実に終末を迎えるとしている。に、霧は気づいていなかった。

今はただ、ゆっくりと、ゆっくりと、その時間を過ぎてしている。その時が来るまで、あと僅か

十一話（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

夜が明ける頃。城内はしんと静まり返つており、呼吸の一つ一つの音すらもが耳に届く。ともすれば、心臓の音すらも聞こえるのではないかといふほどの静謐の中、アミリア・エクスークワは一人沈痛な面持ちで窓の外を眺めていた。

この時間帯では、如何に盛んな城下街であろうともまだ人の流れは少ない。露店商もしこみが必要な者以外はまだその姿すら見せていない。

視線を上げてまだ薄暗い空を見ると、そこには星々の瞬きが彼女を待つっていた。遠い向こうではこれから上がるうつとする日の光がぼんやりとその姿を現そうとしている。

夜が明ける。

一日が始まる。

「……」

田をそつと閉じて、アミリアはそんな他愛のないことに、確かな幸福を感じていた。何てことのない一日。当たり前に迎えて、当たり前に去っていく毎日。

それが、何よりも嬉しい。

彼女の現在の日々は間違いなく輝かしいばかりの光に満ち溢れている。朝を迎え、我が子と食事を取り、我が子の成長の報告を聞き、そして眠りにつく。それがどれだけ喜ばしいことか、きっとこの気持ちちは誰にも伝わることはないのだろうとアミリアは思つた。

彼女にとつて、霧の居ない十年は耐えがたき時間を耐えるだけの日々だった。夫である先代魔王との子宝を自らの手で手放さなければならなかつたあの瞬間、どれほどの悲痛を胸に抱いただろう。

我が子は何も問題なく生活を送っているだろうか？ 何か身に危険が迫つてはいないだろうか？ そんなことばかりを考えていた十年は、振り返ればあつという間に過ぎ去つて今を迎えている。色々

なことがあった。他国の代表に十年という期日を待たせるために自分の力を惜しげもなく使つたこと。主人の居ない家臣が国から去らないように、また、先代魔王の後を追わないように説得を続けたこと。そして、自分の体のこと。

その時、じほん、と咳が出た。一度出ると、それが呼び水となつたかのようにたて続けて咳が出る。しばらくゴンゴンと咳をしていたアミリアは、自分の胸を軽くたたいた。まだ喉がいがらっぽいのは変わらないものの、少しは収まつたことに安堵しながら、テープルの上に置いておいた水差しを手に取り、コップに水を注ぐ。二口程の量をコップに移してから、喉を潤す。そうするとよつやく喉の違和感が消えてくれた。

「ふう……」

小さく息を吐きながら、椅子に座る。もう少ししたら世話係のメイドが部屋に来るだろ。そうなつてしまふと自分だけの時間は終わりを告げてしまう。それまでの間、もう少しだけ、アミリアはこの静かな時間を味わつていたかった。

誰にも邪魔されない時間というものは、時に何よりも価値のある物に成る。

今日はどんなことがあるだろ。どんな風に過ごすのか。まるで夢見る少女のような心持で、アミリアは夢想する。

その時間がもう残り少ないと気が付きながら、だからこそ、彼女はそうすることを止めなかつた。

「成らぬ」

室内に、カコの重苦しい声が落ちた。それは絶対的な響きを持つた否の声だった。

「はて、それはまだどうしてでしょうか？」

対して答えるライの声はどこまでも平坦で、気持ち呆れのようなものも交じつているようだつた。

場所はアミリアの私室のことである。まだ霧の訓練が始まる前に、三人は集いることについて話し合いをしていた。いつものように本田の予定について互いに確認をしてから、ライが唐突にとる話題を出したのが始まりだつた。

それは、霧に夜伽の相手を宛がつてはどうだろうかという提案だつた。当初よりそのことを考えていたライにとつては何気ない発言だつたのだろう。しかし、それを聞いた瞬間、カコは固い声でそれに否を唱えたのだ。

途端に剣呑な空氣が生じる。

「今陛下は順調にこちらの世界に適応されておる。それに異物を混ぜるよくなことはするべきではない」

殺意すらまじつていそうな視線を向けながらカコは叫ぶ。だが、それを受けても、ライは飄々とした態度を崩さないままに返した。「順調に適応されている、だからこそタイミングで私は言つているのですよ。魔王様はどうやら向こうの世界での常識が身についてしまつてゐるらしいので中々そういう方面に興味を示しておられない。どの道将来的にはそういうお勤めをしていただかなればならないのである以上、色々な状況に慣れてきている今、そうしていただくのがいいのでは? と私は申しているわけですが」

それのどこがいけないのでしょうか? そうライは口にして、腕を組んだ。とんとん、と指で自分の腕をたたくその仕草は、もしかしたら彼もまた内心では苛立ちを感じているのかもしぬなかつた。「陛下は今、様々な状況に身を置かれるので必死なご様子だ。そこ

にまた追い打ちをかけるような提案は睡棄すべきものだろう

「ふむ。もしも魔王様がそれを否と仰るのであればそこで退けばい

いだけなのは？」

「それでは陛下にお手間を取らせてしまつ。そうなるべりいでれば初めから何もしないに越したことはないだろ？」

「では魔王様がそう仰るまでは何もするべきでないと？」

「うむ」

「それでは魔王様が気を使って何も言わない場合はどうあるのです？ 貴方も気づいているでしょうが、魔王様はどこか我々に対して遠慮しがちなところがあります。その辺りはどう考えてるので？」

「む」

そこで初めて、力口が待つたをかけた。確かに、現代日本で生きてきた霧には日本人特有の謙虚が美德とするきらいがある。それはもしかしたら魔王となることを拒否しているから出でている態度なのかもしけないが、家臣である力口やライにとつてそれは喜ばしいことではない。

答えに窮している力口を見て、攻めどけると感じたのか、ライは続けて言つ。

「確かに貴方の言つようて魔王様にお手間を取らせてしまつ可能性はあります。が、それは先ほども申したように魔王様が否と仰られた時に退くように夜伽の相手に指示をしておけばいいだけのことです」

「む……しかしながら……」

「しかし、なんですか？」

「……」

力口は答えない。まだまだ力口に比べると若輩もいいところにライではあるが、互いに得意としている分野が違う。ライは口で、力口はその脅力で。彼らは各自の得意分野でもつて魔王を支えているのだ。この場合は自然な流れとして、ライに分配が上がっている。

何も答えようとしない力口に追い打ちをかける様に、ライは今まで沈黙を保っていたアミリアに話を振つた。

「王妃様はその点をどうお考えですか？」

現代の一般家庭において自分の息子に夜の相手をあてがおつと思うのですがどう思いますか？ などと聞かれたならば答えに詰まるだろうが、ここは王族が存在する世界であり、またアミリア自身がそういう流れで魔王の相手となつた経緯を持つ。その点を踏まえているのか、ライは何の躊躇いもなくアミリアに問う。

対するアミリアは頬に手を当てて、そうですね、と呟いた。

「私は坊やが望んでいるのであれば……とは思いますが、今ライが言つたように、坊やはどこか謙虚さを美德としている部分がありますので……」

そここの続く言葉を分かりきつてこらのだろう、ライはどうです？

といつた表情で力口を見る。

とうとう進退窮まった力口は、言葉を躊躇んだ。これ以上は自分が何を言つても不利な状況であることを察したのだ。

「では……」

と、ライはカコからアミリアに視線を映し、最後の許可を得る

「その方向で進めてよろしいですね？」

「……そうですね、ようしくお願ひします」

その返答に満足げな表情で頷き、ライは一礼をする。

「……では私は陛下の訓練があるのでこれにて失礼」

もはやライの方には一瞥もくれることなく、カコはアミリアに礼をすると部屋から出て行つた。

部屋を出て訓練室に向かう道すがら、カコは不機嫌さを隠さずともせずに仮頂面で先ほどのことについて考えていた。

確かに魔王となる御方であるならば女の一人や一人囲つていってもなんらおかしなことではない。先代魔王はアミリア一人しか娶つていなかつたが、過去に遡ると妾の十や二十回つっていた魔王も存在する。その点でいえば、霧が何人の女性を娶ろうとカコの触れるべきところではない。

だが、それが何故今の状況でしなければいけないのか、それが力カコには納得のいかない点だつた。

「……」

だが、何よりも気に食わないのは、ライという男　　というよりも、ノライ家の一族が魔王にとつて無意味なことはしないという点である。カコがライを気に食わなくとも、ライの行動自体は必ず魔王にとつて何かしら必要に迫られるだろうことを予測して行動している節がある。それはこれまでのノライ家の行動からもはつきりとしている。だから、きっと今回のことも何か意味のあることなのだろうと、思つてしまふ自分が何よりもカコは気に食わなかつた。

……とはい、だ。では一体何故今のタイミングで行動を起こす必要性があるのか。先ほどの場にはアミリアが居たことと、直接それを訪ねることが不快だったために訊くことはなかつたが、何かしらの意味がそこには隠されているはずだ。

それは何か……？

カコにはそれが分からなかつた。何か意味があるはずなのに、それがまるで見当がつかない。

「何か急がねばならぬ理由が……？　しかし今急がねばならぬ」と言えば武闘祭だけのはず……む

武闘祭、という単語に引っ掛かるものを覚えて、カコは立ち止まつた。

「武闘祭……期限……陛下……」

ぶつぶつと一つ一つの単語を組み合わせていく。すると、それまでは見えてこなかつた意味が薄らと浮かび上がってきた。

「もしや……そのために……？」

見えてきた意味に、しかし、とカコは首を振る。だが、もしも霧の力が武闘祭までに間に合わなかつた場合、カコが今思い浮かべた未来像が現実味を帯びてくる。

カコは後ろを振り返つた。その視線の先にはアミリアの私室がある。もしも今のカコの想像が当たつていた場合、今頃あの部屋の中ではそのことについての話し合いが成されているだろう。そうであれば、自分もその会話に参加するべきか、と戻りそうになる足を力コは止めた。

自分の役割は魔王陛下の護衛であり、露払いである。ならば、それ以外のことについて頭を巡らせるのは違うと思ったのだ。それに、もしもそのことについて知る必要があるのならばライからそれとなしに知らされるはずだ。

カコはライのことを気に食わない相手として見ているが、自分の役割はきちんとこなす相手としても見ている。

だから、今カコはカコの出来ることだけをすればいい。
「だが……もしもそうであるならば、シャルをあてがうのも……いや」

不機嫌そうな顔が一転、苦笑へと変わる。自分で言つていて、つまらないことを口にしたと思ったのだ。

「まあいい。今はまだ、その時ではなかつ」

誰に言つてもない独り言を呴きながら、カコは訓練室へと足を向けた。

カコの去つた室内には、何とも表現しがたい空気が漂つっていた。

それは気まずさと緊張感をない交ぜにしたような空氣だった。

「ほん、とその空氣を取り扱つかのようにライが咳払いをした。

「それで、先ほどの続きとなりますが」

「……はい」

ライの言葉を予測していたかのように、アミリアは返事をする。まるでその続きを読めているかのような視線を向けられたライは、知らず緊張している自分に気が付いた。それは、これからする会話の内容がそれほど重いことを意識していることの表れなのだろうか。再度咳払いをして、カコは自分を取り戻す。これからする会話はあくまでも雑談のように、流れる様に行わなければならないのだから。

「最初はメイドの誰かをあてがつて魔王様の反応を確かめたいと思います。それで態度が良好であれば本命である何名かの女性を送り込もうと思うのですがよろしいですか？」

「良きに計らつてください」

「かしこまりました。その中には私の妹も含まれているのですが、その点でもご承を頂けますでしょうか？」

以前から考えていた、自分の妹を魔王に差し出すという考えは、しかしこの件に限つて言えば自分の判断だけで実行にするわけにはいかないのだ。魔王の寵愛を受けるということは次期魔王を孕む可能性も含んでいるのだから。

「かまいません。私の名において許可を出します」

「ありがとうございます」

そうして、また沈黙が訪れる。だが、会話のネタが途切れたわけではない。この沈黙は、本題に入る前の静けさでしかなかった。

ライは何でもないかのように、窓の傍に立ち位置を移動した。そこから見える景色は、今日も民が活気よく活動しているのが窺えた。そのままの視線と体勢で、ライは口を開いた。

「もしも……仮に、の話ですが」

「はい」

唐突な話題に関しても、アミリアはやはり何も訝しげにすることはない。何故なら、これは予想されてしかるべき話題だったからだ。

「魔王様が武闘祭までに、その御力が戻らない場合、についてです
が」

「はい」

「その場合……は、王妃様は如何されるおつもりなのでしょうか？」

それは、一臣下としての言葉にしては過ぎたものだった。だが、ライの主人はあくまでも魔王ただ一人であって、彼はアミリアに尽くしているわけではない。だから、例え不敬が過ぎようとも、魔王の今後についてのこの話題を逸らすことは出来ないのだった。

「私が責任を取らうと思います」

「……」

ライは敢えてアミリアの方を見ない。視線はただ、窓に向かはれたままだ。

「この十年そうしてきたように、私が勝手に宣言し、行動し、隠してきました。その結果の報いを受けるのもまた、私であるのが道理でしょう」

「……」

ライは答えない。答えるべき言葉を、彼は持ち合わせていなかつた。

「ですから、貴方達は坊やにとつて良きと思うことを成してください

い

「……御意」

結局、ライはそれしか答える言葉を発することが出来なかつた。それだけしか、彼がアミリアという女性にかけられる言葉はなかつたのだ。

それだけ、彼女の発した言葉には重みがあつたのだ。

だが、その重みはまだ、その時を迎えるまではただの言葉でしか

ない。その意味も、価値も、重みも、今はただの宣言でしかない。その言葉は、届くべき相手に届いたときに初めて、本当の姿を見せるのであるから。

だから、ライは答える言葉を持たない。彼女に何かを言えるとすれば、それは、その時を迎えた自分の主人だけだろうから。

そうして色々な思惑が交錯するなか、霧のある意味初めての夜が訪れるのだった。

十一話（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

しまつたと思つ点が一つ。

その1 あれ、主人公出てなくね？

その2 しまつた1-8禁お断りのタグをつけるのを忘れて
いた（冗談です）。

そろそろ本格的に話が進むのですが、ぶっちゃけ面白こと思つて
もらえてるのか、はたまたグダグダやつてんじゃねーよ、って思
われてるのが気になる今日この頃であります。自分で自分の作品を
読んで思うことがあつたとしても、それは感想ではないよなあと思
うわけで。

もしお時間とお手間をさいただけるなら、一言感想いただけないと
幸いです。

夕暮れの日が差し込む室内で、ライ・ノライは一人机に向かっていた。その視線の先、机の上に置かれた書面にはいくつかの名前が連なっている。それらは現在城内に居り、またライの一存でその意向を定めることの出来るメイド達だ。

今朝に話し合われた事案を、ライは早速とばかりに実行に移そうとしていた。

問題はではどのメイドを霧の元へと送るかということだ。既に手つきの者は手馴れているが、初物の方が好ましいという場合も想定しなければならない。果たして霧はそのどちらを好ましく思つのか。また、もしも霧が拒否した場合に普段から霧とは顔を合わせることのない者を選ばなければならない。

そうなつてみると、人選は限られてくる。書面に記されている名前の中に、脳裏で横線を引いて消去していくと、残りは一两名ほどになつた。見事に手馴れた者と初物に分かれたことに苦笑を浮かべつつ、どちらにするべきかと考えながらライは背もたれに体重を預けた。

決めるべきことは決めた感があるためか、ぼんやりと天井を眺めながら違う事案についてのことが脳裏を過ぎる。それは他国のことについてだ。既に魔族国家の五ヵ国には霧の存在が知られていると考えてもいい。もう何度かの手紙のやり取りを交わしてきたが、ことん追求してくる国は二つある。如何にライがのらりくらりとはぐらかしても、向こうは向こうで確信を抱くだけの情報を得ているのだろう。それが例えギリアムに存在する者の手引きで得た表には出しづらいものだとしても、向こうにとっては貴重な情報であり、判断材料なのだ。

追及していく一つの国『ガーシ』に関してはまあ、いいとライは考える。彼の国は古来より魔王に心酔しているといつても過言

ではないほどの魔王信者だ。こうしてしつこく魔王の存在について質問状を送つてくるのもそれが故の行動だろう。問題はもう一つの国だ。『コースト』という名を持つ彼の国の代表は、表面上はさておいて、その腹には常に何か腹黒いものを隠している。最も、ライの持つこの情報は先代のノライである父から受け継いだものであり、彼自身は彼の国の代表が実際にどんな人物かは情報でしか知らない。ただ、聞いた話によると最も好戦的な『グーア』をおおっぴろげな侵略者だとすると、『コースト』のそれは軒先から母屋を乗っ取る陰湿なものらしい。

陰湿さだけならば誰にも負けなしどうライの父を以てしてそう言わしめるのならば、なるほど度々質問状を送りつけてくるのはただの嫌がらせなのだろうかと、『冗談交じりに思つ。どうせ魔王の座を狙うのであればグーアのようにある種正々堂々としたもので来てくれれば楽で助かるのに、と埒のないことを思つ。

「もしかすると、もう手先が何名か侵入しているのかもしませんね」

そう言って、苦笑する。そればかりは流石にないと分かつていての『冗談だ。預けていた体重を戻し、再び机の上の画面に目を通す。今夜霧の元に送るのはどちらにすべきか。どちらも出生ははつきりとしている上に、メイドとしての質も悪くはない。どちらを霧の元へ送ったとしても、拒まれない限りは満足の行く結果を生み出すだろつとライは思う。

「……」

どちらでもいい。だからいい、どちらにすべきか悩む。手馴れたほづがいいのか、初々しいほづがいいのか　と、そこまで考えて、どうせどちらかが正解なのであれば両方を送り出して拒否された方は退かせればいいのではないかという結論に至る。悪くはない思考に、ライは納得するかのように何度も頷いた。

「決まりですね」

呴いて、紙を手に取る。目の前で揺れるその紙を持つ手に、力を

籠める。それは腕力ではない、魔素によつて具現化した炎が、ライの手の中にある紙を一瞬で燃え上がらせる。刹那に灰になったそれを、足元のゴミ箱にこぼすと、ライはまた何事もなかつたかのように手元の鈴を鳴らした。

「お呼びでしょうか」

まるで外で待機していたかのように即座に入室してきたメイドは、一礼をするとライの元へと近づいていく。ライは近づいてきた彼女に先ほど決めた一名のメイドへの言伝を伝えると、下がるように命令する。指示を確認するように一度だけ言葉にして優雅に礼をすると、メイドはまたすばやく退室していった。

「……」

メイドの去った扉を見つめるライは何を思つのか、顎に手を置いてままで動かない。やがて日の光が姿を隠し、夜闇が室内に暗闇をもたらすころになつて、ようやくライは立ち上がつた。そうして窓辺に寄り、空を仰ぐ。空には煌めく星々の姿がある。現代のように空気を汚す要因の存在しないこの世界において、星々の煌めきは月明かりに負けないものがある。

だが、今ライはその星々の美しさに目を囚われているわけではない。その星々がまるで群れているかのような光景に、ギリアム内の貴族を彷彿とさせているのだ。現在ギリアムに存在している貴族はこの十年を、次代の魔王が戻つてくることを夢見て他国に流れるとともに国内に居を構えたままだつた。それに偽りはないことはライにも分かる。だが、現在こうして霧という存在がいるのに、他国にその情報を渡していることもまた、変えようのない事実だつた。

彼らは魔王という存在が本当に戻つてくるのであればこのままギリアムに残ろうとしているが、その反面で、霧が魔王としての資質を見せないのであれば他国に正確に言えば、霧ではない次代の魔王候補に自分を売ろうとしているのだ。その、まるで矜持というものが持ち合わせない行動が、ライには理解できなかつた。理解できないし、そんな貴族連中に憎悪すら覚えていた。現在どの貴族がど

の国に情報を売り渡しているのか、大体は把握できている。伊達に長い年月を魔王のためだけに仕えているノライ家ではない。他国の貴族に間諜を忍び込ませるくらいは朝飯前だ。現在は霧がその力を取り戻していないから泳がせているものの、もしも霧がその力を取り戻したならば即座に何かしらの処罰を与えるつもりでいる。

「……と、熱くなつてますね」

自分の思考が四散していることに気が付き、一つ深呼吸をして冷静さを取り戻す。考えなければならないのは貴族連中への悪辣な言葉ではなく、彼らの今後の扱いについてだ。今はいくら情報を流していると分かっていても泳がせておける。彼らは霧の存在を知つてはいても、霧がどの程度の力を持つているのかまでは知らないからだ。まあ、霧の存在自体をそっぽいほいと吹聴されるのも好ましくない行動ではあるが、現段階であれば何とでも言い逃れは出来る。だから、今すべきなのは霧が魔王として君臨した際における彼らの沙汰を決定づける証拠を集めておくことだ。

それに、だ。

「あまり好き勝手されるままというのも少々癪に障りますからね……」

「のまま魔王を売るという舐め腐った行動を続けるようであれば、生贊となる対象が必要となつてくるだろう。」

さてそれを誰にするべきか。くつくつとした笑みを漏らしながら、ライはその時のことを考えるのだった。

夜の訪れ、それは霧にとつて安寧の時間を指す。午前は魔法の訓

練、午後は文字の勉強。いつの間に自分はこんなに勤勉な人間になつたのかと思うほどに毎日の生活は規則正しさを保っている。

平穏なことに変わりはないのだが、室内に護衛の兵士がいるのもまた変わりはない。いい加減彼らも夜にまでこうして室内警護をしてくれなくてもいいとは思うのだが、それとなしにそういえても、彼らの耳には届いてくれないらしい。

まあ、最近ではもうすっかり彼らが傍に居る生活に慣れてきたのでそこまで嫌というほどでもないのだが。

と、何とはなしに彼らを眺めていた霧の顔に、何かがへばりついてきた。何かと言ひながらもそんなことをする相手は一人、いや一匹しか心当たりがなく、霧はそのへばりついたものを手で剥がしながらため息を吐いた。

「ピーロ、突然顔に飛び込むのは危ないからダメっていっただろ？」

「やーの。ピコ退屈。霧遊ぼう遊ぼう」

手の中で反省した様子もなく、精霊族のピコはきやつきやと笑いながらそう訴えてきた。その姿は何とも愛らしくもので、ついつい毒気が抜かれてしまう。怒る気も失せて、霧はピコをテーブルの上に優しく座らせてやる。

「んー、でも何しようか」

「ピコ霧のお話が聞きたい」

「あー、また俺の世界のお話？」

「そう、そう」

じくじくと頷くピコ。彼女がそういうのも、あまりにピコが退屈と訴えるので霧の世界ではどんな移動手段があるとかを簡単に話してやったことがあるのだ。それがどうにもピコの琴線にヒットしたらしく、彼女は何かにつけて霧の世界の話を聞きたがる。まあ、下手に娯楽のないこの世界で遊ぼうと言われるよりも頭を使う必要がないので霧としては全然問題はないのだが。

「そうだなあ……じゃあ俺の世界にはテレビゲームというものがあ

つてだな」

霧自身は一度も体験したことないが、同級生や時折通りかかるゲームショップで流れている映像なので知識としては知っているテレビゲーム。こちらの世界のような魔法や魔族といった存在を唯一向こうの世界で味わえるのはゲーム以外では味わえないだろう。霧はそのゲームの中にはピコのような存在も居て、勇者と呼ばれる人間と一緒に旅をして、時に助け合ひ、時に恋に落ちたりするのだという話を聞かせてやる。するとその話がまたもや琴線に触れたのだろう、ピコは羽を羽ばたかせて周囲を飛び回り始めた。彼女はどうにも嬉しかつたり楽しかつたりするとそれが行動に出るみたいで、最近ではよくこんな行動も目にすることが出来る。

「いいな、いいな。ピコも旅したい。霧、旅しよう。ピコと旅に出るのー」

何となくそつまづだらうなという予想があつただけに、霧は苦笑を浮かべる。

「いや無理だよ。俺にはその勇者みたいな力はないし、それに……勇者が倒すべきなのは魔王だろ？　ここは魔族の住む国だから、俺たちが旅に出たって目的地がないじゃないか」

「いいのっ。ピコ旅したい、旅しよう」

どうやら彼女の中では霧と一緒に旅に出ることは確定しているらしく、これはまずい話題を出したものだと霧は内心で反省した。次からはこうなるような話題は出来る限り控えようと思つ。一先ずは興奮しつぱなしの彼女の行動を抑えるべく、場辺りな言葉で濁すことにした。

「そうだなあ。じゃあもし俺が勇者みたいな力を手に入れて、その時にもしピコが一緒に居たら旅でもするかー」

「ほんと？　じゃあピコ霧と一緒に居る。ずっと一緒にいるーーー

パタパタと鱗粉のようなきらきらを辺りに散らせながら、彼女はまた周囲を飛び回る。果たしてその時が来るかどうかは分からぬ

けどな、と心の中で霧は付け加える。

「じゃあ明日も訓練して早く強い力を手に入れないといけないから早く寝ないとなー」

「んっ。じゃあ寝ようすぐ寝よう。霧一緒に寝よう」「はいはい

そう言いながら、霧は周囲に視線を巡らせた。それはもはや言葉すら必要なくなつた「今から寝るよ」という合図だった。不動の佇まいを見せていた近衛兵は、それに反応して早足に退室していく。その際に一礼を忘れない限り、本当にきつちりとしているみなあと霧は感心する。

全員が出て行つたのを確認してから、霧はとある言葉を紡いだ。それは部屋に灯る明かりを消す簡易な魔法の言葉だつた。霧が習つた魔法はこういった生活に関係したものが多い。それは日頃から魔法を使うような機会が多いほうが慣れるのも早いだろうとこつ理由からだつたが、なるほどと霧は思う。確かにこうした魔法は簡単に頻繁に使つ。これならば次のステップに行くのも早いのかなと近衛兵のように自在に魔法を操る自分を夢想する。

魔王となることを拒否していながらも、こつして向こうの世界では空想上でしか存在し得なかつた状況 魔法を使つなどといったことに触れていると若干浮かれてている自分を感じる。世俗慣れしていないと思つていた自分だつたが、意外と俗物な人間だつたのだなと、今の自分に笑みが漏れるのを抑えきれなかつた。

「おっし、お休みピコー

「お休み、霧

言ひや否や、すぐに寝息が聞こえてくる。いつもの位置である霧の枕に全身を横たわらせた可愛い妖精は本当に寝付くのが早い。まるで睡眠薬でも自分で生成出来ているのではないかと思うほどの素早さだ。寝つきが悪いわけではないが、どことなくその特技に羨ましいものを感じながら自分も目を瞑る。

室内に、自分とピコの寝息だけがある。

「……」「

しばらく田を瞑つたままでいるも、中々眠気が襲つてきてくれない。やはり寝ると言つても普段に比べれば随分早い。これは辛抱強くいかないといけないな、と意識して全身の力を抜いた。

「……」

どれほどの時間が経つただろうか。まるで眠気の訪れない自分にため息を吐きながら霧はゆっくりと上体を起こした。枕元で寝るピコが起きないように気を付けながら、そつとベッドから離れる。

窓辺に近寄つて月明かりの中に身をさらけ出し、光眩い城下街を見下ろす。もうすっかり見慣れてしまつた景色だつた。電気のない世界だとこゝのに、城下街には大小さまざま光が溢れている。まるで現代のような景色だな、と霧は思つ。

窓辺から離れて月明かりだけを頼りに椅子に座る。テーブルの上には水差しとコップが一つ置いてあり、夜喉が渴いてもいいように気配りがされている。それに無言で感謝の念を抱いて、霧はコップいっぱいに水を注いだ。一口飲み、コップを置く。

「……」

何だか余計に目が冴えてしまつた氣がして、頭をぱりぱりと搔く。どうしたものかな、と窓から空を眺める。こちらの世界の星々はあちらの世界と比べて いや、比べ物にならなくくらいに美しい。向こうの世界の光は何だかぼやけているが、こちらの世界は一つ一つ、星の輝きがはつきりと目視することが出来るのだ。

「……」

そんなことを考えていると、向こうの世界での生活が脳裏を過ぎた。何の楽しみも生きがいもなかつた生活だったというのに、こうして違う世界に半ば強制的に連れてこられてから思い返してみると、郷愁のようなものが浮かぶのだから不思議だなと思つ。もしかしたら人生で初めて、あの空虚な生活に思いを馳せているのではないか。ともすれば、あんな生活でも知らず知らずのうちに青春のようなものを感じていたのだろうかとくすぐつたるものを感じ

る。

成績もぱつとしなければ運動も出来るとは言えず、人付き合ひは病気じやないかと思うほどに無精者で、将来の展望など持つていなかつた自分が、そんな生活を偲んでいる。これを可笑しいと言わずして何といえばいいのだろうか？

「つはは」

思わず、口から洩れる笑い。自分でもわざとらしくと思つ笑いだつたが、その笑いは嘘ではないと思つた。

「よし、寝るか」

何だか今なら気持ちよく寝れるような気がして、霧は席を立つた。背筋を伸ばしながらベッドに近寄り、ピタを起こさないように上がらりとしたそのとき　何かを落としたような音がした。

「？」

音がしたのは扉の方からだ。霧はベッドに潜り込もうとしていた体を止めると、ゆっくりと扉に近づいて行つた。気持ち足音を消しながら近づいていくその姿は何だか情けない様な気がしたが、こんな時間に誰かが扉の外を通るとは思えなかつた。ならばもしかしたら扉の外で待機しているだらう近衛兵に何かあつたのかと思い、足を速める。

と、早めたその瞬間、ノックの音。

控えめに、けれどこの静けさの中でははつきりと響いたノックの音に足を止めた。

何だ、来客か。

こんな時間に来るなんて珍しいとは思いながらも、霧は止めていた足を扉に向けて進めた。

この時、彼は重大なことに気が付いていなかつた。もしも彼に魔王としての自覚があり、自分の立ち位置について正確に認識していなければこんなことはなかつただらう。けれど、彼はあくまでも自分のことをただの人間だと考えており、その重要性についての認識が甘すぎた。

よつて、彼はその扉に返事をしてしまひ。

「はい？ 誰だ」

「入室してもよろしいでしょうか？」

誰何した言葉は無視されたのか、それとも霧とは面識がない相手だから答えられないのか。分からぬが、聞こえたのが女性の声であつたことから、霧は世話係が何かを持つてくれたのかなと思った。

「ああ、開いてるよ」

その言葉に、ゆつくりと扉は開かれた。そこから入ってきたのは、よく見るメイド服を来た一人の女性だったが、その顔は部屋が薄暗いこともあり見えない。

メイドは入つてきたときと同じようにゆつくりと扉を閉じると、まるでモデルが歩いているかのような華麗な歩調で近づいてきた。

「エスエムンフラス」

霧はメイドが完全に近寄りきる前に魔法を唱えた。その魔法は先ほど消灯させたばかりの灯りをつけるものだ。

明るくなつてようやく判明したメイドの顔は、やはり霧が見たことのないものだった。

「ええと……何か用事？」

「……」

入室してから何も喋らうとしない女性に諂しげな表情を浮かべながら、霧は尋ねる。しかしメイドはやはり何も答えようとせず、「霧へと近づいていく。

「……」

何故だらうか。そのメイドに不安を感じ、霧は一歩後ずさつてしまふ。メイドの手には何もないし、その表情は至つて穏やかなものだ。だといふのに、メイドの顔に何か気迫のようなものを感じてしまう。それはもしかしたら緊張だったのかもしぬないが、突然の事態に戸惑いを覚えている霧では判断のしようがない。

一步、一步と後ずさる霧に気が付いているのか、メイドはそのま

ま霧へと近づいてくる。そうしてあと一歩で霧にぶつかるところにこうじになつて、ようやくメイドはその足を止めた。

霧は改めるかのようにメイドの姿を見た。普段から霧の生活の面倒を見てくれているメイドも整った顔をしていたが、この場に居る彼女はそれよりも更に美しい顔立ちをしていた。まるで神の悪戯で生まれたかのような美しさ、といえば気障すぎるかもしれないが、少なくとも霧は目の前のメイドほど美しい女性を見たことはなかつた。

「で……ええと、何だ？」

何と答えていいのか分からずに、霧は濁つたような声を出してしまう。だが、霧の言葉に反応してか、メイドはここにきて初めてその表情を変えた。それは微笑みであつた。

「突然の訪問申し訳ございません」

そういながらスカートの両端を摘まんで一礼する彼女は、それがドレスのように錯覚するほどに優雅な動作だつた。

「私、本日はノライ様の命令により 夜のお勤めに参りました」

「 は？」

言いながら顔を上げた彼女の台詞に、霧は一瞬頭の中が真っ白になるのを感じた。

今、彼女は何と言つた？ 夜のお勤め？ それはつまり……
そういうことなのか？

如何に霧が女性経験どころかお付き合いの経験もないチエリーボーイだとはいえ、知識でくらいそつちの意味は知つてはいる。霧が戸惑つているのはそれがどうして今、自分がそんな状況に置かれているのかが分からぬからだ。

「あー……その、なんだ。それはライがそう言つたのか？」

「はい」

そんな話聞いてない、と霧は思った。嬉しいとか困るとかそういう感情よりも先に、何故ライがそんな命令をこのメイドにしたのか

が分からなくて、霧はただただ困惑の表情を浮かべる。

「それはえーと、あー……なんて言えばいいんだろうか。ライから他に何か聞いてないか？」

「何か、と申されますと？」

「いや、どうしてこんな……あー、えーと、こんな状況になつたかとか？」

自分でも何を言つているんだろ？と思つが、半ば混乱の域に達している霧の頭はそれに気が付かない。

そんな霧が可笑しかつたのか、メイドはクスリと笑つと、一步近づいた。

「魔王様はおかしなことを仰るのですね。私はメイドであり、貴方は魔王様です。ならば、こんなことがあつても何ら不思議ではない、そうではありませんか？」

メイドが一步近づいて、霧は半歩下がる。

「それとも、魔王様はこういつたことがお嫌いか……私では」不満ですか？」

メイドがまた一步近づく。その一步は先ほどよりも大きな一步だつた。それによつて霧は下がる機会を逃してしまい、今では彼の胸元にメイドの顔がある。彼女は霧よりも頭一つほど小さな体をしていた。全体的に華奢に見えるものの、胸元にある膨らみは確かに豊かさを霧の前に誇つてゐる。近くで見ると、彼女の整つた顔が益々綺麗に見えて、霧はどうとう言葉に詰まつてしまつた。

「もしもそうであれば、素直に仰つてください。私では魔王様にはご満足いただけなかつたと……ノライ様にそう申し上げて違うメイドをお連れ致しますので」

「こり、と彼女は笑う。その顔に対して、嘘でも不満ですとは霧には言えそうになかつた。

そんな霧に対して、彼女は追い打ちをかけるかのように霧に近づき、そして

「ただ、もし魔王様さえよろしければ、私を抱いてくださいま

セ

彼女の両腕が霧をとらえ、抱きしめた。

最初に思ったのは、柔らかい、ということだった。次に何かいい匂いがすることに気が付いて、それが目の前の女性の香りなのだと判明するころには、霧の体はすっかり彼女にとらわれていた。それは肉体的に動けないのでない。状況の面で見て、霧は彼女から逃げられなくなってしまったのだ。

「

一体どうしたらいいのか、何をどうすればこの状況から抜け出せるのか。真っ白から修復してくれない自分の頭で、必死になつて考えるも、霧の頭脳はこんなときには一切役に立たないことが分かつばかりで、現状から逃れる方法は一向に浮かばうとしない。その間にも、自分の背中に回された手はさする様に動き回り、正面では柔らかなそれが強く強く霧に押し付けられている。

「う、あ……」

「……」

まるで動こうとしない霧にもどかしさを覚えたのか、メイドは一度霧から離れた。その行動に一瞬安堵の域を吐こうとした霧だったが、次のメイドの行動に先ほどよりも更に強い動搖が襲つた。ぱさり、と音を立てて、彼女は一息に自身の服を脱ぎ去つたのだ。咄嗟に視線をよそに向ける霧。だが、そんな霧を逃がさないとばかりにメイドは再び霧に近寄ると、その手を取つた。

「さあ、魔王様」

そう言つて、彼女は裸体のまま霧をベッドへと連れて行こうとする。霧は視線を逸らしたままに、焦つて口を開く。

「待つたつ。ベッドにはピコがいるからダメだつ

「ピコ、ですか？」

視線を逸らしている霧は知らないが、メイドは霧の言葉に沿つとうにベッドへと視線を向けていた。そしてその枕元に静かに横たわる精霊族の姿を見て、納得の頷きをした。

「やつですか……では、ピコ様をどこかに移動させるのが先ですね

だが、メイドはその程度ではへこたれない様子だった。彼女は一度霧から手を離すと、ベッドへと近づき、ピコを起こさないようこそっとその両手で掬うと、そのままテーブルの上に置くのだった。霧は彼女の方に視線を向けないので、メイドが何をしているのか見えない。だが、何となく足音の移動で、彼女がベッドからテーブルに移り、そしてまた自分の傍に近寄ってきてることからピコは移動させられてしまったのだろうと予測は出来た。

状況把握だけはきちんとする霧の頭は、しかしこの現状を打破する方法までは教えてくれないらしかった。

「さあ、魔王様、どうぞ一歩らへ」

再び霧の手を握り誘導するその力に何故か逆らひことも出来ず、霧は情けなく裸体を晒す女性に引っ張られていく。そうしてベッド脇についたときに、断らなければという意思をもって霧はメイドを見た。

「

裸だつた。これ以上ないといふほどに彼女は裸だつた。だが、努めて顔より下を見ないようにして、霧は口を開く。

「あー……その、なんだ。こんなこというのも変かもしねないが……帰つてくれ」

何と言つて断れば平穏に終わるか、考えたが結局霧の口から出たのはそんな全てを切り裂くような否定の声だった。

少しの沈黙があつて、メイドが口を開く。

「……それは、私では魔王様のお目に」

「いや、そうじやない。ただ、俺は別にこんな状況を望んでいわるわけではないってだけで、君に不満があるとかそういうわけじゃない」

「でしたら」

そう続けようとあるメイドに手を出して遮る。

「いや、どうせよ今は帰つてくれ

「それは……」

「折角来もらつて、ここまでさせておいて悪いとは思ひ。だが、俺はこんな状況を今は望んでいるわけではない。またライも含めて、後日話し合わないか?」

自分でも何を言つているのか、変なことを口にしていると自覚はあるが、少なくともこれが霧の本音だった。

「……」

メイドは霧の言葉におろおろと視線を泳がしていたが、しばらくして自分がこの場に呼ばれていなことに対する考えが至ったのか、寂しそうにため息を吐くと、視線を霧に合わせて言つた。

「では……私はこの場には相応しくないということですね……」

それは、心の底から辛そうな声だった。メイドであろうとも、女性にこんな表情と声を出させてしまったことに、生まれて初めて霧は味わつたことのない後悔に苛まれた。だが、今ここで事に及ぶことだけは回避出来たのだと、内心で安堵していた。

が、次の瞬間、メイドは霧に抱き着いてきた。

「……どうしても、どうしても抱いては頂けませんか?」

それはまるで魔法の言葉のように霧には聞こえた。この言葉を否定することなんてできる者がいるのだろうか? それほどの威力を持つたメイドの声に、霧はただ黙つて首を振つた。それは否定の仕草だった。

「……」

「……」

しばしの間。しかしそれは霧にとつて拷問のように長く長く感じる時間だった。霧は喋らない。メイドも喋らない。気まずさだけが支配するその時間の中で、ながい沈黙の後、メイドは口を開いた。

「かしこまりました……」

そう言つて、抱き着いていた手を放す。同時に柔らかさを感じていた胸元からも熱が去つていくを感じ、ようやく霧は安堵の息を

吐いた。安心して、気を抜いてしまった。

だから、次にメイドが口にした言葉の意味を理解する間もなく、
彼にそれは襲つてきた。

「では 死んでください」

「え？」

熱を感じた。それはさつきのような抱擁される温もりではなく、
激しい熱さを伴つた確かに痛みだつた。

一体何が起きているのかと痛みの箇所に視線を向けると、そこには

「え あれ ？」

腕が生えていた。霧の腹から、メイドの腕が生えていた。
途端に崩れ落ちる。膝を着き、腕が抜けた腹に手を置く。

「なん あ ？」

「素直に従つてくれていたら気持ちいい思いをしていく間に始末し
てあげたのに、バカな子ね……」

視線を上げると、肘から先がナイフのような形態になつた腕
を、そこにつけた霧の血を舐め取るメイドの姿があつた。

十三話（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

前回情けなくもおねだりした感想ですが、書いてくださった方々
ありがとうございます。どうぞよろしくお願いします。

お気に入り登録も増えてきてPVも一万を超えた。これも見
てくださっている方々のおかげです、ありがとうございます。

今後もできる限り毎日更新をを目指して頑張りますのでど
うかよろしくお願いします。

あ、感想いただけたらうれし（ターン

そろそろ就寝の時間だらうかと、ライ・ノライは外の暗闇を見て思つた。普段であれば書類の処理を始めると集中してしまつて気付いたら朝日を拝んでいたということも珍しくないライであつたが、今日はある意味おめでたい夜になるといふこともあつてか、裁可を下していた手を止めた。

霧がどちらの女性を好みとするのかは定かではないが、恐らくは今頃極楽の世界を味わつてもらえていることだらうと、ライは頬を緩ませる。万が一にも両方を拒否していたら明日はいの一一番に謝罪に向かわなければならないだらうが、霧が普通の感性をもつ一般男性であるならばそれはないだらうとライは思つてゐる。

魔族というのは人間族から魔素という成分によつて肉体的、精神的に変化を経た種族ではあるが、元々が人間であつたためか、元来持ち合させていた三大欲求というものがそのまま残つてゐる。食事や睡眠をせずとも生きしていくことは出来るが、それでも魔族のほとんどは人間と同じような嘗みを送つてゐる。それは性欲に關しても同じで、先日の城下街散策ではカコが案内しなかつたようだが、場所によつては花街のような場所だつて存在してゐる。

だから、ライは霧が拒否することはないと確信に似た思いを抱いていた。だが、それでも霧がどちらの女性を選んだのかくらいは気になつてしまつ。それは今後送り出す本命の判断材料になるからだ。

「ふふ……」

そう言えば自分も若いころに 今も魔族としては十分若い部類に入るが 父親に連れられてそういう経験をしたものだと懷かしむ。浮かれていたわけでもないし、特別興奮していいたわけでもないが、初めてのあの時間は夢のようだつたと今を以てしてもそう感じる。霧にもそんな時間を味わつてもらえたのならこの上ないとライ

は思つのだ。

「さて、魔王様は一体どんな女性が好みか」

手元に置かれた鈴を鳴らす。もう既に送り込む予定のメイド一人が霧の私室の入っているならば、どちらか片方は部屋から追い出されてもおかしくはない。伝言を頼んだいつものメイドには結果がどうなったかを監視させていたので、その報告を聞こうと思つたのだ。

しかし、いつもならばすぐにノックの音が響くはずの室内には鈴の音の韻だけが残るばかりで、メイドが現れる様子がない。

「？ おかしいですね」

訝しげにしながら、ライは扉を開く。そこから身を出して廊下の左右を見るも、誰も居る様子はない。

もしかしたらまだ霧の部屋から誰も出てきていないので監視を続けているのかも知れない。そう思つたライは体を室内に戻そとし、視界に入ったとある人物に足を止めた。

「……」

それはメイドだった。顔立ちもよく作法もきちんとした立派なメイドの一人だ。だが、そのメイドは本当であればここではなく霧の部屋に居るはずのメイドでもあった。

「君」

ライはそのメイドを呼び寄せる。突然ライに呼ばれたメイドは慌てて近づくとスカートの端を摘まんで一礼をした。

「お呼びでしょうか？」

「ええ。どうして貴女は今ここにいるのですか？」

「え？」

ライとしては当たり前の質問をしたつもりだったのに、逆にメイドからは理解できないと言つた風の表情を向けられてしまう。

「どうしました？ 貴女には確か魔王様のところへ行くよう伝言伝がいつているはずですが」

「あ、はい。確かにその顔は伺いましたが、そのすぐ後に今夜では

なく明日行くよ」と変更を告げられましたが、……

メイドの声が尻すぼみになつていい。それは言葉を聞くにつれてライの表情が硬いものに変わつていったからだ。

「あの……私何か粗相をいたしましたでしょうか?」

「ああ……いえ、そうではないんです。一つ聞きますが、貴女に変更を告げたのは誰ですか?」

「それは、」

メイドの口からは、確かにライが言伝を頼んだいつものメイドの名前が出てきた。

「わうですか……引き止めて悪かつたですね。もう行つていいですよ

」「はい。それでは失礼いたします」

礼をして去つていくメイドを、しかしライは既に見ていなかつた。眉間に皺を寄せ、顎に手を当てたライは思案に暮れる。

「……」

一体どうこうだらうか。少なくともライは明日にするという変更をあのメイドに告げたつもりなどはない。自分の命令にどうか齟齬を生ませるようなことが含まれていたかを思い出すが、そんな言葉は見当たらなかつた。であれば、変更を告げたのはライではなくあのメイドの独断ということになる。

ならば何故? 何故そんな独断をしなければいけなかつたのか

「もしや エクスデーペー」

ライは探索の魔法を唱える。探すのはもちろんあのメイドだ。

この探索の魔法は誰がどこに居るのかを探すというよりは、その存在の方向を意識的に示してくれるところなのだ。ビビビのどこにいる、という風に知らせるのではなく、ここを真つ直ぐ行つて次に右に曲がつて、などという様にナビゲートしてくれる魔法だ。

ライは走り出した。魔族として上位に位置するその身体能力を以て、示された方角へと疾走していく。

嫌な予感　それが外れてくれるのことを祈りつつ、ライはメイドの元へと走つて行つた。

「どうして、つて顔してるわね、魔王様？」

さもおいしそうに自分の腕　刃物と化したそれを腕と表しているのならだが　についた霧の血を舐めるメイドは、先ほどとは打つて変わつた口調と態度で霧を見下している。そこには敬いも何もかもがなく、虫けらでも見ているかのような酷薄な視線だけがある。

霧は喋れない。全身の力という力がどこかに吸い取られてしまつたかのような感覚に、意識を保つだけで精一杯だつた。押さえている腹に当てた手が厭に生暖かく感じる。痛いはずなのに、痛みは熱さとしてだけ存在して霧を襲う。その熱さは沸騰した湯さえ意にも介さないほどの辛苦を以て霧を苛んでいる。

そんな霧の様子など知らぬとばかりに、女は腕を光に当ててうつとりとした表情を浮かべた。

「ああ……綺麗。魔王様の血つていうのも何だ、人間と変わりない色しているのね。でも、ふふ……綺麗だからまあいつかあ」

女が何を言つているのかが分からぬ。耳には届いているのだが、言葉が意味として理解出来ないのだ。霧の頭の中では何か甲高い音を間近で聞かされたときのような変にしつこい音のようなものが鳴り響いている。

ぐわんぐわんと、何かが鳴つてゐる。腹が熱い。けど、それ以上に頭が痛かった。

「お……」

ようやく、といった体で霧からようやく洩れたのはそんな声だった。

「ん？ なあに？ 遺言でも残したいのかしら？」

そう言いながら女は裸のまま霧の前にしゃがみ込んで顔を覗き込んだ。女の胸が膝に潰されて卑猥に映る。普段であれば蠱惑的だろうその恰好も、この状況に至っては不気味さを助長する要素しか孕んでいない。

「お……まえ……なん……で……」

「ああ、そういうこと？」

納得がいったように女はこれ以上ないほどに美しい微笑みを浮かべるが、刀のような形状だった腕を元に戻して霧の頬に触れた。一度、一度とその頬をさすり、女は言ひ。

「なんでって言われても困るけど、貴方は自分の価値つものが理解出来る？」

自分の価値。そんなものは霧には答えられない。いや、知識としてならば魔王の息子であるといつ返答は出来ただろう。しかし霧自身がそれを受け入れてない状況を答えとすることは彼には出来ない。

自分の頬が自身の血で塗れていくのを振りほどいてもできず、霧は女の成すがままになっている。

「んふふ、分かつてたらこんなことはなっていわないわよねえ？」

「ふふふ、あは」

何が可笑しいのか恍惚と表情を染める彼女の笑みは益々深くなつていく。

「いいわあ、今氣分がいいから教えてあげる。いい？ 貴方は魔王なの。例え力が弱かるうと、今こうして私に跪いていようと、かのアミリア・エクスースクラ、ライ・ノライ、カコ・イクオールに認められているれっきとした王様なの」

「だけど、と女は言ひ。」

「実はこれ、たった今この瞬間を迎えるまでは私も分からなかつたことなのだけど、どうしてか貴方は魔王としての力を持つていない。そして貴方に魔王となつてもらつては困る者もいる。私がこうしているのはその人からの依頼なのだけど、正直最初は『冗談じやない』って思つたわ。魔王つていつたら絶大な力を持つてゐるのよ？ 例え万の軍勢を揃えたつてその足元にも及ぶことが出来ないと言われている魔王を殺せ？ あはは、『冗談じやない』けれど、まあ私も依頼主には逆らえなくてね、こうしてこの国に忍び込んで色々と調べてみたら魔王様が訓練をしているつていうじゃない？ 笑つたわ。魔王が訓練？ つは、これが冗談じやなくつてなんだつていうの」

女の言葉は支離滅裂で要領を得ない。興奮してそうなつているのか、それともこれが女の素なのか。

そんな女の話を半ば朦朧としつつある意識で聞きながら、霧はこの場をどうするべきかを考えていた。誰か それこそ外で待機してくれているだろう近衛兵を呼べば話は簡単に收まりそうではあるものの、肝心の腹に力が籠められそうもない。逃げようにも立ち上がるこことすら困難な今の状況ではそれを成すことは出来ないだろう。

それより何より、今にも落ちてしまいそうな意識を保つことが辛い。嫌な脂汗が額から目横を伝つて流れしていくのを感じた。

「ねえ、教えてくれない？ 貴方魔王なのでしょう？ なのにどうしてそんなに弱いの？ 私の肉体変異で刺さるような軟な肌を持つてるなんて面白すぎるわよ？」

そんなこと知つたことか、と霧は思つ。反抗するように視線を上げて睨みつける。

「

次の瞬間には霧の顔は地面に横向きに倒れていた。一体何がと思うも、頬に感じる腹とは違つた熱に、殴られたのだと気づいたのはすぐだった。

「駄目よだめ。そんな目をしたら私興奮しちゃうでしょ

ぐわんぐわんと視界が回る。意識が混濁していく。これ以上は持たない、と霧が思ったその時、

「あーっ！」

ピコの声が聞こえた。霧が殴られた音で目が覚めたのか。だが、今の状況ではそれが幸いとは霧には思えなかつた。

「霧に何するのーー めー、めーよ！」

霧の顔の前に飛んできて、両手を広げてまるで守るかのようにするその姿。ほんやりとする視界の中でそんな彼女の姿を見て、霧は喜びや安堵を感じる前に、逃げろ、と思つた。

「……こ、じお……」「

「めー！」

絞り出した霧の声はピコに届くことはなかつた。

「あり可愛い精霊ちゃんだと。でも駄目よ、私は今魔王様とお話しをしてるのちよつとビtocてくれる？」

「やつー！」

「そつ~」「

女の声が低くなる。ダメだ、と手を伸ばそつとしたが、その手はピコに届くことはなく、刹那 彼女の姿が消える。

「」

痛みを忘れて、思わず叫びそつになつた。彼女は、ピコは、霧の目の前で女に蹴飛ばされてしまつたから。そんな状態でも、今の霧に出来るのは自分を見下ろす女を睨みつけることだけだつた。

「あらなあに？ 何かいいたいことがあるなら

と、女はワザとらしく足を振りかぶり、

「言葉にしてはいかがつ？」

霧が押さえている腹を思い切り蹴飛ばした。

「 つあ！」

悶絶し転がる霧。もはや痛みは痛みとして認識出来ず、自分の体がどうなつていいのかすら分からない。

そんな、落ち物になる痛みの中、地面に横たわるピコの姿が見

えた。霧は感覚すら失せた体に精いっぱいの力を籠めてそこに近づこうとする。だが、女はそんな霧を踏みつけて動きを抑えると、どこか愉快そうな声で言ひ。

「んー、いい表情。そいつの苦痛にもがく姿、そこいつひー……でも、あんまり長いし過ぎると近衛が来ちゃうかもしれないしねえ……ああそうそう、扉の前の近衛を期待しているなら駄目よ？ 彼らにはちよつと長く眠りについてもらつたから」

んふふ、と女は笑う。

「でも流石に私もイクオールなんかに来られるヒヤヒヤいそつだからそろそろお暇しようかと思うの。そ・こ・で。魔王様？ 何か言い残したいこととかしてほしことあるかしら？ 短い時間で済むならば何でもしてあげるわよ？」

答えられるはずもなかつた。既に霧の意識は落ちる寸前で、女が何を言つているかもおぼろげにしか理解出来ていないのでかい。

「あら、答えられない？ んー……それじゃあ面白くないわねえあ、そうだ」

何かを思いついたのか、女は霧の顔の前にしゃがみ込むと、満面に笑みを浮かべて言ひ。

「最後なのだから親子の別れって大切よね？ だから、こんなのはどうかしら？」

言しながら、女は手のひらから腕を使って、自分の顔の前を遮るように通した。そして手がどいたとき、そこにあつた顔はメイドのものではなく、

「……どうですか、よく出来ていると思いませんか？」

霧を息子と呼ぶ、アミコア・エクスーケワの顔がそこにはあつた。

「痛いでしょう？ でも安心してください、私が今その苦しみを取り除いてあげますからね 坊や」

瞬間、自分でも分からぬ何かが胸の奥底から湧き上がつてくるのを霧は感じた。今までに感じたことのない何か。全身が激しく鼓

動している。傷を負つて いる腹よりも頭が熱くなつて、まるで自分が自分でないような感覚。

「それでは、さよなら、坊や」

女は再びその手を刃に変えると、アミリアの顔のまま、柔和に微笑み、振り下ろした。

そして

夢を見ていた。これが夢であると理解出来たのは、いつか見た光景が目の前で流れているからだった。

霧は見ていた。視界には幼い自分が喧嘩をしている姿がある。相手は同じクラスの少々やんちゃなメンバーで構成されたグループだつた。しかし、五対一という圧倒的不利な状況にも関わらず、自分は逆に圧倒的な力でもつて五人を蹴散らしていた。

場面が変わる。小学校の校長室で、自分と母親、そして自分が殴り倒した五人の同級生と、その親が集つていた。自分の母は何度も何度も五人の親に頭を下げていた。自分はそんな母を見て、どうして頭を下げるのかわけが分からなかつた。五人の親はしきりに自分にも頭を下げる様に言つてくるけれども、悪いことをしていないのにどうして頭を下げなければいけないのか。そう言つと、ますます自分の母が責められて、どうしていいのか分からなかつた。

ただ、そんな中でも理解出来たことがある。自分が強いから、五人は喧嘩を売つてきたのだと。自分が勉強出来るから、五人は自分のことを気に入らなかつたのだろうと。幼いながらに周囲と一線を画した理解力を以て、そう判断した。

母がいつも困った顔をしているのも、疲れた顔をしているのも、こんな自分が原因なのだろうな、と思った。

そう思っている自分を、霧は見ていた。幼い自分は酷く冷めた表情をしていて、でも母と一人帰る帰り道で、心配そうな視線を母に向いている。母は何も言わず、ただ微笑んでいるだけだった。

そうして数週間後に、母は亡くなつた。白い部屋の中で見た母の顔は、無表情なのに何故か疲れているように見えた。

母の死を見て、感じて、理解して、幼い自分は思ったのだろう。

自分がこんなに頭がいいから母は苦しんでいたのだ。

自分がこんなにも強いから母は苦しんだのだ。

自分が、周りと違っているから母は死んだのだ。

次の日から、どこにでもいる普通の霧が居た。きっと自分は、自分の優れた部分を封印したのだろうと、その様子を眺めていた傍観者の霧は思つた。

だから、それからの霧は努力というものを嫌つた。どうせ頑張つてもその先にある結果といつものに何の価値もないことを知つていたから。

だから、それからの霧は協調というものを嫌つた。どうせ一緒に居たつて本当に理解しあえるといつことはないと分かつっていたから。

だから、霧は何の特徴もない、平々凡々な人間として成長した。それが、亡き母に報いる唯一の行動だと思っていたから。

場面は変わる。

それは霧が現代の世界に移動させられる寸前の映像だ。

アミリアが泣きながら自分を魔方陣の中に入れている。そうして魔方陣の中に囚われた自分に、何度も何度も謝りながら懺悔を繰り返している。

自分は何もできなかつた。まだ幼い自分は力の使い方をきちんと覚えていないのもあつたし、突然の事態に動転していたのだろう。その気になれば魔方陣くらいであれば壊すことが出来ただろう力も、

この時は意味もなく魔方陣の光を叩くことしか使われていない。場面が変わる。

霧は自分が死にそうになつていてその瞬間を見ていた。裸にアミリアの顔をとつてつけたようなメイドが、自分を殺そうとその手を振り下ろそうとしている。

霧はその瞬間を見て 不快感を覚えた。自分の母といつアミリアの姿で、あんな醜い笑みを浮かべていることもそうだし、アミリアが自分を殺そうと いうその姿が我慢ならなかつた。

少なくとも、アミリアは自分のことを息子として愛しみをくれていた。常に自分のことを思ひ、考え、行動をしてくれていたのを、霧は感じていた。

その 優しいアミリアの姿で自分を殺そうとしている。それが何よりも許せなくて、霧は

振り下ろそうとした手が何かに阻まれるのを感じ、女は自分の手に視線を向けた。そこでは自分の攻撃を見えない壁が阻んでいる光景があった。

「ちつ」

咄嗟に手を引いたその場から飛びずさり、改めて自分が殺そうとした相手を見据える。霧は未だに腹から血を流して倒れこんでいるが、その周囲には何かの力場が発生している。一体何が起きたのかと女が霧の様子を眺めていると、ふとあることに気が付いた。

「魔素が……流れ込んでいる?」

周囲に漂う魔素が猛烈な勢いで霧の元に流れ、そして吸い込まれ

ていつてゐる。それが意味するところを察し、女は反射的に魔法を唱えた。唱えたのは強化の魔法だ。自分の肉体をより頑強に、より頑丈にするための魔法は、確かな効果を發揮した。先ほどから鋭くとがつていた腕はより鋭く、今では鈍色に輝いている。鉄ですら容易に切り裂く威力を秘めた自分の腕に確りと力を籠め、女は飛んだ。天上間際まで飛び上がり、重力に引かれてそのまま霧の元へと降りる力を利用して刃の腕を振るつた。

貫く筈だった。力の使い方も碌に知らない目の前の坊やを亡き者にするはずの己の腕はしかし、またもや見えない力場に邪魔をされ動きを止めていた。

「……」

と、力場を形成したまま、地面に伏していた霧の体が動いた。最初は顔を上げ、上体を起こし、ゆっくりと立ち上がる。

霧は初め、女の姿を見ていたが、ふと気が付いたかのように自分の腹を見ると、そこに手を当てた。血が流れ出していたそこは、霧が手を当てるごとに段々と血の流れが収まつていき、最後にはとうとう完全に傷がふさがつてしまつた。

まずい、と女は思う。この魔素の取り込む量といい、今の治癒術といい、明らかに自分が手におえる領域を超えようとしている。魔族の強さとは魔素を如何に取り込めるかで決まる。その点でいうと、今の霧が取り込んでいる量は公爵級貴族の量を既に超えようとしている。

女は即座に逃げることを決断する。動こうとしない霧からジワリジワリと移動して、脱出経路を頭で描き出す。扉から出て真っ直ぐに進む。先ずはそこからだ、と思い切つて走り出そうとした次の瞬間、女は強い圧力に吹き飛ばされた。その勢いは女が壁にぶつかり、罇を入れることで止まつた。

「くつ」

どうやら逃がしてくれる気配ではないと女は覚悟を決めたのか、今度は量の腕を刃と化した。そのまま勢いよく飛び出し、霧に向か

う。強化の魔法によつてその動きも俊敏になり、目にもとまらぬ速度を生み出す。三歩でその距離を詰めた女は力場によつて邪魔されるのを承知でその両腕を叩きつけた。予想通り弾かれる腕。しかしそれを意に介さず女は何度も何度も腕を叩きつけた。

己の身を守るためにこうした不可視の力場を用いるのは魔族ではありがちな防御手段だ。同時に、その攻略方も判明している。単純にその許容量を超えるダメージを与えてやればいいのだ。そうすれば力場は必ず崩壊していき、再びそれを形成するまでには時間がかかる。

女が狙つているのはその崩壊の瞬間だつた。何度も何度も高速で叩きつけ、力場崩壊を待つ。問題はその間に霧が攻撃してこないかどうかだが、何故かは分からぬがその様子は見られなかつた。霧は茫洋とした視線を女に向けているだけで、何の反撃もしようとはしない。

それを好機と見たか、女は更に速度を上げる。自分の出せる限界の速度を以て霧の力場を破壊しようと責める。

そしてその時が来た。僅かに鱗が入るのを感じて覚え、女は最後の一撃と全力で刃の腕を叩きつけた。

割れる力場。晒される霧の体。

もらつた。

女は頬を歪ませながら、霧のその首元を狙つて腕を振るつた。血が迸り、辺りには濃い鉄さびの匂いが漂つ。

はず、だつた。

「な……！」

しかし、女の腕は霧の首元で止まつていた。まるで先ほど壊した力場を殴りつけているかのようなその感触に、女は啞然と動きを止めてしまつた。

それが隙となつた。突然伸びてきた霧の手が女の首を掴む。

「あぐっ！」

持ち上げられる女の身体。恐るべきは霧のその腕力か。たつた一

本の腕で細身とはいえ一人の女の身体を持ち上げている。

女は必死にその手から逃れようとすると、まるで岩か何かのように霧の腕はびくともしない。切り付けても叩きつけても跳ね除けようとしても、霧の手はその魔手を離そうとはしなかった。

「くあ……ああっ！」

突然霧の手に込められる力が強まる。その力はどれほどのものなのか、抵抗していた女の手が元の形に戻り、霧の腕を掴む。しかし霧の手の力は緩められることもなく、更に更にその力を増していく。

「あ……あ……」「あ？」

段々と女の声が細々としたものに変わっていく。それは女の意識が落ちるカウントダウンなのか、霧の腕を掴んでいた手も今はだらりと力なく垂れ下がっている。その口元からはまだれが零れ落ち、今にも気絶しそうな顔を女は晒している。

「ぐげはっ、かはっ、はっ！」

ようやく自由となつた女は咳き込みながらも存分に息を吸い込んでいく。喉に手を当てるど、はつきりと分かるほどに霧の手の跡がついていた。

助けられた？

女は疑問に思う。殺そうとしていた相手を見逃そっとでもいうのか。確かにこの魔王の評判を考えるとそれもあり得そうだが……と女が思つた次の瞬間、更なる絶望が待ち受けていた。

霧は女に一步近づくと、突然顔面を蹴りつけた。

「あっ！」

吹き飛ぶ女。仰向けに倒れたその女に、更に一步近づいて霧はその脇腹を蹴りつける。

「っ！」

その威力はつい先ほどまで人間とさして変わりないものだった霧

のものは打つて変わつて、上級魔族もかくやという威力を秘めたものだつた。必死にその攻撃から身を守るひと女は体を丸くするが、それすら破壊しようと霧の蹴りが続く。

しばらく、打撲の音が室内に響いた。霧は空ろな表情のまま女を蹴り続け、女は何とか致命傷を避けようと必死に己の身体をかばう。

と、同じ攻撃に飽きたのか、霧が突然攻撃を止めた。瞬間、女の身体が跳ねた。即座に起き上がった女はそのまま全速力で扉へと向かう。残り五歩、四歩と近づく扉。ようやく逃げられる、と思つた女はしかし、魔王の手からは逃げられなかつた。

突然襲う拘束感。女の身体は走る体勢そのままに、空中に留まつてゐる。それを成したのが誰なのか、振り返るまでもなくその正体は分かりきつっていた。

「く……」

伸ばした手を握りこんだ体勢で、霧が笑う。

「くはは……どうした、逃げないのか、女」

それは残虐な声だつた。生きとし生ける者全てを滅さんとするかのようない凄絶な声だ。

霧は握りこんだ手に更に力を込める。

「ぐつあああ……」

それに反応して、女の身体を襲う拘束感が強まつていく。霧の手と連動するその拘束魔法は、もつあと僅かに力を籠めるだけで女の身体を潰しきつてしまつだらう。

「た……あすけて……」

「く……くく……」

女の懇願の声も、今の霧には心地よい音色にしか聞こえないのか。

霧はその声を聞きながら一步一歩、ゆっくりと女に近づいていく。

その最中、じわりじわりと握る拳に力を込めることも忘れずに。

「あ……ああああっ！」

霧が一層力を込めると、女の悲鳴が上がつた。それすらも心地い

いとばかりに霧は微笑みを深くし、更に一步近寄りつとして、

「

足を止めた。その足元には、先ほど女が蹴り飛ばしたピコの姿があつた。気絶しているのか、ピコはピクリとも動かない。

危うく踏みそうになっていたその足を退けると、霧は握りしめていた拳をほどき、ゆっくりとしゃがみ込んだ。

扉の前で空中に停止していた女の身体が地面に落ちるが、そんなものは関係ないとばかりに無視した霧はそつとピコの身体を両手ですくい取った。

「……」

氣絶するピコに何を思うのか。霧は空虚な表情のままで彼女を見下ろす。そつと、優しく人差し指でピコの頬をさすると、

「

魔法の言葉を呴いた。それはライヤシャルが以前霧に使った治癒の魔法だった。ただしそれは比べ物にならない効果を以てピコの傷ついた体を癒す。

ピコの身体が完全に癒されたのを確認して、霧は立ち上がった。そのまま手の中のピコに振動がいかないように慎重な足取りでベッドに近づくと、枕の上にそつとその体を横たえた。確かな愛情が感じられるその扱いは、きっとピコが目を覚ましていたならば喜びに満面の笑みを浮かべていたことだろう。

ピコがベッドの上で安らかな寝息をたてていることを確認すると、霧は踵を返し、未だ扉の前でうずくまっている女に近づいた。

「……」

女は疲弊しきつているのか、霧が近づいてきたといつのに逃げようともしない。

「ふん

その女を、霧は乱暴に蹴り飛ばした。溜めも振りもない、立った状態のままの蹴りだというのに、女の身体は部屋の壁にまで吹き飛んだ。再び壁にひびを入れてずり落ちていく女の身体。ぴくりとも

しなくなつた女を見て、霧は詰まらなそうに鼻を鳴らした。

「下らん。この程度で誰の命をその手にしようとしていたといふの

か」「ゴミめ」

そう口にした次の瞬間、霧の身体が落ちる。まるで女に腹を貫かれた時のように膝を着いて、更に耐え切れなくなつたのか両腕で体を支えてた。

「……ふん、限界か。まだこちらに身体が慣れきつてはおらん、か

……」

霧は口辺に笑みをたたえた。

「浅間霧よ。早く体を戻さぬときつと貴様は後悔するべ。この世界はそんなに優しく出来てはおらんのだからな」

くつくつと霧は笑う。

「まあいい。これは俺が考えることではない。精々足掻き、もがけ浅間霧よ。その時はもう間近ぞ……」

そう言つと、身体を支えていた力が抜けたのか、霧の身体が崩れ落ちた。

室内に沈黙が下りる。霧は倒れ、女は崩れ、ピコは眠りについている。誰も動かない室内。

その時、突然扉が開かれた。普段であれば音を立てずに開かれる扉はまるで蹴りやぶろうかといつ勢いで押し開かれた。

「魔王様！」

そこに姿を現したのはライ・ノライだつた。背後に近衛兵を連れたライは室内の状況を把握すると、一寸散に霧の元へと近寄つた。

「魔王様！」

うつ伏せに倒れる霧を抱え起こし、外傷がないかを確かめる。腹部分の服が破れていることと、その血の量に目を見開いたが、触つて傷がふさがつていることを確かめると安堵の息を吐いた。

「取り敢えずは問題ないか……」

それだけを確認するとライは今度は女へと視線を向けた。

「……あの女の身柄を確保してください。くれぐれも取り逃がさな

「いよいよ厳重に牢に繋いでおいてください」

『はっ！』

近衛兵が女の腕に拘束用のロープを取り付けて牢へと運び始める。

ライはその様子を眺めながら、ぼそりと呟いた。

「……まさか、ここまで侵入を許してしまつとは……ノライ失格ですね、私は」

後悔に苛まれるライの呟きを聞く者はいない。苦痛に歪んだ表情を見る者はいない。

こうして、霧の初夜は過ぎ去つていくのだった。

十四話（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

スランプ気味です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0702y/>

最弱国家の魔王様

2011年11月20日03時22分発行